
国見の短編集

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国見の短編集

【Nコード】

N7379M

【作者名】

国見炯

【あらすじ】

連載前の試し小説・短編等です。基本読みきり（最近のプロローグ的なお話が増えてきました）で、書きやすかったらそのまま連載として書くかもしれません。

※短編によって注意書きがありますので、それを参照して下さい。話しによっては逆ハーや残酷表現等もあったりします。

アオフジの色彩と（前書き）

・ 主人公リノアの物語り。地味な見た目の彼女は地味な生活を好む半引きこもり。

それが、何故か見た目が派手で人目を引きすぎる男に好かれ、付き纏われる羽目に。そんな彼女と男の出会い編です。

アオフジの色彩と

可もなく不可もなく。

見た目は中の中。

性格は地味。

歩いていても、誰も私に気づかない。

そんな、見た目も中身も華がない地味で何処にでも転がってるような存在。

どちらかというと一人作業が好きで、自室に籠って出来る仕事を選んだりした。

学院は出た。

見た目も中身も地味ならば、せめて教養だけでも、という親心。それについては感謝をしながらも、私は早々に実家を出て一人暮らしをしている。

今、私は一人でいる。

18で卒業。今は25。

ここまでだと、私はブスで引きこもりのようだけど——私は今の生活が好き。

好きなものを作って納品して、本を買って読んでまた作って。誰にも縛られない自由が好き。

ちなみに、容姿は今更気にしない。

化粧を塗りたい趣味もないからこのまま。

部屋の中から必要ないし、そんなものを買うぐらいなら本を買う。だって好きだし。

そんな時、私は一人の男と出会った。

その場にいるだけで強烈に視線を引き寄せる華のあり過ぎる男。

はつきり言って要注意人物。

平穩な私の日常には決して足を踏み入れてほしくない、そんな男。

なのに。それなのに。

どして私は存在を覚えられちゃったんだろう……

「よし。これぐらいでいいよね」

お店に納品する品の山を見つめ、満足げに言葉を紡ぐ。

山の一部を切り崩し、一つずつ丁寧に袋につめた後、種類別に箱へと詰めていく。こういう地味な作業をしていると心が癒されると、心底リノアは思っていた。

適当に切られた髪。梳かせばそれなりに見える色素の薄い髪は無造作に束ねられるだけ。瞳の色もよくよく見れば宝石のような変わった色をしているのだが、それも顔の半分を隠す前髪によって完全に隠されている。

服装は白の上着に、濃紺のパンツに踵のない靴。皺がよっている衣服を誤魔化すために、もらった外套を身につけた。

最近買った魔器具の移動楽々ボックスに箱をつめると、操作の腕輪を腕へとはめて外へと足を踏み出す。

地面から1cm程浮いた楽々ボックスは腕輪の後をついてくるように、リノアの隣を寄り添いながら一緒に動く。これを見た時は絶対欲しい！と決めて、一緒懸命貯めて購入したのだが、その価値は十分あると今でも満足している。

持ち運びが楽で、耐久度も抜群保障もバッチリの魔器具。少々値段が張るのだが、それは当たり前だと思えるサービス内容。

「（くふ。お店の人も丁寧だし、今度もあそこで買おう）」

傍から見ると不気味な笑いを浮かべているのだが、表情が出にくいのか誰も彼女を見ていないからなのか、誰にも気づかれずに目的の店へとたどり着く。

「こんにちわー」

カランコロンとドアベルを鳴らしながら中へと足を踏み入れ、リノアは楽々ボックスをカウンターまで移動させる。

「あら、リノアちゃん。いらっしやい」

「こんにちは、メリアさん」

ちなみに、メリアさんは何処から如何見ても美青年のお兄さん。常盤色の髪に黒の瞳。見た目は、という言葉が入るが、一般的に見て性格に難があるうとも、リノアはメリアの事を気に入っていた。名前が似ているという理由で、リノアの世話を焼いてくれるメリア。

多少人嫌いな所はあったとしても、メリアの気遣いを嫌と思った事はなかった。

「今日は沢山持ってきましたよ。リクエストのあった鞆や小物なんかも色とりどりと準備してみました」

箱から出して、品物を何点かメリアの前へと並べてみせる。

「あら、素敵。今回はリボンやレースがメインなのね。このレースの細かさ。素敵だわ」

純白のポシェット一つ手に取り、メリアはうっとりと言。

既に独自の世界へ旅立っていったメリアはリノアの言葉を必要とせず、次々と手に取り感想を言いながら手早く値段と置く場所を決める。

そして品定めと感想が終わると、改めてリノアを見たかと思うとギョツと抱きしめた。

「ありがとう。可愛いわ。素敵だわ。メインで置かせてもらうからね」

「こっちこそありがとうございます」

抱きしめられた感触が甘やかされているようで、リノアは笑みを浮かべメリアの背中へと手を回す。

実際、リノアはメリアにとっては妹のような存在だった。ひたすら猫かわいがりをしたい相手。ただ、リノア自身がしっかりとした性格の持ち主だった為、猫かわいがりは制限されているのが現状だったりする。

「あ、そうだ」

モゴモゴとメリアの腕の中で動き、ひょこっと外套の内ポケットから小さな紙の袋を取り出す。

「これ、メリアさんにです」

「何かしら??」

受け取る為に仕方なく腕を離し、メリアは中身を確認してみると…

「きゃあ。綺麗ね。どうしたの??」

編みこまれた白の革に、小さな宝石が散りばめられた腕輪。

「試作品です。こんなのも作れるようになりましたっていう…それですね。よければメリアさんに…」

リノアは最後まで言い切る事が出来なかった。

感極まったメリアに再び腕の中へと閉じ込められ、感激という名の抱擁を受けまくりながらもジッと耐えていた。多少苦しかったり痛かったりするけれど、ここまで喜ばれると職人冥利に尽きると思うわけで、そうでなくてもメリアの温もりは嫌いじゃないので耐える所かやっぱり嬉しいと思うのだ。

「可愛いわねえ。ねえ…リノアちゃん。あのね…」

「ん。どうしました?」

ぷはっとメリアの胸から顔を上げ、酸素を肺に送り込みながらメリアの顔を見上げる。

黒の瞳はいつになく真剣さを宿していて、何かあったのかと不安に思いながらも次の言葉を待っていた。

「おーい。メーディルア。何やってんの？」

その言葉の続きを言うよりも先に、店内に男の声が響く。

誰もいなかったはずの店内に、いつのまにか気配もなく立っている男。

リノアはメリアの腕の中で見上げていた為、背後から聞こえた声の主を確認する事は出来ず、ただ、表情を崩したメリアを心配そうに見つめた。

「やーね。アタシはメリアよ。その名前で呼ばないでちょうだい」

心なしか、リノアを抱く腕に力が入る。

「メーディルアだろ。どっからどう見ても。まったく、騎士団辞めて何やってるかと思えば趣味に走ってんのかよ」

男は店内を見回し、改めてメリアを真っ直ぐに射抜くように見つめる。そして気付いた。大切に抱きしめられている存在に。

「お前って女平気だったっけ？ 確かダメだったよな？ で、それ誰??？」

男はメリアに対して親しげ——というよりは不躰にリノアは感じてしまったが、メリアが何も言わないので黙っておく。とりあえずは。

「アンタには関係ないわよ。まったくいつまで経っても不躰な男ねえ。見ちゃダメよ。アイツは歩く子宝機って言われてる無節操野郎

なのよ。貴方が穢れちゃったら大変」

リノアの外套のフードを頭へとずっぱり被せると、くるっと身体を入れ替えて店の奥へとリノアを引っ込める。

「待っててちょうだい。直ぐに追いつくから。そしたらまたお茶でもしましょ」

あまりにメリアがリノアの存在を隠すので、それに習いリノアも声は出さずに頷き、店の奥にある休憩所へ逃げるように入っていく。

「で、何の用だ？ お前まで引っ張り出すって事は相当暇なのか。税金泥棒になる前にちゃんと、しっかり働けよ」

リノアがこの場から消えた瞬間、メリアは凍えるような視線を男へと向けたかと思うと、口調も声音もガラリと変え、忌々しげに吐き捨てる。

「おー。流石メーデイルア。怖えな」

怖いという割りに男の表情は余裕そのもので、メリアもわかっているのかそれ以上は何も言わず手でシッシツと振ると、帰りはあちらとばかりにドアを指差す。

「そう邪険にするなって。別に騎士団に連れ戻しに来たわけじゃねえし…な」

「だったら何しに来た？」

メリアは久しぶりに会った男に対して、さっさと帰れとばかりの

態度は崩さないまま会話を続ける。

「さあ。騎士団を辞めたお前に話す義理はないだろ。今回は顔を見に来ただけだ」

「カーデイス……お前も相変わらずだな。顔を見に来ただけというなら目的は果たしただろ？ 帰れッ！」

「——ッ」

メリアから発せられた風に圧され、カーデイスの身体は店の外へと吹き飛ばされる。

「アイツ……相変わらずだな。目くらましまで使って……と、まあいっつか」

分厚い拒絶という名の結界に阻まれる店には目もくれず、カーデイスは店から離れて歩き始める。

「とりあえずあの女と、住む場所……は、諦めさせるか」

意味ありげに口元に笑みを張り付かせると、カーデイスの姿は空気に溶けるように消えた。

なんだったんだろう、と考えてみても、リノアにわかるわけがな

く、休憩室で先にお茶の準備をしながら待っていた。
防音が完璧なのか小声なのかメリアとカーデイスの声は聞こえてこない。

「ま、いつか」

その時点で興味は消え失せ、待っている時間を使って楽々ボックスに入れてあったレース糸と道具を取り出し編み始める。
こうしてあいた時間はいつも、本を読むか物作りに没頭するかのどっちかだ。

「リノアちゃん。ごめんねえ。怖かったでしょ？ 歩く子宝製造機は」

申し訳なさそうにひよこつと扉から顔を覗かせるメリアに、リノアは勢い良く首を横へと振ると、

「大丈夫です。興味ありませんから」

きっぱりはつきりと言いつ切る。

この時点でメリアに備え、手に持っていた鉤針と糸は机の上へと置いておく。

「…声、かっこいいなあ、なんて思わなかった??」

あまりにはつきりと言いつ切るリノアに、メリアは興味がわいたのか尋ねてみる。が、その態度を見ると抑えきれない欲求——可愛がりしたい！ 撫で撫でしたい！ ギュツとしたい！——が表に出てリノアを腕の中へと閉じ込めていた。

「かああわああいいいい」

「んー」

背中に腕を回されながらグリグリと頬を擦り寄られ。

「興味ないので、かっこいいとも思わなかっただけです?」

リノアの超がつく本音。

それはメリアのツボだとは鈍いリノアが気付くはずもなく、メリ

アにされるがまま腕の中でおとなしくしているのだった。

女には持ち得ない逞しい腕を持っていたとしても、リノアにとってメリアはお姉さん。

顔が良かろうと人目をひこうと、メリアだけは気にならない。

ずっと何かを言いたげな表情を浮かべていたのは気にかかったが、今日は後ろ髪を引かれながらも自宅へと帰ってきた。

自宅は目の前。集合住宅で、そろそろ手狭になってきた借家。物作りを多方面に延ばし過ぎたせいか、器具や材料なんかで始めは広かった部屋も、既に溢れそうになっている。

そろそろ引っ越そうかなと呟きながら、ノブに手を伸ばそうとして固まった。

いつのまにか扉に横に男が立っていたのだ。

「（このパターン……メリアさんの店で……）」

どうしよう？

無視？

背中を向ける？

それは危険？？

あえて男は見ずに脳内でこの後の対処を考える。

「(どれもこれも危険な気がする…でも歩く子宝製造機って・・・)」

興味本位というのは身を滅ぼすものだと言った過去の自分に忠告して実行出来たのなら、リノアは絶対に男を見なかっただろう。

「歩く子宝製造機…：納得。女の人がホットオカナイネ。うん。関わり合いになりたくないや」

優しい青藤色の髪と翡翠色の眼差し。アッシュショートタイプの髪型はあくまでも自然にトップはふわっと。それが男の甘い顔立ちによく似合っていて、外見に興味がないリノアでもわかる。文句なしの美丈夫だと。

「さあ、帰ろう」

男を無視してドアノブに手を伸ばすが、それは男の指先に絡めとられ、気がつけば腕の中。

「はい?? 何やってるの!?! 生暖かいのが気持ち悪いー
!!」

美丈夫だろうがなんだろうが、リノアに遠慮という二文字はない。

「メーディルアのは平気だっただろ?」

平然と言うカーデイスに、リノアははっきりとわかりやすく首を

横へと振る。

「メリアさんと一緒にしないで下さい。メリアさんに失礼です」

「一緒だろ。同じ男だし」

「違います。メリアさんはお姉さんです！ 歩く子宝製造機さん離して下さい！」

顔を真っ赤にしながら腕を伸ばすが、リノア程度の力じゃ子猫がじゃれ付く程度にしか感じないのか、カーデイスは涼しい顔をしたまま唇を頬へと摺り寄せた。

「ぎゃー！ー！！ 変態！ー！ー！！！！」

色気がない。

それがどうしたとばかりに叫ぶが、それにビックリしたのか腕の力が緩んだ隙に突き飛ばし、リノアは一目散に走り出した。

さよなら、楽々ボックス君。

それでも壊れるのが嫌で、希望を残して腕輪を玄関へと放り投げメリアの店に向かってひたすら走る。

「メリアさー！ーん」

わき目も降らずに店に飛び込み、驚くメリアの胸へと顔を押し付けた。

「あら？　どうしたの……ってまさか……」

お姉さん言葉から微妙に語尾が変わった事には気付いたが、それは軽く流し真っ赤になった顔を隠せるように洋服を頬で移動させる。

「変態が出たんです」

そう。変態が！

叫ぶりノアに、メリアは窓際へと視線を走らせる。

そこにいたのは、カーデイスで、相変わらずどうやって店内へと入ったのかは不明のまま。

「（魔道を磨いたのか…ホント、碌な事に使わない）」

リノアを隠すように護るように腕を回し、カーデイスを睨み付けるが効果は一切ないのか、余裕の表情を浮かべられメリアの眉根に皺が寄る。

「ギュツとして頬に口を近づけたんですよ！　生暖かくて気持ち悪くて……どうしよう、子供が出来たら……！」

他人に興味がないリノア。

当然子供の作り方を知るはずもなく、本気でそれを口にするリノアに男2人の沈黙が重なる。

「それだけは大丈夫よ。リノアちゃん。ね、落ち着いて。アタシが護るから」

子供をあやすように背中を優しく撫でるように叩くと、生ゴミを

見るかのような眼差しをカーデイスへと向けた。

「アンタ：リノアちゃんに何するのよ？」

メリアは嫌だが知っていた。

カーデイスは女に困った事はなく、来る物は拒まず去る者追わず。自分に興味がない存在もあえて追うような性格ではなかった。

女の影は絶えなかったが、その瞳の奥はいつも冷めた光を宿し、他人とは一線引いた内面を持つ男。

それが、まったく男慣れしていない所か人間にあまり興味がないリノアに手を出すとも考えられず、メリアの視線には戸惑いの色が混ざる。

「色：初めて見たな。俺と同じ色彩」

瞳を細めて笑うその様を見て、メリアは心底困ると同時にどうしようか対処に本気で悩み始めた。

カーデイスの青藤色の髪。

世界では珍しく、メリアもリノアに会うまではカーデイスしか見た事のない色だった。

それに輪をかけリノアの場合は更に珍しいのだが、本人が意識していない為口に出して聞いて見た事はない。が、言っておけば良かったとこの時ばかりは心底後悔した。

白堊色の限りなく白に近い堊色の右眼。カーデイスと同じ青藤色の左眼。

この世界では希少価値のある薄い色素のオッドアイ。

一般的には地味な容姿であろうとも、このオッドアイを目にすれば地味から一転、どんな美女でも足元に及ばない付加価値のある存

在へと変化する。

「ああ。うん。可愛いな」

メリアの腕の中からあっさりとりノアを自分の腕の中へと納めると、カーデイスは遠慮なくその背に腕を回して感触を確かめる。

「え？ あ？ ちょっと……カーデイス！！ テメエやめろって空気が読めないのかッッ！！！」

完全にお姉さんを脱ぎ捨て、メーデイルアとなったメリアはカーデイスに詰め寄るが、詰め寄られたカーデイスはリノアの感触を楽しむだけ。

それは世間一般的に言う一目惚れだったと、カーデイス本人が気付くのは後の話し。

アオフジの色彩とく日常の風景く（前書き）

アオフジの色彩との続編。

日常の一こまで、短めの話しです。

アオフジの色彩と日常の風景

ここ一ヶ月の私は忙しかった。

何故ならば——お引越しをしたからです。

それは今から丁度一ヶ月前、私は不動産屋巡りをしていた時の事、丁度メリアさんと会って世間話に花が咲きました。邪魔なのもいたけどね。本当に邪魔だったんだけどね。目立つし熱いし距離は近しい直ぐに唇を近づけてくるし。

子宝製造機さんの事を、新たに歩くセクハラ大魔神と命名したんだけど、本人からのみ不評だったので気にせず呼び名にした。

とり合えず気にせずメリアさんと話していたら、外に出た理由を尋ねられて言ったら、あれよあれよという間に話しが進んでいったのね。

まあ、それで部屋探し？

そうなんですよ。

じゃあ、ここに住まない？

え？？

ここなら工房もあるし、2人で大量購入すれば生地も安くなるし。

うー。でも…

機材は共同で使いましょ？ リノアちゃんの機材も置けるスペースは十分よ。

心遣いはありがたいんですけど、やっぱり…

ちゃんと家賃は貰うわよ？ それに、リノアちゃんが欲しがってた最新器具があるんだけど。

！？

高くて手が出ないアレですか？？
なんて思ったが最後、ズルズルと同居が決まっていたりとか。

でも、工房も広くて機材も沢山あって防音設備もバッチリで。
そして部屋も広くてね。私の部屋の荷物をすべて運び込んでもまだ余裕があるという豪邸…すごいなあ。なんて思ったのが数時間前。

そして今。

私は目の前に置かれた荷物の山を凝視したまま、その場で固まっていた。

だってさ、だってさ。

これ…メリアさんの持ち物じゃないよねツツ！！

しかもこの衣服についた匂い……セクハラ大魔神さんのじゃないかなあ……まさかあ。そんなあ。

なんて認めず、荷物を確認していたら背後に気配が生まれ、私は腕の中に閉じ込められていた。

嫌な予感の中！

歩くセクハラ大魔神は今日も健在です。

リノアの部屋は、2階の一番奥にある部屋だった。その隣はメリア。真正面にはカーデイスというリノアにとっては異様な配置。

「メリアさん。あの人勝手に入ってこないですよね？？」

まだ油断しちゃダメですよ。未だに当たり前のようにセクハラする人だし」

家主のメリアを捕まえて不安な一言を投げかけると、メリアは困ったように顎に手を当てるが、次の瞬間には首を縦に振る。

「大丈夫よ。そんなプライバシーの侵害はアタシが許さないから」

メリア自身も不安が残るらしいカーデイスの読めない行動。

どうしてカーデイスまでもが下宿する事になったのか、数週間経った今でもリノアには不可解でしかなかったのだが、メリアの困った顔を見てその件については触れない事にしたのだ。

とっても高い器具。最新式。

それに心奪われ下宿を決めたリノアは、既にある程度の開き直る事を決めていた。

そう。カーデイスよりも最新式。

カーデイスよりも防音設備。

それを考えれば、ここはリノアにとってはパラダイスだったりするわけで。

「引きこもり生活万歳！」

ウキウキと紅潮する頬を隠しもせず、最新式の器具の前で物作りを堪能するリノアは思いつくままに叫んでいた。

「外は嫌いなのか？　じゃ、俺とのデートの時は室内がメイン…か」

「……………」

「勿論、俺の部屋でもいいけ…」

「メリアさーーーーーん!!!!」

当たり前のようにリノアの後に立っていたカーデイスを突き飛ばし――体格差の為、まったく効果なし――、リノアは一目散にメリアの元へと駆け出す。

こういう時のリノアにちよっかいをかけるのは逆効果だという事を学習したのか、カーデイスは容赦なくメリアの元へと先回りして部屋に飛び込んできたリノアを抱きしめた。

「…………ツツ!!!!」

「熱烈だな」

真っ赤になりながらジタバタと、とりあえず暴れるリノアの額に口付けをおとす。

最近ではすっかり定番になったカーデイスの行動だが、リノアは慣れないらしく、瞳いっぱい涙を溜めてメリアに助けを求める。

瞬間、メリアの姿が掻き消え、カーデイスの後頭部を力の限り殴り倒していた。

衝撃がくる瞬間カーデイスはリノアを離し、腕から零れ落ちるように体勢を崩すリノアをメリアが受け止める。

「大丈夫？」

「うえええええ。全然大丈夫じゃないです。歩くセクハラ大魔神のセクハラが酷すぎます！ 邪魔するんです。私の大事な大事な大事な物作りの時間を！ あの人は無職ですかプーですかヒモですか！？」

よほどストレスが溜まっているのか、リノアはメリアの胸に顔を埋めるようにいきいきに言い切る。

「そいつも男だぞ。それはセクハラじゃないのか？」

いつも通りのカーデイスの突っ込みに、

「メリアさんはお姉さんです！」

興奮気味に、リノアははっきりと答える。

身長は高くても、街を歩けば人の視線を集めてしまう美形でも、メリアはやっぱりお姉さん。

「へえ…泣き顔もいいな」

だが、人の話を聞いているのかいないのか。リノアのメリアに対する印象にはまったく興味のないカーデイスの視線は、既にリノアが浮かべている涙へと注がれている。泣かしたのは誰だ？とばかりの射殺しそうな視線をメリアが向けてはくるが、それにはまったく反応せず、自分の行動でうろたえるリノアを見ながら笑みを浮かべた。

透明の雫が、リノアの頬を伝い下へと落ちる。

「メリアさん。セクハラサド変態がいます」

泣き顔を見せないように、再びメリアの胸に顔を埋めるリノア。

「真性なのよ。どうしましょ…」

ここまで酷いとは思っていなかったメリアが甘いのか。それとも初めての恋で暴走するカーデイスが悪いのか。

リノアがメリアを責める事はありませんので、この時点で全ての元凶はカーデイス扱いになるが、やはりカーデイスは一切気にしなかった。

その言葉や感情でさえ、リノアから向けられるものは心地がよいのだ。

「（本当はね…手がもっと早いはずなんだけどね。未だに額にチュって事は、カーデイスも相当緊張してるはずなのよね）」

しがみ付いてくるリノアの背を優しく撫でながら、カーデイスの私生活を知ってしまったているメリアは内心呟く。

きつと、これ以上先の事は出来ない。

でも、触りたい。

だから、額へのキスと、抱きしめる。流石に触れられない初心さは持っていないようだが、それ以上はカーデイス自身が怖がっているようにも思えた。

「リノアちゃん。こんなバカはほっておいて、一緒におやつでも食べましょ」

ね？　なんて首を傾げてみたら、涙をふき取った満面の笑みのリノアが力いっぱい頷く。

カーデイスの変態行為——リノアにとって——はさっさと忘れて、楽しい事を考えるようにしたらしい。

「メリアさん。紅茶の準備してきますね！」

「ええ。お願いね」

しっかりとカーデイスを牽制したままリノアを送り出したメリアは、くるりと向きをかえてカーデイスへと向き直る。

リノアの前とは違い、無表情にちかい、ただ口角をあげただけの

笑みを形作るカーデイスに、メリアはこれでもかという程盛大に、見せ付けるように息を吐き出す。

「…なんだ？」

怪訝そうに口を開くカーデイスに、メリアは半眼を向けると、

「初恋で緊張するのはわかるが、リノアちゃんは本当に免疫がない。気をつけないと、二度と手に入らないぞ？」

「……」

「ちなみに、リノアちゃんの解釈でいじめられてるって思ったなら、俺の全身全霊をもって遠慮なく引き離すから」

「……………」

「また、遊んでやるよ」

ニィ、と、懐かしい表情を浮かべるメリアに、ゴクリ、とカーデイスの喉が鳴る。

これは本当に懐かしい表情。

そして、宣言通りリノアがいじめられてる———と思った瞬間、容赦なく実行にうつすのだろう。

「（こいつこそ歩くセクハラだろう）」

メリアの本性を知らないから懐くのだ。

とは言わない。

リノアにそれを言ったらきつと、リノアはカーデイスを拒絶するだろう。

それ程に天秤が容赦なくメリアに傾いていると、流石のカーデイスも理解は出来ている。

本性を全て隠し、メリアとしての表情を浮かべ穏やかな空気を纏

い、リノアが紅茶を用意している部屋をノックするメリア。

「カーデイス。リノアちゃんが用意してくれてるわよ」

そんな事を言うメリアの手には、三人分のおやつ。

ほんのりと胸に温かいものが宿りながら、カーデイスは当たり前のようにリノアの隣へと腰を下ろす。

「変態セクハラ大魔神」

「照れ隠し？」

「おめでたい頭です」

慣れ親しんだ会話をしながらも、完全な拒絶の色が見えないリノアの隣を退く気にはなれないカーデイス。

やはり、碌な事が言われている気はしなくても、リノアの隣は居心地がいい。

そんな事をカーデイスが思っているなんてまったく想像さえしていないリノアは、メリアお手製のおやつを頬張りながら、休憩後の物作りのデザインについて考えていた。

この程度の動揺で済む程度に、カーデイスが居る事が当たり前になっっているなんて自覚の無いままに、穏やかに時間が流れていく。

ヒトカケラ乃章〜ヒトカケラ乃ホノオ（前書き）

短編・【ヒトカケラ乃シズク】別主人公Verです。設定等は短編より煮詰めたりしましたが、こちらは恋愛色が強い話になる予定です。

主人公は女性。特殊です。

プロローグ的？な話しが完成しましたので、短編集にupです。

（ヒトカケラ乃シズクより7・8年前の世界です）

ヒトカケラ乃章くヒトカケラ乃ホノオ

世界暦3075年、白石の月十五日の日。

享年51歳。

ディティア・ティアル・ダルンヴァード・セントウール・サナ
ディアル。

豊羽の国に大公であり、国王の片腕としてその手腕をいかなく
発揮し国を繁栄へと導いた一人。

「母さん」

「お義母様」

「お祖母様」

身内がベットの周りを囲み、更にその周りを皇帝陛下。国の中枢
を預かる人物たちが囲み、ディティアを見守る。

「泣かないの。私は幸せだったんだよ。だから笑って。ね？」

ディティアの右手に縋るように頬を寄せていた孫の頭を撫でる。

ディティアも、息子も結婚が早かった為、この年で孫の成人した姿も見れた。もう少し生きれたなら孫の嫁も見たかったと思わなくもないが、今のままでも十分満足だった。

「皆の幸せを祈ってるよ……おやすみ」

ディティアは親しい者たちに囲まれ眠るように息をひきとった。

はずだった。

世界暦3056年。

白石の月十五日の日。

何故かディティアは嵐加の国のある一画で産声をあげていた。

「(……孫が産まれた翌年……)」

はて、とディティアは動かない首を懸命に動かしながら考えに没頭してみる。父親らしき男が偶々見ていた新聞の日付で世界暦は間違いないだろう。だが、と疑問の言葉が次々と浮かんでは消えていく中、赤ん坊のままだと情報収集には適さないという事にも気付き始めていた。

思考がまどろみ、いつの間にか眠りへと誘われる。

起きたら兄や姉の可愛い攻撃に始まり、従兄弟やらなんやらが顔を見に来て父に怒られ母に慰められ、ディティアに笑いかけられ浮上しながら帰っていく。

最後に浮上させるのがこの賑やかな日課の原因かとも思うが、その辺りはディティア自身嬉しいので気にしないでおく。

孫みたいな年齢の子供たちは結局可愛いのだ。

「(んー。眠い……赤ちゃんは眠るのが仕事だよねえ、やっぱり……今頃あの子も寝てるのかなあ)」

可愛い孫の姿を思い浮かべ、ディティアの精神は眠りへと誘われ、数分後には穏やかな寝息をたてていた。

「ディティア。僕の可愛いディティアはお休み中」

ディティアの5歳上の兄であるラティアルは踏み台持参でディティアの部屋へと足を踏み入れると、いつものようにベットの横へと踏み台を置きそこに立つ。

可愛い妹。

紺碧の色彩を持つラティアルの大好きな妹。気にかかる事といえば、瞳の色が風雷の神の色彩である白緑に銀が混ざっている事だろうか。

この世界において、金や銀は神のみが持つ色彩と言われていた。

人の身では決して持ち得ない純粋な金と銀は、神の具現者が持つと言われ、壱神に付き具現者はたった一人。神の寵愛を受けた存在として、その力は人の身では決して得る事の出来ない力を行使する。嵐加の国が崇める風雷の神の具現者は、前具現者が死んでから100年一度も現れてはいない。

神が加護を与える、神に好まれた魂。

「んー。具現者って事は、司になるのかぁ」

魔法師・睦果師・精霊師・召喚師。この世界の導力に眞力（魔力・神力の総称）を干渉させて様々な現象を発現出来る者たち。

それらを全て使いこなすのは不可能だが、ただ一つ例外がある。

それが具現者。

具現者だけに許された“司”という称号。

全てを司る者という意味がある。

「家が大きくて良かったあ。僕が護るから安心してね」

嵐加の国において、皇帝に次ぐ権力を持つ血筋。それが、ディティアの産まれた家。

だから安心してね、トラティアルは眠っているディティアの額にチュツと音をたて口づけた。

それが、ディティアの予期せぬ第二の人生の始まりでもあった。

--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*
--*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

月日は流れ、ディティアは19歳になった世界暦3075年、白石の月十五の日。

親しい者に見守られ、ディティアが死んだ年でもある。

真面目な経済新聞に目を通しながら、ディティアの目はある記事に釘付けになっていた。

豊羽の国に関する事で、要人が亡くなったという内容のものとった。その要人というのはディティアの事で、思わず溜息を落としてしまう。

「どうしても豊羽に行く機会は悉く潰れたんだよねえ」

まるで何かの力によって阻まれているかのように、ただの一度もその機会は訪れなかった。

ディティアの両親や姉や弟妹たちは、豊羽の国に行って皇帝の血筋と交流を深め、今でも文のやりとりをしているのだ。が、ディティアは血に連なる者所か豊羽の国の中枢人物たちとすら会った事はない。それを皆が不思議に思わないのがまた何かの圧力を感じる要因の一つなのだが、その理由が何となく解ってしまい、ディティアもあえて口には出さずに自身の中に留めておく。

多分というか絶対に、白緑に銀が混ざった右眼が関係しているのだろう。

「（大地の神様は大好きだったけどね…でも具現者はあの子が選ば

れたのね)」

孫と同じ年の殿下。

常盤色だった目の色は、豊羽のディティアが死んだ事によって金が混ざった左眼を持つ存在になったらしい。つまりは大地の神の具現者である。

風雷の神は自分の具現者が豊羽の国に行くのが心配なのか。それとも同じ魂を持つ者同士を離しておきたいのか。難しい所だが両方だろうと思いながら新聞を閉じて机の上へと置き、紅茶が注がれたカップに手をかける。

恐らく、これでディティアは豊羽の国に行けるのだろう。

自分が死んだという記事は些か複雑なものがあつたが、今は嵐加のライナード家のディティアで豊羽のサナディアル家のディティアではないのだ。

その時、コンコン、と控えめに扉がノックされ、ディティアはカップに注いだ視線を扉へと移す。

「どうぞー」

部屋の主であるディティアの承諾を得て、ノックをした人物はゆっくりと扉を開けた。

「お邪魔するね……勉強中だった？」

机の上に所狭しと並べられた新聞や書物の山。

「ううん。ちょうどお茶にしようと思ってた所だよ」

紺色の色彩を持つ5歳年上のラティアルは実家に暮らし、ディティアとは一番話す人物でもある。兄妹の中では一番仲が良いのかもしれない。

「ラティ兄も食べる？ 今日には新作みたいだよ」

乾燥させた果実が入ったパウンドケーキ。

甘い物が好きなディティアの為に料理長が日々研究を重ね、今では本として出版される程の流行の最先端を進むデザート。その新作のお披露目は、ディティアの自室であっさりと行われていた。

「（これを食べる為に数百人が並ぶんだよねえ）」

世間に出ればの話したが、料理長にとってディティア以外はただのおまけである。

「僕は食後に頂こうかな。今は紅茶だけ貰ってもいい？」

「うん。私と同じものでいいかな？」

「ディータに任せるよ」

「了解。私と同じアールグレイの紅茶ね」

慣れた手つきでカップを温め、砂時計を置き時間を計る。

「ねえ、ディータ」

「んー？」

紅茶を注いだカップを持ち、それをラティアルの前へと置いていくと、少し沈んだ声が聞こえた。

「どうしたの？」

キョトン、と大きな目の瞳を丸くしてラティアルを見つめてみると、見つめられた本人は何時になく真面目な表情を浮かべたかと思うと、ギュッとディティアを抱きしめる。

「ラティ兄？？」

この程度のスキンシップは今更で、ディティアとしてはまったく気にならないがそれでも、いつもとは違って抱きしめる腕に力が籠っているような気がして、背に回した手をポンポンと叩いてみる。
小さな子供をあやすようにゆっくりと。

「僕はディーテに甘えているね。うん。自覚はしてるんだよ」

「……………」

「自覚はしてるから、引き離されたくないって思うんだ」

「……………」

「でも、外交問題もあるし」

「…結婚？」

外交問題という言葉に、それしか思いつかなかったディティアという言葉に出してしまう。

「違うよ。具現者を無理に結婚なんてさせないよ。その点は安心してるんだけどね」

「違うんだ。そろそろ行き遅れになるから見合いなのかと思った」

それはディティアの本音である。

豊羽のディティアだった頃は自分が家の主で、望まない結婚なんて片っ端から断り、子供にも自由にさせてきた。その程度で潰れる家なんぞ知らん！をもっとうに、周りからの脅しを全て跳ね除け、実力で確固たる地位を得たディティアに、政略結婚の四文字ははっきり言って存在していない。

存在はしていないが、今現在のディティアといえば養われる身。贅沢は言えないかなと思っていたのだが、それはないという事がわかり安堵に胸を撫で下ろした。

「ううん。結婚じゃないけど、豊羽に行ってもらう事になりそうなんだ」

「豊羽に？（私が死んだら早速かあ…）」

かなり複雑な感情が入り混じるが表には出さずに、ラティアルの言葉を待つ。

「そう、豊羽。長期になるかも。20歳の殿下が具現者になったのは知ってるでしょ？」

「うん。珍しい例だよね」

具現者は神に愛された魂を持つ存在。それは産まれる前から決められていて、産まれた後に具現者になるという事は本来ならありえない事。

「憶測だけどね、豊羽には具現者候補が2人いたんじゃないかって言われているよ。そのうち一人が亡くなって、具現者に値する魂が殿下一人になったから現れたんじゃないかってね」

「へえ」

そうなんだあ。なんて呟きながら、心底初耳だった。

「（それって私だよねえ……豊羽で具現者候補だったんだ）」

今現在、嵐加の国で具現者のディティアは、この前も具現者であったとしても不思議ではない。結局、神から好まれる魂というのは転生したとしても、好まれたままなのだ。

「本来は生まれながらに備わってる力だからね。制御は自然に覚えてしまうんだけど、つい最近目覚めたばかりだから制御がまったく出来ない状態なんだって」

「あ…そっか。それで私が豊羽に行くんだね」

納得したとばかりに頷くが、ラティアルの表情は晴れる所か更に影を帯びている。

「そうなんだよね。他の国の具現者は現在地不明だから。生きてはいるんでしょ？」

「生きてるよ。存在は感じるから」

場所の特定は出来なくても、自分以外の具現者の存在を感じとる事は出来る。

孫と同じく可愛がってきた殿下。その殿下が具現者というのは新聞で知るより前に感じ取っていた。

だから、協力できる事があつたら惜しむつもりはないディティアだが、今自分が豊羽の身内に関わって大丈夫だろうかという心配もある。

豊羽の自分が亡くなったばかり。

「（何か色々複雑…）」

19年間、嵐加のディティアとして生きてきた分、豊羽の自分は何処か遠い存在でもあり、過去の事でもあった。が、大切な子供や孫を目の前に同じ事を思えるか、と自身に投げかけてみると、答えはわからず迷ってしまう。

かといって、他の国の具現者の所在地がはっきりしていたとしても、恐らく嵐加の具現者が選ばれただろう。元々、嵐加と豊羽は繋がりが強いのだ。名産が被らない、利益があるという本音はあるが、それ以外でも友好国として認定され、王族や貴族が友好的な関係を築こうと幼い頃から行き来している。

そんな相手に頼らないはずがないとはわかっているが、それでもラティアルの表情は優れないままディティアを抱きしめ続けた。

「じゃ、ちょっと留学してくるね。大学に行く時間ぐらいはあるでしょ？」

折角だから豊羽の大学を見てこようと、完全に意識を切り替える。

「あるよ。勿論。ディーテは束縛なんかされないよ」

「ラティ兄。ディーテ姉が折角淹れてくれた紅茶が冷めちゃうぜ？」

腕を離す素振りさえ見せないラティアルに、何時の間にか扉に背を押し付けながら
立っていた人物が遠まわしに腕を外せ、と言葉を紡いだ。

「リーテイル：帰ってきてたの??」

弟のリーテイル。太陽の国の大学に留学していたはずで、帰国予定はなかったはずの存在。

「ああ。俺もディーテ姉と一緒に豊羽に留学するからさ。その手続きで帰ってきたんだ」

「聞いてない」

その言葉に、反応を返したのはラティアルだった。

「そりゃそうだろ。父さんから昨日言われたばっかだし。流石にさあ：ディーテ姉だけを豊羽には行かせないと思うぞ？」

となると、動かしやすいのは俺だろ」

兄妹の中で自由のきく存在は、ディティアからリーテイルの2人だけ。

それはラティアルも解ってはいるが、感情だけで言えば別だった。

「そうかもしれないけど、大学はいいの？ 専攻が太陽の国の大学だったんでしょ？」

ラティアルの腕からあっさりと逃れ、自分のに詰め寄るディティアにリーテイルは苦笑を浮かべた。

この姉は一人で行く気だったのだと、改めて実感する。

「ああ。学校の科目は一区切りついたし、豊羽に行くのは問題ナシ。それに、ひよっとしたら面白いヤツに逢わせられるかもしれないから、ディーテ姉と行くよ」

意味ありげな言葉だが、その真相を語る気はないリーテイル。長年の付き合いでそれを察する事が出来たディティアは追求する事はせず、ラティアルにその視線を合わせた。

「リーテイルが一緒なら安心だね。早ければ早い方がいい、という話しだから、その辺りはディーテに任せるよ」

それは笑みだった。
穏やかな笑み。

ディティアは気付かない笑みの真実に、リーテイルは背筋が寒くなるのを感じていた。

「（相変わらず怖く。つか、拍車がかかったか？ ったく、やれるだけはやるけどさー。色々さー。俺だっと思う事はあるんだぜ）」

内心は思う所が色々あり過ぎるリーティルの本音だが、それは音に出ることはなく本人の胸の内にだけ留められていた。

ヒトカケラ乃章く大学院での日常（前書き）

ホノオでリーテイルが言っていた“面白いヤツ”との出会い後の学院生活日常です。

※ホノオの続きのネタバレになります。

（面白いヤツ視点の話です）

ヒトカケラ乃章く大学院での日常

苛々としそうになる精神を落ち着かせ、取りあえず俺は教師へと視線を移した。元々学院そのものに興味はなかったものの、この学院を出たというネームバリューは侮れないという理由から入学を決めた。決して俺が、という理由ではなく、約束——いや、賭けかもしれない、

そう、この学院を卒業するのは家族との賭け、だった。勿論勝つ気であるが、それまでのさほど長くない時間は家族と過ごすのいいだろうな、なんて思ったのも否定は出来ない。

だからここで特に何がやりたいというわけでもなかったが、まさかそんな場所でこんな風に付きまとわれる日々が訪れるとは、さすがの俺も予想はしていなかった。

…だから、何で、俺に付きまとう？

俺は、決して愛想がいいとは言えない。

存在感を薄くして、人に覚えられないように淡々とした日々を過ごす事を心がけている俺は、未だに名前を覚えられていなかったりする。試験でもなんでも、上位に食い込むのにも関わらず。

それは、俺の力が上手く作用している証拠でもあるのだが。と、ここまで考えて思考を中断させた。させた、というよりはさせざるを得なかった。という所だろう。

問題の主は、席はそれこそ山ほど空いてるのに態々俺の隣りへと腰掛ける。

一度、本人に聞いたら難攻不落の方が燃えると言われた時点で、俺は色々諦めたが苛々は募り続ける。これに反応すれば、相手の思うツボだと思って我慢はするけれど、俺は元々気は長くない。

しかも、感情は割りと表に出す性格でもある。

その俺が、学院でここまで目だ立つ淡泊で過ごせる自体、既に奇跡だと言われているのに。

「ディーダ。これ、見せて？」

疑問系をつけながら話しかけるけど、既に俺の左手の横に置いてあったノートは相手の手の中。

俺の答えなんて元々必要ないというのは分かるけど、俺の返答ぐらい待てばいいだろ、と喉まで出掛かった言葉を無理やり飲み込む。ただでさえ力を封印し、無差別に俺の存在を薄くするような力を使っている今の状態は、きっかけさえあれば簡単に崩れてしまう。

相手は、それをわかった上で俺に対しての挑発を続けている気がするんだよな。

「……」

「ディーダって照れ屋だよな。なんで、そこまでして頑な？ 理由があったりするよな」

確信めいた眼差しと声。

俺の目の前の、学院に入った直後から付きまといまくるこの男は、リーティ・ザンダート。年は俺と同じ17歳。らしい。正直言って、この学院はそれなりの身分所かなりの身分の者が名を隠して入学する。実力重視のこの学院において、家の名などあって無いようなものなのだ。

それでも人間の感情というものはそうとは言い切れないものがあり、大体は名を隠して入学する武者修行の場としても使われている。

それだけ高度な知識や技術を学べ、名を隠した状態でここで自分と言う存在を確立出来れば、これ以上ない程の強みにもなるという事で太陽の国では上位に位置する学院。

まあ、だからこそ俺も入学したわけだけど。

とはいっても、俺の目的は微妙にずれたものがあるが、態々それを口に出すつもりはない。

「ディーダってさ、俺の姉に名前が似てるんだよな。だから親近感沸いちゃって」

客観的に見れば、人懐っこい笑顔。

だけど、そんなモノは知るかつ。

身内と名前が似てるからなんだ。と叫びたい衝動を抑えて抑えて、俺はリーティに一瞬、視線を流した。

だから？　　という意思表示。

「おおお。ディーダが応えてくれた！」

その一瞬の視線で感極まったとばかりに叫ぶリーティの口を塞ぎたくなったのは、きつと俺の勘違いじゃないはずだ。

「だからお前はディーダに敬遠される。理解してるか？　ディーダは、騒がれる事を極端に嫌う。この学院じゃ特に、な」

だが、その場に響いたのはやっぱりまったく歓迎していない男。ノートを丸めたものでリーティの頭をパコン、と間拔けな音が響く程度の力で叩くと、そいつは俺の右隣へと腰掛ける。

この男はリーティとは別の意味で、俺にとっては関わり合いには

なりたくない人物だ。学院に入る前からの、家はまったく関係ない、ある意味俺の目的を知ってしまったという性質の悪い立ち位置にいる男。

「デイスこそ、ディードは歓迎してないと思うぜ？」

「お前よりはマシだ。マ・シ」

「なっ。お前を見てると実家の兄を連想するよ。ホントに」

「そんなものは知らん。だが、お前が言うって事は、俺とは別の意味で性質が悪い兄みたいだな」

俺から言わせると、お前等二人も十分性質が悪い。というか、デイスは自覚があるのか。それはそれで性質が悪いな。

二人の言葉の応酬を横目に、俺はそんな事を考える。

「自覚あんのか。お前…」

リーティも俺と同じ事を考えたのか、眉間に皺を寄せ、口を引きつらせながらも言葉を吐き出す。

「ああ。俺の個性だ。なあ、ディード。俺の個性は、面白いだろ？」

「……」

俺はそれに、無言を貫き通した。昔からの知り合いであるデイス。俺は、それ故にデイスの個性を知っている。

個性というよりは特異体質。この学院でどうやって抑えているのか。それとも相当腕のいい睦果師^{ロツカ}がついているのか。

だからこそ尚更近づきたくないんだと、俺を取り巻く膜を壊してもいいなら叫んでいただろう。

「……」

無言のまま二人に視線を流した後、教師の方を見るとばかりに視線で促す。お前等が俺を挟んで言葉の応酬をするもんだから、俺はまったく声が聞こえない。そんな俺の苛立ちを感じ取ったのか、少しの間だけ大人しくなった二人は俺と同じく、教師の方に視線を流しその話しを真面目な表情で聞いていた。

真面目なフリ、というべきか。

既に何度目かになる教師の話しは、ほぼ一言一句変わらずに覚えている。俺がそうなら、デイスもリーティもそうだろうな、なんて思いながら俺は教師を見続けた。これで視線を流そうものなら、また会話の渦に巻き込まれるのは火を見るより明らかだ。

ぱらり、とノートを捲りながら、俺は始まったばかりの学院生活をちよつと。いや、いかなり憂いてしまいそうになる。

多分、本音でいえばデイスは兎も角……腐れ縁になりそうな気がするのは何でだろうな。まあ、腐れ縁は置いといて、思えば現実になりそうでイヤだし。

その本音の部分で、リーティはかなり合うとは思う。

が、この静で暮らしたい学院生活では邪魔でしかない。

元々、俺がここで目立たず暮らすと宣言したのも、この後の夢に関わってくるから手は抜けない。

となると、さっさと単位取得の飛び級卒業か。そうだ。それがいいと俺は別のノートを取り出し、レポートを纏め始める。

一芸に秀でたものは強い。

なら、誰にも成し遂げられなかった一年での卒業を成し遂げてみよう。俺はこの時、心に固く誓う。

「へえ。魔道回線を使つての情報を引き出せるシステム…か」

だから何故俺の昼時にも出沒する。なんて今更な言葉を俺は飲み込んだ。

しかも当たり前のように俺のレポートに手を伸ばして、上から下までじっくりと内容を吟味する二人。

「（いや…だから何故見る…意見の参考にはなりそうだけど、何となく納得がいかないのは何でだろうな）」

俺は無言を貫き通しながら、それとは反比例するかのように頭の中は賑やかだ。

「メインは冒険者…か。なら、ギルドに置くんだよな？ 魔器具なんかはさ」

「…その予定」

「ああ。あそこに置くのか」

デイスの言葉に、俺の眉間に確りと皺が刻まれる。

確かに、馴染み深い場所に仮設置させてもらって実験はする。これがギルドでの回線として主流になったら依頼から情報確認まで、態々ギルドに顔を出す必要はなくなるからだ。

今まではちよつとしか確認辺りでもギルドで確認しなきゃならなかったから、こういうのがあれば便利だと思って開発には乗り出したんだけどさ。やっぱりデイスがちらほらと関わっているのはそろ

そろ諦めるけど、それをリーティの前で言うなと首を絞めたい衝動に駆られる。

実際はやらないけどな。

やれば、確実に目立つ。

「なあ、デイスってさ。ディードと相当親しいよな？ 馴れ初め聞いてもいい？」

馴れ初め言うな。そういう仲じゃないとばかりの鋭い視線を向ければ、デイスは相変わらず癖のありそうな笑みを浮かべているだけ。どうして俺の周りにはこう癖のある人間が多いのか。

類は友を呼ぶとかじゃなくて、俺だけは真人間だと思いたい。こういう個性派に囲まれてはいるけれど。

「ディードが話すな、というから俺からは話さない。が、以心伝心は出来る仲だ」

将来ペアを組むからな、とデイスの声が聞こえた気がした。

コイツは…将来俺に付きまとう気か。

確かに、コイツの特異体質は俺には効果がないし、真実は明かしてないものの押さえられるだけの力があるという事は知れている。

でも、それは非常に面倒だと俺が思っても仕方ないだろう。実際、デイスの特異体質は面倒だ。

「ふうん。まあ、学院を卒業したら話してくれるよな？ で、そんなに俺の家族を紹介したいから家に遊びに来いよ」

決定事項か？

つつ込み所が満載過ぎて何処からつつ込めばいいのやら。

「…リーティ」

でも、さ。何気ない会話でも、俺は随分とリーティの事がわかってきたよ。

「ん？ 漸く俺と交流を持ってくれる気になった？」

「お前は話しすぎてる。俺に、筒抜けになりたくなければもう少しその口を塞げよ」

情報を与えているのは俺なのか、それともリーティなのか。そう思っの忠告だったんだけどさ。

「……あはは。そうかもな。俺がわかるって事は、ディーダもわかるって事か」

リーティは笑い飛ばした。

俺にならばれてもいいと言わんばかりの態度。

…まあ、そういうかもとは、ちよっと思っただけどさ。

この後、俺は一年で大学院を卒業する資格を得るんだけど、何でリーティやデイスに付き合っ更に一年この学院で過ごす事になったり、豊羽の大学院へと移動するリーティに付き合わされる羽目になるんだけど、今の俺にそれを知る術など存在していなかった。

界渡りの章／刻の賢者は夢を見る（前書き）

界渡りの自由人の主人公が普通？の人間だった頃の話です。

【碧い星の物語り】で盾と矛の事を書いたので、矛と盾と賢者の始まりの物語りを書いてみました。

※シリアス（ダーク系？）のお話です。

矛と盾サイドの話も近いうちに載せる予定です。

界渡りの章／刻の賢者は夢を見る

世界平和になんて興味はない。

時なんて操れた例もないのに、いつの間にか刻の賢者なんて大それた名前で呼ばれ始めて数年。

世界の平和の為にという決まり文句で、脅迫紛いの勧誘を受ける事ここ一年。

理由は、解ってる。

何処かの、とはいってもこの星で類を見ない程の発展を遂げた二国が始めた戦争が発端。

大それた名を持つ魔法使いを我が物にしたいという、ただそれだけの勧誘。

理由を知る私としては、幾千、幾万の命が失われようともその戦列に加わる事はないだろう。はつきり言っても、効果はないけれど。

「レーイ」

「んー。こっちにいるよ」

私はというと、いつもの定位置よりも少し上にある祠で腰を下ろして魔力を注いでいた。これは、賢者の称号を与えられた私の役目。いつのまにか刻がついちゃってるけど、その辺りは本来の役目とは関係ないと思っているから、私はこれを続けてる。

こうやって仕事をしてると必ずといっていい程顔を出してくれる友達二人。危ないからここには来ないでとは言っても、やっぱり効果はない。

「また食ってないんだろ？ ほら、俺特製弁当！」

大きすぎるお弁当を掲げるのはラス。

「また痩せたんじゃない？ それ以上細くなっちゃ駄目よ。抱き心地が悪いったらありやしないわよねえ」

手の平を頬に当て、優雅な笑みを浮かべる割りに言う事は残念なのはミラ。

「昨日の今日で痩せないから」

昨日もそう言われて、ラス特製のお弁当食べたよね。

そして相変わらぬ疑問だけどね。何で女であるミラがそれを言うのかな？

別にラスに言われたらいいというものではないけれど。

「あら。血の匂い。また来たのね。どっち？」

目の奥が怪しく光っているのは気付いているけど、あえて突っ込まずに私は質問の内容だけに答える事にする。隠しててもばれるし、

それに隠した分だけセクハラ紛いな事をされるしね。ミラに。

「一ノ宮の方だよ。二ノ宮は昨日」

「一ねえ」

「兄の方が回数が多いな。義弟には負けてられないって所か？」

「そうなんじゃない？ 私にはよく解らないけど」

それに、そんなモノは理解したくないしね。と私が言えば、確かにと二人して頷く。

私程ではないにしても、二人とも腕利きの魔法使い。頻繁に勧誘は受ける立場にある。

まあ、今回の戦で魔法使いが関わっているかという点、全体数の半分程かなという気はするけどね。

「状況はどう？」

ラス特製のサンドイッチを頬張りながら、人の世の情勢を聞いてみる。ここはある意味俗世から離れた場所だから、状況把握には向かないのよね。一ノ宮も二ノ宮も勧誘に来るから、両方とも生存してるんだらうなって認識。

「互角、になってるね。死者数は同じぐらい？」

「魔法使いが参戦した。そっちでも派閥争いが起こってる」

「まった性質の悪い」

そうなる、参戦した魔法使いの数が跳ね上がるかなと考えると同時に、魔法使い一人に対して一般人がどれ程命を落とすかと考えて私は思考を放棄した。

はつきり言って、それを数え始めればきりが無い。

思いつきり眉間に皺を寄せた私の頭を、ラスはゆっくりと撫でていく。それに頬を膨らませたミラが、ラスを肘で押し退けてからラスが撫でた部分を上から撫でていくんだけどね。何でそこで張り合うのかな。

「ミラとラスは大丈夫？」

私と違って籠っていないミラとラスは、ある意味、勧誘数は私より少なくとも危険の度合いは違う。本当は籠って欲しいけど、本来なら籠る場所に最適であったここはある意味、人間の世以上に危険な場所だからここにいて、とも言えない。

だから、本当は来て欲しくない。

一緒に居たい、なんて当たり前の本音は覆い隠して。

隠せた事もないんだけど…ね。

「俺たちは大丈夫。ミラは常に返り討ちだし」

「私たちよりも、レイよねえ？」

「……」

私の賢者としての役目を知っている。知ってしまった二人の眼は険しい光を帯びている。

一体どうして私が賢者になったのか。

それは素質があつたからに他ならない。

「代われたらいいのに」

「代わりたいわよね」

二人が苦しげに言葉を紡ぐから、私は咄嗟に両腕を広げて二人を抱きしめてた。

「これは、私の役目。魂に刻まれちゃった事だから、当たり前なの。二人には代わってあげない」

こんな命を削る事、二人には絶対にやらせない。

私の大好きなミラとラス。

二人が生きる星だからこそ、私は魔力という名の命を捧げながら夢を見る。

二人が笑う星である現実という名の夢を見続ける。

決して口に出しては言わない私の本音。多分ばれてそうな気もするけど、これだけはそっぽを向いてでもしらばっくれる。そう、決めたから。

星に命を捧げる――ここだけ聞くと自己犠牲。

でも、本質は違う。

私は、二人だけには生き残ってほしいから。

だから星の安定を保つ役目を果たす。人が戦で星を壊していくから、ここ最近の負担は半端ではないけど。それでも、二人がいる星だけは壊させない。

星がなくなったら、人はここでは生きていけなくなっちゃうし。生命を育む星のシステムが壊れたら最後だし。

「ミラもラスも、怪我しちゃイヤだよ」

だからこそ、私は念を押す。

「わかってるよ。レイは優しいし」

「優しすぎるのが心配よねえ」

「二人の方が優しいけど」

私の本音には気付かないミラとラス。私を買いかぶってるけど、今それを言う必要はないから言わないでおく。

「二人が、優しいんだよ」

ミラとラスがいなかったらきつと、私は星の終焉を選んでる。

だって、二人がいない世界に興味はないもの。

「じゃ、食べよっか。食べないとまた痩せた、とか言っでぎゅーとするんでしょ？」

「食べてもするわよねえ」

「俺は幼馴染として、お前の行く末が心配だよ」

ミラのさも当然とばかりの言葉に、ラスが呆れながらに呟いた。
ミラもホントに、口を開かなければ深窓の令嬢なのね。

まあ：そんな一般的には変わり者という評価を受けるミラも、自分からミラに突進していくラスも大好きだけど。

界渡りの章／矛は望んで血に染まる（前書き）

刻の賢者は夢を見るの続き。矛視点というよりは独白っぽいです。
そして更に暗い物語りです。

界渡りの章―矛は望んで血に染まる

今日も街では世界の平和と安寧を叫ぶ声上がる。

乱れているのは、星が壊れかけているのは二ノ宮の所為だと、国の王が声を張り上げそれに続く国民たち。

疑問を口にすればその時点で命はなく、ならばこれに乗っかれとばかりに人を殺す為の武器を手取る。

人を、なんて言葉を使っただけど、この国の人たちにとって二ノ宮に住む住人たちは人じゃない。ただの、害虫。

自分たちが生きるべき星を壊す、生きる価値もないもの。

よっく言うわ。なんて笑いそうになるのを抑えながら、私は路地裏へと場所を移す。

まったく…あの子に会いに行こうと思っているのに来客なんて。

あの子に会う時間を減らすだなんて。

ホント、死にたいのねえ。

外套の奥で笑う私には気付かず、一ノ宮の王に仕える兵士たちは遠慮なく私を囲んだ。細腕の女一人など、御するなんて容易いとかりの態度。

「魔法使い殿。王よりの伝言を預かっております」

言葉使いは丁寧だけど、態度はその真逆。断れば殺すぞ、なんて脅しを含めた布陣を展開させておいて、伝言を預かっているだけのはずはないでしょう。そんな事もわからない馬鹿を勧誘しているのかしらね。なんてやっぱ笑いがかみ上げてきて、つい声に出して笑ってしまう。

「貴様…何を笑っている？」

「気でも触れたか…」

口々に何かを言いながら私との距離を詰める。一ノ宮の王からの伝言を聞き終えた私の態度に、どうやら脅して言う事を聞かせるらしいという事はわかるんだけど、如何せん甘いよね。

魔法使いを戦争の道具にしようとしている割に、認識が甘いというのかしら。

普段は異端扱いする人間も多いけど、まさかその実力まで正しく伝わってないなんて思いもよらなかったわ。

あの子が苦勞するわけよね。

「ねえ…魔法使いが参戦すれば、激戦は必須。余計な血が流れて命が失われるのは確実なのよねえ。それは、わかってるわよね？」

一応ね、どう思ってるか確認。引き出してからでも色々遅くはないし、あの子に伝える情報は少しでも多いほうがいい。

「聖なる力を持つ魔法使い殿たちが、悪しき二ノ宮に手を貸すはずはなからう！ 命が失われるのではない。害悪がいなくなるのだ！」

「あ…っそう」

既に洗脳は完了されているのね。それとも、自分たちには害がないと思っっているのかどうなのか。

しかも聖なるって——お腹が振れてしまいそうな程笑いを堪えたのは何時振りかしらねえ。そんな事を呑気に考えていると、男たちの堪忍袋の緒が切れたみたい。元々そんなモノがあったのかどうなのかは定かではないけれど。

「この件に関して、魔法使いの勧誘は命がけよ？ 知らないでしよう。無知でお馬鹿な男たちねえ……この戦の発端も知らないくせにくすり、と笑いを漏らす私の声は、男たちに届く事はなかった。

私の魔法は、壊す事に特化したもの。特化、というよりはそれしか出来ない力。

「誰か掃除してくれるかしら。してくれるわよね」

先日のアレも、元から無かったかのように綺麗だったし。

「嫉妬だなんて、知らなくていい事実よね」

かつては人であったものの名残に視線を落としながら、私は戦争の事実を口にする。手向けなんて意味は無く、私の中でこれは伝えなくていい事実だと再確認。

知っている私から見ればその都度笑えてしまうけれど、知らなければ自分たちの王様が悪いなんて…思わないわよね。

「血の匂い——…とれるかしら」

返り血は浴びてないけど、あの子は鋭いしね。

湯を浴びて衣服を着替えてから待ち合わせの場所に向かいましよう。

あの子には笑っていてほしいし。

ああ…その為にお片づけしないとね。

そういえば、何て今更な事を考える。

あの子は今、命を削って星の生命維持に心血を注いでる。あの子が賢者の称号を与えられたのは、あの子が星と繋がれる魂の持ち主だったから。

ただ、それだけの理由でこの星で唯一人の賢者の称号を得てしま

った。

あの子は日々壊されていく星を少しでも直そうと、命を削り続けている。

「壊す人がいなければ、あの子は生きられる。私は、私たちはあの子と長く生きられる」

ああ、本当に今更。

「お前らしい笑い方」

くすり、と笑みを漏らす私の前に立つのは、幼馴染の男。

「ラスこそ、ラスらしい笑い方しちゃってるわよ。しかも血の匂い」

この男は、私とは違って二ノ宮の国に居住を置いている。理由は単純で、私が一ノ宮。ラスが二ノ宮担当って決めただけの話し。

「あっれ？ ついてる？？ 夢を見させただけなんだけどさあ」

あはは、と笑う男の手には何も持たれてはいない。

「弁当は、転移でミラの家に送つといた。風呂と着替えな」

「…また、ね。仕方ないわ。あの子に会うものね」

あの子は、私たち2人が好きだから。私がそう言えば、ラスは頷きながら笑みを浮かべる。

「俺たちが大好きなんだよ。だからさあ、ミラ——俺さ、思ったんだよ」

「…言わなくてもわかるわよ？ 私も、そう思った所だもの」

幼馴染って思考が似るのかしら。
嫌ねえ…本当。気があっちゃって。

「二人が、優しいんだよ」

星に命を注いでいる為に日々甞れる私たちのレイ。昨日会った時よりも、細くなっているのは今更。

それなのに、二人が優しいんだよ、と微笑む綺麗なレイ。

レイは、自分が優しくないって思っているけれど、優しいのよ。

貴方は、未来の自分の姿を想像してないもの。私とラスが生きる未来だけを夢見て、微笑むだけ。

待っていてね。

すぐに、片付けるから。

私は、貴方とラスト、未来を掴むから。

それが、私の望み。

月の雫と陽の欠片（前書き）

変わった双子の物語り（突発ファンタジー）です。

双子の妹（？）イディアルが主人公。強いけど素直で無邪気。人の裏を読むのは苦手なタイプ。18歳です。

月の雫と陽の欠片

とある国に、物語に出てくるような美しいお姫様と凛々しい王子様がいました。母親のお腹の中で共に過ごし、双子としてこの世に誕生してから18年。

王子は誰よりも強く賢く。

姫様は誰よりも美しく麗しく。

誰もが羨む双子。

ただ一つ、そんな双子には問題がありました。

生まれた時に魔女に呪いをかけられた双子は、太陽の下では性別が逆転してしまうのです。

太陽の下で女になった本来は男である兄は、金の色彩を持ち何処の姫よりも美しく育ちました。

太陽の下で男になった本来は女である妹は、銀の色彩を持ち何処の王子よりも凛々しく育ちました。

物語に出てくるような王子様とお姫様は実は、太陽の下での性別

が世間へと知れ渡り、姫は王子として。王子は姫として充実した日々を過ごしていました。

「レティ。何が食べるものある？」

窓からひょこりと顔を出し、編み物をするレティアルへと声をかける。

「またそんな場所から。駄目だよ？　ここは二階でしょ」

「大丈夫大丈夫。魔法の訓練だって」

足をばたつかせながらニカッと人懐っこい笑みを浮かべ、手を差し出す。

「行儀が悪いよ。まったく…ほら、入っておいで」

濡れたタオルで手を拭き、作ったばかりの菓子の器を机の上へと置く。そんなレティアルの動きを見ていたイディアが感嘆の声を漏らした。

「どうしたの？　イディ？」

「レティの動きは洗練されてるなって思ってたさ。僕じゃドレスでその動きは無理だよ」

「イディの無駄のない動きだって僕には無理だよ。レースが無い衣は不安で着る事が出来ないし」

二人で顔を合わせ、笑みを浮かべる。

こんな環境だからなのか。境遇だからなのか。

二人は生まれた瞬間から互いの一番の理解者でもあった。

だが、親からするとその辺りも嘆く要因の一つであることを二人は知らない。

一日の半分は本来の性に戻る二人は、片割れの行動とは真逆の行動に走り出したのだ。

「茶も花も編み物も礼儀作法も、レティの方が似合うよ！ 金糸に色とりどりの髪飾りで彩って着飾って：レティ以上に綺麗な人を僕は見た事がない！」

と、イディアルは武器を持ち訓練に励んだ。

「細身の長剣と騎士の衣装。イディ以上に似合う人はいないよね。銀糸を一つにまとめ、純白の衣に身を包んだイディはこれ以上ない程かっこいい騎士様だよ」

と、レティアルは淑女教育に励んだ。

これが本来の性別であったのなら文句の付けようはなかっただろう。しかし、呪いでこうなっているだけなのだ。呪いさえ解けてしまえば、レティアルは男に。イディアルは女に戻る。

「「いつその事、性別逆転で固定してくれないかな？」」

一言一句違わずに言葉をはもらせた双子に、父親が口を開けかける言葉を失ったのはまだ記憶に新しい。

そんな中、動きやすい格好に身を包んだイディアルは魔法を駆使し、日課になりつつある空の散歩を楽しむ。普段は城から出ないレティアルへの土産話しと、綺麗な花でもないかなと地上を見下ろしながらその動きを止めた。

「倒れてる？」

黒の塊。だが、微かに動いている気がする。

「うーん。人かなあ。手っぽいよなあ」

高度を下げ、近づいてみるとやっぱり人だった。取りあえず慌てずに持っていた水筒とタオルを取り出すと、肩らしき場所に手を置きながら声をかける。

「大丈夫ですか？ 水あるけど飲みますか？」

温もりと手に伝わる鼓動。多少乱れてはいるが、瀕死というわけではないと冷静に判断する。が、それでも弱っている事には変わり

はなく、答えない男に腕を回して黒の塊をひっくり返すと、口元に水筒を持って唇を濡らす。

そして、水筒を持っていた左手を男へと翳すと、目を閉じ癒しの光を思い浮かべながら癒しの詞を紡ぎだす。

補助である癒しの魔法はレティアルの得意分野で、イディアルは攻撃の魔法を得意とする。それでも、やらないよりはマシだろうと魔力を癒しへと変換していく。すると、男が微かにだが身じろぎをし、ゆっくりと目を開けた。

「あ、起きたー。大丈夫？　癒しの魔法だから、安心してもう少し寝てて」

安心させるようににっこりと笑みを浮かべ、癒しの詞を紡ぎ続ける。イディアルの癒しの詞は唄^{コトバ}だった。癒しの唄に身を委ねるように男は目を閉じ、身体をイディアルへと預ける。

強烈な光ではなく、仄かな光。

「（…苦手なんだろうな。癒しが）」

じわじわと広がっていく癒しの効果。それでも、行使出来るというのはただで魔力の高さが窺えると、男は閉じていた目を開けてイディアルに視線を移す。

その瞬間、銀の光が男の視界へと広がる。

「……ッ」

「んーん？　ああ、血色が随分良くなったね。ほら、水分と携帯食品。男の人にしては随分細かいよ。ちゃんとご飯は食べなきゃね」

「……」

「大丈夫だよ？ 携帯食品はレティと一緒に作ったから、味は保障できるし。美味しいよ」

男の無言を携帯食品の味の心配だと思ったのか、小さく千切り自分の口へと放り込む。

「ほら、美味しい」

警戒心の欠片もない人懐っこい笑みを浮かべ、もう一度携帯食品を男へと渡す。それを散漫な動作で男が受け取ると、自力で起き上がった男から手を離し近くに腰を下ろした。

「いい風。気持ちがいいね」

男に同意を求めているのかいないのか。イディアルは呟くと天を仰いだ。

そして徐に懷から紙を取り出すと、男へと手渡す。

「…？」

「近隣の地図。迷子になる人を見かけるから、持ち歩くようにしてるんだ」

「…そうか。随分と無用心だな。俺が盗賊だったらどうするつもりだ？」

だが、男から返ってきた言葉は冷たく淡々としたもの。

そんな男からの視線を真っ向から受け止めた後、イディアルは考えるように首を左右へと振った後、真っ直ぐ見てくる男の視線と合

わせるように男を見つめる。

「その時考えるよ。見捨てたら僕が気分悪くなっちゃうしさ」

笑いながら、持っていた水筒と携帯食入りの鞆を男へと押し付けた。

「だから、自己満足に付き合ってよ。お兄さんは食以外で心配な所ってないからさ、僕の大好きな携帯食と湧き水入りの水筒を押し付けておくから、胃に収めて」

男の戸惑ったような視線の本来の意味には気付かず、イディアルはもう一度笑うと風を纏う。

「お兄さんの魔力なら大丈夫だと思うけど、無理しないようにね」

その言葉を最後に、イディアルは再び空へと舞い戻る。この時は結局、最後まで男の視線の意味には気づけなかった。

「……あれが、呪いの片割れか」

そして、今の時間が男だという事は、本来の性は逆。

「ハア……俺は心底、ついてない」

これがもう片方の方だったら、まだ良かったのにとイディアルから渡された鞆を力任せに握り締めた。

「レティイー聞いてっ」

何度注意されても懲りずに窓から顔を出すイディアルに、レティアルは苦笑を漏らしながらいつものように濡れたタオルを手渡す。

「今日は人助けをしたよ。癒しの魔法が上手くいって良かった」

レティアルの部屋にあるイディアル専用の椅子に腰をおろし、濡れたタオルで顔を拭きながらも今日あった出来事を報告していく。

「そうなの？ 苦手なのに、前より上手くなったのかな」

「僕も日々訓練はするんだよ。でも、レティがいるから回復はね、ちょっと後に回しちゃうっていうかね」

「それを言うなら僕もだよ。補助系ばかりだし。でもさ…その男の人、また逢えるといいね。逢えたら、携帯食の味の感想も聞きたいし」

イディアルから聞いた男の特徴に、にっこりと人々を魅了すると名高い笑みを浮かべてレティアルが言葉を紡ぐ。

「うん！ でも、レティの料理は美味しいからその感想はバッチリだよ」

にこっと、レティアルとは対照的な人懐っこい笑みを浮かべるイディアル。

「そうだいいな。見かけたら教えてね」

「うん、勿論」

しっかりと釘をさすレティアルの真意にはやはり、イディアルは気付けずに素直に頷くのだった。

幻月（前書き）

主人公は初っ端から亡くなっております（⇒後に転生）。

主に主人公がずっと話していて、名前は出ません。

※二十歳を過ぎてそろそろお肌の曲がり角的な年齢。見た目はクールだけど内心は結構小心者な主人公です。

幻月

いつ、なんて事はもう正確には覚えていない。

覚えてはいないが、これだけは知っている。

そう。

私は死んでるって事は、理解してる。

つまり、これ以上ない程簡単に言っただけで、私は幽霊として存在って事でね。別にこの世に未練なんかがあるわけじゃないのに。というのは結構嘘になるけど。

だって、事故だし。巻き込まれだし。成人式は終わっちゃってから数年は経ってもそれでも、人生を終わらせるにはかなり早いと思うのね。

まだまだやりたい事あったっていうのは死んでから思った。

生きてる間は適当に生きてて、特に何をするのでもなく時間だけが流れてた。

周りの友達なんか結婚してさ。式に呼ばれて幸せそうな笑顔を見ると急に自分の立ち位置が不安になったりするっていう小心者。

でも表情の筋肉は変わりづらくて、冷静だね。かっこいいね。なんて男女問わず友達から言われてた。

内心はすっごいんだよって、笑えてたら何かが違ったかもしれない

いけど、それも全部全部今更。

で、ここからが問題。

49日の間はお迎えが来ないのかなって思って、色々と漂いまくったのよ。夢枕に立ったりとか謝ったりとか、何でも知らないけど特殊能力みたいな第六感が冴えまくって、身内の病院を勧めたりしてた。当然夢枕ですよ？

だって、うちの家系って鈍いし。私の存在に気付くのなんてないないしね。

自分の四十九日を見ながら、私はお迎えを待ったのよ。ひたすらね。そう、ひたすら。一応所かこれ以上ない程考えまくって、次があったら後悔のないように！なんて決意を新たに前向きな気持ちで待ってたのよ。

そしたらね。

お迎えのおの字も見当たらず。

他のお迎え待ちの人を見つけては声をかけて人生相談。当然逃げちゃうような怖い人もいたんだけど、その辺りはご愛嬌。

で、私より後にきた人が上に上がってくのよ。

何で？

本当にどうして？？

寧ろ私、超前向き！

とりあえず連れてって！と天に向かって叫んでみるけどお迎えは来ず。

あはは。

私とは違って天寿を全うした親にも会えちゃった。

「あんた何やってるの？」

親に真顔で聞かれたけど、ホントそれ私が聞きたいよ。
で、まさか成仏してないなんて、って泣かれてさ。そんなにこの世に未練がつ、なんて横道に逸れそうになったから軌道修正頑張りました。

「まあまあ、とりあえずお茶でも飲もうよ」

と、ティーカップを手で持ってお茶を注ぎ込む。

「……あんた、何で持てるの？ 飲めるの？ おかしくない？」

親からの冷静なつつ込み。

おおう。そういえばそうだったね。

「何となく。はい、飲めると思うよ」

と、親に差し出せば持てて飲めたりする摩訶不思議。

「……………」

物言いたげな親の視線に答える術を持たない私は、本当に肩を竦

めて首を傾げるだけだった。

「いってらっしゃい」

やっぱり親を見送って…あれ？ 死んだ後見送るってオッケー？
ある意味親孝行？？

否。絶対に違う。これはある意味親不幸だ！

すぐさま自分の思考を否定しましたよ。だって、親としては次の人生をうんたらかんたらって思ってたと思うもん。そしたらまだ漂ってるわ物は持てるわ成仏しないわ。

いやいや。私もお迎えが欲しいんだけどね。何でかな。こないんだよね。

で、ここまできたらある程度予想はしてたよ。
してたけどね。

現実問題はまた違うよねっ。

って、今度は友達もお出迎え。

「アンタ馬鹿？ 何しちゃってるの？」

青春時代の姿をした親友に一言。

「年に1回墓参りしてアンタを思った私の真心を返せっ」

「え？ 真心返せてそれ？」

「アンタが眠りについたと思ったから墓参りしたんでしょうが。それなのにこんな所でふよふよと浮いて何やっちゃってるのよ！」

「それは私が聞きたいんだって」

まあ。予想通り親友もお見送り。ここ数年はこんなばかりと思いつながら、段々私の知らない人が通り過ぎるようになって、時代も随分と変わっちゃった。

基本が昭和の人なのに。平成を飛び越えた時代の世の中に対応できてるって——どうなんだろう。このままじゃ駄目だよねえって思うんだけど、自分じゃどうしようもないんだよねえ。

「はあ：お迎えはいつだろう」

今日は空の散歩じゃなくて、公園での散歩。新芽の緑が目によいーなんて笑ってみるけど、言っている内容はテンション下がりがまくるし。でも、地上にある緑の数も随分と減って、ここは数少ない自然のある場所。

昭和の人間には辛いわー。なんて言ってみるけど、所詮独り言よね。

ははは。既に乾いた笑いしか出ないけど、いいんだ。数百年単位で独り言ばっかだから今更だし。

「お迎えくるのかなあ」

はあ。と溜息を落とす私。

「無理だろ」

に、答える声。

「——ッ!？」

驚いて顔を上げた私の前には見え麗しい美男子。年齢は私のちょっと：かなり下？かな。ああ、駄目。私年上が好き。

ん？ でも今の私は数百歳。年上っていうと鬼籍の人だよねえ。あれ？ 精神年齢ってこの場合何歳ぐらいになるんだろう。

「馬鹿な事考えるなら、せめてそれらしく表情に出せ。何だその微笑」

「え？ 微笑?？」

どちらかというが無表情だと思うけどってえさあ。思考読めちゃったの!？ 親友や親しか知らない私のマル秘情報をつ。

「マル秘って何だ。マル秘って……まあ、いい。これ以上アンタに付き合ってたら話が進まない」

目の前の年下君は呆れたように溜息を落として、面倒そうに髪をかき上げた。ここで気付いたんだけど、髪の色がちよっとね。不思議な色具合。一瞬染めてるのかなあって思ったけど、自然な色。

「猩々緋の色の髪って始めて見た。世界はそういう感じになったの?」

やっぱり最近日本から出てないからかな。まあ、時代も変わっ

たから遺伝子配合自体が色々と変わってるのかも。

「：違う。俺は、アンタを迎えにきた」

「え？ お迎え？？ それなら早く言って。何百年待ったと思ってるのかな」

漸く天に上がって次に備えられるのね。と感激に打ち震える私に、目の前の男は首を横へと振った。はい？ お迎えなのにお迎えじゃないの？？ どういう事？？？

次々と疑問符を浮かべる私に、男は外套を翻した。よくよく見れば、変わった格好。

「昔読んだファンタジー小説やゲームっぽい格好に見えるね」

まるで物語から抜け出てきたみたい。と私が笑えば、男の眉間に皺が寄る。あれ？ 癖になっちゃけどいいのかなって思ってた。男は皺を寄せる事を止めたのか、今度は懐から透明のカードみたいなものを取り出し、私へと渡してくる。

「綺麗だね」

うん。綺麗。透明の不思議なカード。見た事がない。

「右上の石に手を当てろ」

……。

言い方的に疑問は残るけど、年下の言う事に一々腹をたてても仕方ないかあ。まあ、精神的に年取っちゃったしなあ。

三十路の恐怖が、なんて思っていた頃が懐かしー。で、触ってみたら光りだした。おお。ファンタジー。

「ん？」

カードに浮かんだ文字を見て私は首を傾げる。日本語じゃないヘンテコな文字のはずなのに、私は何故か意味が理解出来る。

しかも、私の名前が書いてあるようにも見えるし。

「アンタは…」

すると、ちょっと無礼な年下の男が嫌そうに口を開き始める。随分と態度の悪いお迎えだよね。

「…俺のパートナーだ」

本当に心底嫌々って感じで言われたんだけど…：は？ 意味解らないので詳しい説明お願いしまーす、と私は男を見た。

「だから、俺のパートナーの——：精霊人だ。何で、こんな異世界にいるんだ？ さっさと俺の世界に転生してこない？ 俺は物心ついた時からアンタを探してたのに、アンタは転生もせずにこんな異世界で呑気に散歩かっ！？」

「いやだから一体何の事！？」

精霊人って何？ 転生って——はあ？ まさしく心境は、はあ？ って感じだよ。意味がわからないし好きで転生しなかったわけじゃないし、呑気に散歩って…。

「散歩ぐらいしかする事ないでしょうが！」

叫ばせていただきましたとも。久しぶりの会話って事も吹っ飛んで、叫んびましたとも。それで暫く男と言い合いしてたんだけど、その瞬間私が持っていたカードが光り出したのね。

「…ああ。漸く準備に入っただか」

「何が？」

一々意味あり気というかなんと言うか。

「俺はアンタを探すか、恐らく俺が今より若い時に会う事はない。だけど探せ。探して俺が19歳を過ぎた時には必ず声をかけろ。そうすれば、俺はアンタを認識出来るはずだ」

「ひょっとして…19歳になったばっか？」

「そうだ。なった直後にここに飛べた」

私の考えに、男は素直に頷いた。

「アンタと漸く繋がった。だから、たどり着けた」

何か感慨深いものがあつたのか、男の表情は複雑そうだけど。19歳なら男の子って感じだけどね。

「なんかよく分からないけど、西暦？と名前教えといて。年齢だけ聞いても、暦がわからないとズレがありそうだし」

何時の時代の何歳かってわからないと、結構きついと思うし。それに多分、この子が来たから私の成仏が始まったんだろうしね。

手に持ったカードを返しながら、私は尋ねてみる。

「…ゼノフィル・アニア・アスイフィニアだ。暦は1567。ゼノだ！ 忘れるな！！」

長ったらしい名前だね。覚えられるかなあ、なんて思ったら、消える直前の私に脳裏に刻み込めっていう声が聞こえた。

最後にゼノっていうの止めてくれないかな。ゼノで覚えてしまえそう。

そんな事を考えながら、次の瞬間には私はある意味予想通り、羊水の中を漂っていましたとも。

で、十ヵ月後には見事産声をあげて、両親から名前もいただいたんだけど…なんでか手の中には見覚えのあるカード…。あれ？ ゼ

ノに返したよね。

あ、よく見たら違うかも、ゼノは石が赤で、私のは青だもの。

「やっぱりこの子は精霊人だったのか…祝福の受け方で気付いてたんだけど、そうであってはほしくなかったね」

と、父親が意味ありげな言葉。

「でも、ほら。こんなに可愛い。パートナーが見つかるまで精霊人のこの子は私たちの手元にいるわ。護り人ではないもの」

と、母親も意味ありげ。この辺りは徐々に覚えとけばいいかなあ、なんて思ったらウトウトしてきた。

まあ、後で色々と時間をかけて考えるから、おやすみー。皆々様。おやすみー。ゼノ。

ちなみに、私の生まれた暦は1547。ゼノの一歳年上だったりする。

うん。やっぱりゼノは私より年下っていうのからは逃れられないんだねって、何となく笑ってしまったね。

アル・カナ（前書き）

平々凡々を歩んでいるかと自分では思っている織羽 風羽（20歳）。

最後まで読むとやっぱりファンタジー？

性格は厄介事には即廻れ右してダッシュで逃げろ。けれどやられる前にやれ！という感じです。

アル・カナ

ここで説明するのでしょうか、と私は誰に言うのでもないのに、語り手のような口調で言葉を紡ぎだす。それに音はない。これはあれだ。土を掘ってその中に叫んだつもりが丸聞こえ的な状況を防ぐ為の、ある意味自己防衛なのかもしれない。

私には従兄弟がいる。

何でも出来る従兄弟だ。それは血筋の欲目なんていう可愛らしいものではなく、化け物級だと言えよう。

その天才的化け物と言っても言い過ぎではない従兄弟と、私は同じ年という生まれながらにどんな災厄を背負ったんだという程の重い荷物を背負わされ、ここまで生きてきた。

せめてもの救いといえば、従兄弟の性格があまりよくないという事だろうか。

お前はどうかんだ？と突っ込みを受ければ、それはあえて沈黙という形を取らせていただこう。何故なら、私もよくはないからだ。

寧ろ空想妄想なんでも来い、とばかりの本性がばれたら痛い子認定間違いないという、別の意味で癖のある性格というのは重々承知している。だが、そんな自分の事は取りあえず横へと置いて、従兄弟の話しを続けよう。

従兄弟の名は織羽^{オルハ} 悠祇^{ユウシ}という名前からして独特な存在。身長はゆうに180cmを越し、俗にいうモデル体型というものを軽く陵

駕している。

印象的で深い黒曜石の眼差しと、手入れなしでも艶は失わない髪は多少くせつ毛だが、さらさらである事は触らなくてもわかる。

風に絹糸のような漆黒の髪を遊ばせ、壁に凭れ掛かるその姿はさながら1枚の絵画のように違和感はない。

黒曜石をはめ込んだような眼差しは切れ長。多少鋭さを感じるものの、雰囲気にもあっていて寧ろ違和感はないのだ。

学校の勉強は何もせずに満点を取れる頭脳。

運動神経は言うに及ばず拔群。

ほっておいても見ごたえのある女性たちから受けるアプローチの数々。

実家は、かなり裕福という非の打ち所のない存在。

天はこの従兄弟にどれ程の幸福を安売りしているんだと、思わずつつ込みたくなるがそれは決して私だけではないはずだ。

それとは対照的な存在といえば、私の語りを聞けばわかるはず。

そう……私は織羽 カザハ 風羽 カザハ という名前だけは変わった平々凡々を突き進む20歳。

私の平々凡々な埋没する為にあるような人生は、常に従兄弟の存在によって綱渡り状態にさせられた。何故ならば、従兄弟はもてる。これ以上ない程おもてになりまくる。が、そんな女性たちの中には当然従兄弟という地位にのさばっている私に、面白くないという感情を抱く者たちもいるのだ。

これは非常に不本意でのしをつけて返却したい汚名だが、今更それを言っても仕方ないと諦める事になっている。

そんな私の自衛手段は、情報屋。とかっこよく言ってみても実情はただの耳年増。だがしかし、自衛には役立つ手段だと中学の途中

から気付き、高校からは迷わずに実践したら効果があった。

これがなければ、私は今頃彼岸の住人だったかもしれないと、冗談にもならない事を想像してつい乾いた笑いを漏らしてしまう。

あれこれ握りつつ、女性に流して恩を売ったりと。途中は路線がそれで仲人のような存在だったが、その辺りも心強い味方を得たという事で良しとしておこう。

情報社会を地で行った私は、大学ではアイツと離れられると内心は電々太鼓を鳴らした昔懐かしい祭りを日々開催したものが、表に出す事はしなかった。

理由は簡単。

アイツは、私への嫌がらせが好きなのだ。嫌がらせの為に、女性と付き合った事も数知れず。その時は命の危険をひしひしと感じながらもなんとか逃げ切り、生きている事に感謝もしたものだ。

それなのに。

それなのに……いつのまにか志望大学を変えられ、アイツが教鞭を握り私に受験対策を施す。

そう。

流れは既に止めようのない場所まできていた。

そして現在。留年という野望を挫かれた私は、アイツと大学二年生をやっていたりする。

「：出席だけですか」

要領よく単位を取り捲ったり、教授を精神的にどん底に追い詰めたりとしながら、アイツは大学二年して卒業出来る程度の単位は取得したんじゃないだろうかと思うレベルに達していた。

別に驚く事はない。アイツが日本の大学に通っている事自体が間違いのだ。そんな中、私は従兄弟というだけで助教授に泣きつかれ、困ったように肩を落とす。

正直に言えば手に負えないのはこっちも同じ。

「助教授。迷わず、従姉弟がお付き合いしている女性に相談して下さい。そうすれば、一時は出るかもしれません」

付き合っている間はちゃんと優しいのだ。飽きれば手の平を返すだけで。その甘い期間に言えば、アイツの事だから講義の一回や二回はきっと出るはずと私は確信をもって助教授へと告げる。

すると、自分の懇願を聞き届けてもらえなかった助教授の目が怪しく光ったかと思うと、オドロオドロとしたモノを背後に背負いながら私へと言う。

「単位は、いらないのかい？」

必殺の脅し文句だと思い込んでいる助教授。

自分の受け持つ講義が絶対落とせないと分かっているからこそその言葉。

だがしかし甘いっ。と叫んで差し上げましょう。

「わかりました」

瞳を伏せた私に、やってくれるかと勘違いをした助教授が期待に瞳を輝かせる。

「留年させていただきます」

心の中で大規模な祭りを開催してもいいだろうか。いや、これは

ぜひとも開催まで持っていかねばと、親が聞けば嘆くかもしれない決意を固める。

留年さえすればアイツと離れられる。

ああっ、踊ってもいいだろうか。

「へえ：面白い話し、してるよなあ」

だけど、私が最高潮の時に限って突き落とすその声音。

悪夢の始まりを告げる響きを兼ね備えるソレ。

内心では舌打ちをしながら、私は私より大丈夫じゃない助教授へと視線を流す。面白いぐらいに顔面真っ青になった助教授にそつと、ご愁傷様、とエールを送る。当然音には出さないいつものアレで。

「何他人事って面してんだよ？」

「他人事ですから」

「相変わらず見た目は仏頂面で可愛げのねえ女だな」

「お褒めに預かり恐悦至極に存じます」

ワンブレス。

一息で言い切りましたよ私は。

するとアイツの眉間にちよつとだけ皺が寄ったと同時に、私は一歩後ろへと下がった。その時、アイツの手が目の前を通り過ぎる。

ふう。ギリギリセーフ。顎を掴まれてる所だった。危ない危ないと背筋が寒くなるのを我慢しながら、アイツを見上げた。

相変わらず嫌味な程整った顔立ち。

でも…。

「また、別れたの？ 助教授、先ほど伝えた手段は不可能になりました。新しい彼女が出来るまで少々お待ちください」

口角を上げて笑みを形作り、一礼して戦線離脱を試みる。その時に視界の隅に捕らえたのは、整った顔立ちを微妙に歪ませるアイツ。この表情はよろしくない。何かを企む前段階の表情だと、付き合いの長さでわかってしまう私はその歩みを止める事はなかった。

カッカッカッ。と微妙な高さの踵の音を鳴らし、私は歩き続ける。そうだ。とりあえず勇気ある撤退で女子トイレに駆け込むんだ。

胸にしつかりと吹けば消え去りそうな灯火を懸命に守りながら、なるべく音をたてずに横開きのドアをガッと開ける。運の良い事に利用者はいない。

そして慣れた手つきで携帯を取り出し、気分的には高速で指を動かして友人へとメール。ここまで迎えに来てもらうのだ。一人で歩いて捕まったら最後だと、何故か私の感が告げている。この辺りも付き合いの長さかもしれないと思いつつ、とりあえず折角トイレに来たのだから個室のドアへと手を置いた瞬間、身体が傾いた。

あれ…貧血？

グランッと脳をシェイクされるような感覚。持病は持っていないかったはずだと思っただけ、発病してなかっただけかも。なんて馬鹿な事を考える。

ここで意識を手放せれば楽なのに、シェイクされながらも私の意識ははっきりとした状態で、あぁぶつかる——と、何処か呑気に考えた。

だけどぶつかる寸前に私の額を覆い隠した大きな手。細くて骨ばった、触れただけで分かる綺麗な指先。

たったそれだけで、私はその神に愛されたと思えない指先を持つ主がわかってしまう。

ただ、これは私にとってはまったくもって嬉しくないシチュエーション。

思わずゲツと声が私の口から漏れた瞬間、指先に力が入り私の額が悲鳴を上げる。そんな状態の中、一人分のスペースしかないトイレの個室にしては壁が遠いと、場違いな程冷静な私の声が響く。

いつのまにかくると回された私の身体。視界は開けて見えるのは天井と…。

「なんでアンタがいるの？ 変態じゃない」

女子トイレに居るなんて変態でしかあり得ないと呟く視線の先は、何度見ても整い過ぎた顔立ちの従兄弟。

予想通り。

本当に大当たり。と小さく呟く。

しかし、コイツがいると私の凡庸さ引き立つ。それはいいんだけど巻き込まれるのが嫌なのよと、密着した悠祇の身体を遠ざけようと胸の辺りに腕を押し付ける。たったこれだけの密着で分かるほど均整のとれた身体つき。無駄な肉のない身体は、私とは比べ物にならない程の力を有しているのがまた腹立たしい。

「へえ…変態？ 何処、が？」

態々言葉を区切るな厭味ったらしい。と、下から睨みつけければ、悠祇の笑みとかち合う。久しぶりに拝む気がするご尊顔という言葉が浮かぶほどの美形。これが従兄弟じゃなかったら観賞用だったのにと思わずにはいけない。

「ナア…風羽」

しっとりと吸い付くような心地よい声音。とは思うのは多分一般的な感覚。私にしてみたらオドロオドロとしたお化け屋敷の方がま

だマシだと思ふ音。

「お前は相変わらず可愛げのねえ女だな」

そう言いながら至極の笑みを私へと向けたから、ていっとばかりに手で打ち落とす。

生まれた時からずっと一緒にいた私にしてみたら、耐性はあるし拒絶反応は起こるしで大変なのよ。

「だから褒め言葉。いい加減離してくれませんか？」

まったく私が悠祇の事が苦手というか、関わり合いになりたくないって知っているはずなのに、あえて接触を計ってくるから性質が悪い。

悠祇程の見目麗しい人間ならば、他者など掃いて捨てる程寄ってくるだろう。寧ろ掃いたり捨てるのが間に合わないかもしれない。

「聞けよ、風羽」

「聞くからその耳に囁くような不気味な声をやめてくれませんかね？」

だからお化け屋敷の方がマシなのよ。と思えば、悠祇の整った眉根がこれ以上ない程顰められた後――…。

「うわ」

壮絶に微笑まれた。

多分きつと、私以外が見れば魂を奪われるような見惚れすぎる綺麗な笑み。

「何その不気味な笑顔。用件があるならさっさと行ってよ」

そしてこの鳥肌がたつような状況から解放してくれないかな、と、至極真つ当な事を思えば、肩に回された手に力が込められたのが良く分かる。

本当に心底思う事がある。

この従兄弟は読心術を使えるんじゃないかと。

「お前の考えている事が分かりやす過ぎるだけだ」

「あら失礼な。これでもポーカーフェイスで通ってるのよ」

アンタの親衛隊に囲まれた時とか、怯えるわけにはいかなかったし。そんな情けない真似はしたくはなかったから、どんどんそんな可愛げのないと評される表情だけが増えてった。

そしたらあら不思議。いつのまにか精神もそれに引っ張られ、いつの間にかこんな感じになったけど寧ろ全然OK。困ってない。

「…まあ、いい」

「じゃ、本題どうぞ。それでさっさと離して」

「そうか。なら、言うぜ？」

態々疑問系で聞いてくる所が本当に悠祇らしい。ここで拒否をした所で許さない癖に、厭らしくもこういう前置きじみた事が好きなのだ。

相手の反応を楽しむ真性なドS。

けれど珍しく、悠祇の顔から表情らしきものが消えうせた。

あ、これはよろしくない。

直感的に思った私は身を振ろうとしたけれど、幾ら細くとも私よりもガッチリと無駄のない筋肉に覆われた悠祇の腕はそれを許してはくれず、もがけばもがく程私の視界に広がるのは悠祇の身体。

丁度胸の辺りに顔を埋める感じになったのがまた鳥肌もので、私が思わず反射的にあそこにエルボーをくравせそうになったと同時に、悠祇の腕が動いて私の身体を持ち上げた。

ああ、アレ。

世間一般的に言うお姫様抱っこというヤツ。

「俺たち一族は実は、異世界人だって知ってたか？」

「ハア？」

ささり、と悠祇の口から告げられた言葉に私の脳は一瞬にしてク
エスチョンマークを浮かべまくる。

一体何からつつ込めばいいのか。

お姫様抱っこか距離が近すぎる事か。

別に悠祇が異世界人っていうのは今更だけど、一族って事は私も
か冗談じゃないぞこんな平々凡々を絵に描いたような私を捕まえて
！という事か。

ああ、それともトイレの個室に倒れこんだはずなのに、倒れた先
はこんな中世ヨーロッパを連想出来るような華美な室内じゃなかつ
たよね。という非現実的な光景なのか。

「つつ込み所がありすぎて、何から言えばいいのやら」

思わず口から漏れた私の本音に、悠祇が楽しげに笑ったかと思う
と。

「ああ、その反応——…俺の好きな、風羽の反応だ」

今世紀最大の爆弾発言に、今度こそ私の思考は停止したのだった。

本当は最強の姉と最凶なシスコン双子弟妹（前書き）

鈍い／かつこいい／本当は最強／至高の美貌／でも自分の容姿に興味なし。な姉と、最凶シスコン双子の物語のさわり？ 的な話しです。

本当は最強の姉と最凶なシスコン双子弟妹

公爵家アルヴァトラ。

由緒正しき血筋で、遡れば王族と同じ古代種の血筋を保つ存在であり、王家の懐刀でもある。

王家デリヴァトスが光であるならば、公爵家アルヴァトラは闇であり、常に対の存在として国を維持する為に尽力を尽くし続ける。対、と呼ぶに相応しいのは、その力だけではなく、全てにおいてだった。

王家で男子が誕生すれば、公爵家では女子が誕生する。

奇妙とも、因縁とも、運命共同体ともいえる間柄の両家には、長男、長女。そして、その下に男女の双子が同じ年で生まれ順調に育っていた。

公爵令嬢であり、次期当主であるラティアス・L・S・アルヴァトラ。彼女はその才から天才と名高いが、それは裏での活躍であり、表には出さない為に実際の功績とは程遠い呼ばれ方をしていた。

彼女は、興味のあるものには情熱を傾けるが、それ以外はかなり無関心だった事もその一因かもしれない。

彼女、ラティアスの興味の惹かれるものは魔法の研究。科学、と呼ばれる異世界の技術についての応用。そして身内の事。この身内には、アルヴァトラ家とデリヴァトス家の事であり、それ以外は彼女の中に留まる事無く流れていくだけ。

そして、ラティアスの双子の弟妹の華やかさとは対照的に、ラテ

イアスは着飾る事にも華やかな舞踏会にも一切の興味は示さず、そんなラティアスは煩わす事を良しとしない弟妹が、外交面を買って出ている事もソレに拍車をかけたのかもしれない。

公爵家アルヴァトラの次期当主は、古代種の恩恵を受けているとは到底思えない当主の器すらない地味で目立たない出来損ない。

そんな噂。

ただの噂だったそれは、貴族の間では当たり前の事実として浸透し、長女であるラティアスではなく、舞踏会に頻繁に顔を出すアルヴァトラの顔となっている双子に、少しでも恩恵を預かろうと擦り寄る結果となった。それは、今なお続く事実である。

華やかな双子。

兄であり長男であるディファーラ。

妹であり次女であるディフィーナ。

古代種の恩恵を余す事無く見せつけ、才覚に溢れ、至宝と名高い容姿を誇る二人。

ただ、彼らは知らなかった。

擦り寄る貴族たちはこぞって、貴方様こそ次期当主に相応しい。

あのような出来そこないが長女とは、貴方様の苦労は並々ならぬものでしょう。

古代種としてあるまじき出来損ない、断罪すべき相手でありましょう。

そう言って貴族らしい泥沼が相応しい笑みを浮かべ、双子に擦り寄る。

王家に手を出すには些か分が悪いが、懐刀であるアルヴァトラを
籠絡すれば、王家の血筋に取り入る事も不可能ではない。

そんな思惑を隠す事もせず、今日も双子に群がる貴族たち。

そう、知らなかったのだ。

長女であるラティアスを貶める言葉こそ、双子にとっては最大の
禁忌だという事に。

ラティアス至上主義であり、一歩間違えなくても、ラティアスが
好き過ぎて平気で一線を踏み越えてしまいそうな双子だという事に。

彼らは気付いていなかった。

主な、というより、全ての要因としては、双子が態とソレを見せ
ていなかった所によるだろう。貴族がラティアスの事を貶める言葉
を口にしようと、儂い表情を浮かべ困ったように首を傾げる。

ただそれだけで、彼らは勝手に話しを作り上げるのだ。

アルヴァトラ家の将来の事で麗しの双子が憂いている、と。

きっと、心を読むというサトリの力があつたのならば、彼らは卒
倒していただろう。

双子の真実の心を耳にした瞬間、全てを手放しているかもしれな
い。

それほどに傾倒し、麗しの双子の見目に騙され、彼らは心酔し、
そして取り込もうとしていた。

取り込まれたのは自身か、それとも双子か。

単純な真実もわからず、貴族たちは声高々に叫ぶ。

これは、その麗しの双子の為になるのだと正当性を持たせ、彼らは自身の行動が正しいのだと思い込んでいた。

ラティアスの暗殺。

古代種の血筋とはいえ、その古代種に泥を塗るような出来損ないのラティアスは生きていくべきではない。

そうだ。これはこの国の将来を、そして双子を憂いての事なのだ。道を間違えた事にも、それによって結果が何を齎されるかも気が付かず、秘密裏にラティアスの暗殺計画は練られていく。

双子のお願いである妙なルール。

とは言っても、特殊な魔法が掛けられた眼鏡を身につける事に、ラティアス自身抵抗はなかった。これをかけていると便利なのだ。

そんな姉の性格を良く分かった上で、双子は外に出る時は眼鏡の着用をお願いした。そしてもう一つ、双子のお願いを律儀に、というより、ラティアス自身興味がなかった為守られる事となったルール。

眼鏡の着用と、大人しい服。

一歩間違えなくても地味、といえてしまう衣服。

淡い色ではなく、原色。しかも黒や茶色を主とした、公爵家が身につけるにはパツとしない地味な服。

生地だけ見れば一流の品。縫製も凝っており、見るものが見ればやんごとなき身分の方が身につけていると一目で分かるのだが、やはり華やかな貴族社会において、ラティアスのこの服は見た目の色合いだけでみすばらしいと決め付けた。

ちなみに、この服はラティアス自身が購入したものではない。

弟妹である双子からの考え抜かれたプレゼントであり、実際の所縫製だけではなく、半端ではない技術が詰め込まれた一品である。

その筋の人間が見れば、国宝級。そして博物館展示レベルにまで達している衣なのだが、残念な事に目が曇っている貴族たちにそれを見抜ける者は存在していなかった。

コトリ、と微かな音をたてながら小さじ程の大きさの、色とりどりの宝石が埋め込まれた

銀の棒を布を上へと置く。

妹のディフィーナの為に杖を作ろうと、魔法石と銀の相性を確認しているのだが、いまいち良いものが見つからず、つい溜息を零してしまう。

この銀はディフィーナの力を高めてくれるもの。この銀を基盤に、魔法石を決めたいと思うがやはり、定番のものでは全てにおいて台無しだ、と、どうしたものかと頭を悩ませながら、世界の魔法石が載っている書物へと手を伸ばした。

しかし、この眼鏡は本当に重宝してしまう。この眼鏡のおかげで、目が疲れる事もなく本を読み続け、細かい作業をこれでもかという程する事が出来るのだ。

流石は自慢の弟妹だ。

今度はお礼を兼ねてギュツとしようと、変わらぬ表情の奥でそんな事を考える。

「ふむ。やはり、これが気になるな」

他の国が産地であり、希少価値な魔法石。

採れる場所が特殊で、難易度が高い為滅多に出回らず、そして価格は天井知らずという一品。

公爵家であるラティアスといえども、その財を全て投げ出さなくては入手出来ないだろう。買い求めるならば。

自分で採りにいけば別である。

産地である隣国は、冒険者や採掘屋や、他の石を求める存在の立ち入りを禁止してはいない。ただ、もし入手できた場合は、その一割を国に収める義務が発生するが、概ね自由なのである。

例えばそれがドラゴンの溜まり場だとしても、入手出来たら一生左団扇の生活が約束されている為、無謀にも挑む者は後を絶たないのだ。

「よし。採りに行こう」

決まったとばかりにラティアスは立ち上がり、恥じらいも何もなく着ていたスカートを脱いでソファアの上へと放り投げる。

スカートを着ている時は分からない、綺麗な女性らしい曲線美を惜しむ事無く披露しながら、冒険者の服を慣れた手つきで身につけていく。

キラリと光るのは、冒険者である証の銀の輪。腰帯に付けられたそれは、大小合わせて7つ。七つ星の冒険者の証で、それは最高ランクであるという事を示す。

行動力のあり過ぎるラティアスが置手紙一つで、ダンスに設置した転移陣に足を踏み入れようとした瞬間、第六感を発揮したのかデイファアラが部屋へと飛び込んできた。

「姉上ッ」

扉に悲鳴をあげさせながら、デイファアラは間一髪で転送陣を無効する。それより一瞬遅れて転送陣に足をつけたラティアスは不満

そんな顔をディファアラに向けるが、あまりに切羽詰った表情をしている為、それを心配そうなものへと変えた。

ゴージャルの奥に煌く漆黒の瞳。

見つめられ、息を詰まらせそうになりながらも、ディファアラはわざとらしい咳払いを一つ落とす事により、呼吸を整え真正面からラティアスを見つめ、そして極上の笑みを浮かべ両腕を伸ばす。

「姉上。暫くは、ここに留まってもらえますか？ 俺からのお願いです」

ここ、とはアルヴァトラ家の別邸であり、最近ではラティアスの研究所になりつつある場所である。

「ふむ？」

「フィラの魔法石を採りに行きたいのは分かりますが、暫く、俺の近くにいて下さい。ね、姉上」

伸ばした両腕でラティアスの右腕を絡めとり、ほぼ同じ目線のラティアスにこれでもかという程甘えた笑みを向ける。

「ふむ。暫く、とはどれぐらいだ？」

この言葉がラティアスの口から出た瞬間、心の中でガッツポーズを決めた。あくまで、心の中だけである。

「そうですね。風待月の10の日まで。カゼマチツキこれから、20日間の間です」

「風待月の10か。悪くないな。竜たちの祝月になる。ならば今よりは交渉もしやすいだろう」

「ありがとう、姉上」

にこっと笑う一つ下の弟であるディファアラに、ラティアスも凛々しい笑みを向けながら着ていた冒険者用の服を容赦なく目の前で脱ぎだした。

「——ッ!?!?」

毎度の事とはいえ、咄嗟に目を逸らす事も出来ずに息を飲み込む
ディファアラの頭に、黒い布が容赦なく振り下ろされる。

「……ッフィーナッッ」

もご、と布が口の中に入った気がしないでもないが、容赦なく振り下ろされた鉄槌にディファアラも腕を振り上げ向かい撃つ。だが、それは宙をきり、逆の手を振り上げようとしたがその前に布が取っ払われ、視界が切り替わった事に目を細めた。

「姉様。ファアラもこう見えて一応男児なのですよ。教育上よろしくありませんわ」

既に着替え終わっているという早業を披露するラティアスに、ディフィーナが真新しい肩掛けを持ちながら声を掛ける。

「……そりゃ、俺は男ですけどね」

この場合は、何度言っても自覚が足りないラティアスに問題があるんじゃない、と小声で言えば、容赦も何もなくディフィーナに睨まれた。双子の実力は拮抗している為怖くはないが、大切な姉の前で争うような真似はしたくない。

仕方なくディファアラがひくと、既にそうなる事が分かっていたのかディフィーナは後を水に、ラティアスの肩に持っていた肩掛けをふわりと置いて合わせていた。

「ふふ。姉様には純白も似合いますわね」

漆黒も捨てがたいが、今回は純白の糸を使ってレース網で肩掛けを作らせたのだ。繊細なデザイン。流行ではなく、これから流行るもの。

満足気に微笑むディフィーナに、ラティアスは困ったように笑いながら。

「私より、フィーナの方が似合うだろうに」

と、自分の肩にかけられていた繊細なレース網を、ディフィーナ

の肩へとかけてみる。

「ほら、可愛い」

室内という事もあり、地味に見せる眼鏡をかけていないラティアスがにこり、と惜しむ事無く笑みを披露する。

「――ッ!?!?!」

先ほどディファアラがやったのと同じ息の詰まらせ方をしながら、ディフィーナは右手で宙をきる。

それは、ディファアラへのバトンタッチ。

「姉上。これは姉上へのおみやげ、です。姉上が身につけて下さいね、お願いだから」

ディフィーナから引き継いだディファアラはラティアスにお願いをすると、そうか、と納得してくれたラティアスの手にレース網の肩掛けを渡した。

至宝と名高い美貌を誇る金と銀の色を持つ双子だが、漆黒の色を持つ姉の美貌と凛々しさと強さには足元も及ばないと、ラティアスの真実を隠しながらも甘美な日々のにめり込んでしまう。

ラティアスの真実の姿を知っているのはある一部の人間だけ。

優越感であり、そして、ラティアスの真実も見抜けず悪戯に貶め、そして敵になる人間をあぶり出す為に、今日も至高と呼ばれる笑みで貴族たちに微笑みかけた。

風待月、5の日。

偶々きれてしまった道具を買い足す為に、ラティアスはマントを羽織り外へと出た。勿論弟妹に頼まれた眼鏡と、地味な色彩の服を着用してである。

その後ろから、闇に紛れるように数人の足音が響くが、周りの喧騒からか不自然な音に気付く人間は一人もいなかった。

機会は一度。

人通りのなくなった裏路地。

ラティアスが通う魔法道具屋に続く道。

ラティアスの姿がそこに入った瞬間、影に潜んでいた者たちの姿が光の下へと躍り出た。銀色の輝く刃を抜き放ち、容赦なくラティアスの命を摘み取ろうと地面を蹴りあげる。

この路地裏は、他の逃げれる通路はない。そこを挟み込むようにし、魔法が施された銀の刃で心臓を一突きにすればいい。

暗殺者たちは、そう依頼を受けていた。

だが、目の前には煌く太陽。

「なっっ!?!」

「ハッ。ばぁーか」

男の見間違いでなければ、この美貌の主は至高の美貌を持つという双子の片割れ。

「俺の姉上に刃を向けようなんて——テメエ等死ねよ」

「——ツツ!？」

にこやかに淡く微笑むという双子しか知らなかった男は、たったこれだけの事で暗殺者にあるまじき動揺を表に出してしまう。

それと同時に、男の後ろにドサドサ、と何かが落ちる音が聞こえた。

「姉様の視界を遮ろうとした愚か者ですわ。うふふ。どうしてくれるのかしら？」

そこに現れたのは、銀月の輝きを持つ至高の双子の片割れ。

「なっ：何故、貴方様方があんな出来損ないをつ！」

暗殺者のうちの一人が叫ぶと同時に、その男は頭を貫かれた。

「私のお姉様を出来損ないだなんて——どんな節穴をしているのかしら？」

「俺の姉上を出来損ないだなんて——可哀想な奴等だな」

にこり、ではなくニヤリと、凶悪な笑みを浮かべた双子が思い思いの武器を構えた瞬間、辺り一帯の気温が氷点下まで下がった気がした。

「けど、姉上が最強である必要はない。何故なら、俺が盾となり姉上を守るからな」

「けれど、姉様が最強である必要はないのですよ。何故？ ふふ。私が姉様の矛となりますもの」

麗しい双子が、この時ばかりは死の神に見えたのだが、それはきつと見間違いではないのだろう。

実際は地味に装うように双子に細工されているラティアスが最強だとか。

儚い古代種の血を存分にひいていると思えていた双子が、実は最凶シスコンだとか。

骨の髄まで身に染みて理解するより先に、記憶を失った暗殺者と追われた貴族たち。

真実を知らないのは幸か不幸か。

それは、記憶を失った暗殺者と、秘密裏に追われた貴族たちにはきつと、分らない事。

拍手 a u r a 《バレンタインデー・ホワイトデー》（前書き）

拍手からの移動です。

拍手 **a u r a** 《バレンタインデー・ホワイトデー》

《バレンタイン・デー》

「はい。バレンタインのチョコケーキ」

「うわ。すごいな」

「確かに。大変だったんじゃない？」

「個別に用意したわけじゃないから、それほどかな。甘いものだけだと飽きるかなあ、って思ったから、今日の夕食はオレが作ってたよ。」

ケーキはデザートね」

「フェル。涎…」

「垂れてない！ リーン。手伝うよ」

「早く食べたいのか：フェルらしい……テノも呼んだほうがいいかな。いや、フェルの屋敷にはこないし呼ぶだけ無駄か」

「呼んだっすか？」

「……何処から来たのかな？」

「リーンさんが招待してくれたんすよ」

「わかってはいたけど、リーン馬鹿だね」

「甘いッすよ。ヒース様」

「…?」

「大馬鹿っす。悔いる事無くリーンさんが全てです」

「いや…気持ちはわからなくもないけどね」

「というわけで」

「何が？」

「手伝うっすよ。リーンさん」

「フェルが居るけど？」

「大丈夫すよー。見えてないんで」

「……………」

《ホワイト・デー》

「なあ、ヒース」

「何？」

「リーンは喜ぶかな？」

「リーンは喜ぶと思うよ。何買ったか知らないけど」

「お前っていつも酷いよな」

「いつもならいいじゃない。日常だからもう気にならないでしょ？」

「いやいやいや。たまには優しさをもって思うだろ？」

「別に」

「……」

「そういうヒース様は何を買ったんすか？」

「最近神出鬼没だね」

「拍手限定っすよ。なんせ、俺とフェルディナント様は基本からまないんで」

「今もからんでる気はしないけどな」

「からんでないっすよ。俺が話してるのはヒース様っすから」

「魔法師団はこんなんばっかか？」

「こんなんばっかだよ？」

「……………」

「ヒース様」

「はいはい。俺が買ったのは手作り道具だよ。これさえあれば、作った玉を色々なものに出来るからね」

「リーンさんの好みを抑えているすねえ」

「そういうテノは？」

「俺は……新作の文房具と布つす。文房具の方は特別感はないすからね。布は遠くの国から取り寄せてみたつす」

「そういうテノも抑えてるよね」

「当たり前つすよ」

「で、フェルは？」

「……瓶、とか。珍しい植物の種とか…」

「何でそんなに自信なさげなの？」

「いや。だってお前等二人はリーンの好きそうなものだし」

「大丈夫だよ。その大きさからすると瓶も数十種類あるんでしょ？玉を詰めたりするのも必要だろうし。フェルにしては気が利いた

お返しなんじゃない？」

「これで異国の調味料とかだったら、遠慮なくぶっ放したんすけどね」

「……魔法師団団長ってさ、俺の事嫌いだよな？」

「リーンさんの手料理を毎日食べて一つ屋根の下に暮らしてる贅沢者が何を言ってるんすかね？」

「ワンプレス」

「……やきもちか」

「もっと言えるっすよ？ 勿論ワンプレスで」

「別に聞きたいわけじゃないよ。寧ろ面倒だし」

「魔法師団の関係がよくわからなくなるよな。妙にトゲトゲしてるっていうか」

「猪突猛進騎士団は黙っててくださいっす」

「俺も魔法を使えないわけじゃないんだけど？」

「その髪で使えないって言ったら笑っちゃうけどね」

「そうっすね」

「……お前等二人って性格悪いよな」

「いやだなあ、フェル。今更だよ？」

「別にフェルディナント様に優しくしてもっすよねえ？」

「……お前等二人ってマジで酷いよな」

「どうしたの？」

「リーンさん。こんにちわっす」

「こんにちは。フェル……どうしたの？」

「リーンの優しさが身に染みるなあ」

「リーン。フェルの事は気にしないでいいから……はい、これ」

「ん??？」

「リーンさん。俺からもっす」

「出遅れた……リーン、俺も！」

「え？ あれ？ これって??？」

「」「おかえし（っす）」「」

「えっ? いいの????」

「当たり前だろ」

「勿論」

「リンさんが貰ってくれないと困るっすよ」

「…そっか。ありがとう」

《おまけ》琥珀・クロイツ・アーフィイ

「過ぎましたね。バレンタインもホワイトも」

「そうだな」

「凛様にあげたかった…」

「今からでもやればいいだろ」

「凛様の性格上、イベントならば貰ってくれるとは思いますが」

「つまり、何の脈絡も無い日のプレゼントは恐縮されると？」

「でしょうね」

「…そうか。それもそうだな」

「相方はどうしたんです？」

「閉じ込めてある。お前に会ったら煩いだろうしな」

「可哀想に」

「心にもない事を」

「当然です。凛様の膝枕を体験したような輩ですよ？」

「しかも掴んだしな」

「……………消しましょうか？」

「やめとけ。あれも貴重な存在だ」

「本編に関係ないでしょう？」

「拍手おまけで本編を出すな。俺たちも出番は少ない」

「貴方の場合は幕間だけでしょ？」

「……お前の出番に劣ってるとは思っていないがな」

「そうですか？」

「そうだろ？」

「なんつー殺伐とした会話してるんだよ」

「なんだ出れたのか」

「出てこれたんですか。甘いんじゃないですか？」

「今度はもっと闇を濃くする」

「ちょっと待て！」

「大丈夫ですよ」

「ああ。ただちょっと迷子になる程度だ」

「……俺か？ 俺が上の赤いヤツに立場なのかよ——って、上の二人を野放しにしてるんじゃないやねえよ！！」

「「今更」」

「今更でも何でもここで会ったんなら」

「会ってないだろ」

「会ってませんよ」

「……」

「さて、煩いのが来たから俺は帰りますよ」

「いつまでもその気持ち悪い話し方を続けるつもりだ？」

「さあ？」

「……俺に対してだけ意見が合うのかコイツ等は……」

拍手 **a u r a** 《もしもシリーズ?・?》

a u r a もしもシリーズ? 凜の性別がばれていたらの甘い感じのお話し・フェルディナント編。

スン、と鼻をならせば、下から漂う良い匂いが体中を満たしてくれる。ああ、リーンだな。自分だって疲れてるのに、いつも俺のご飯を作ってくれる。

俺がリーンの作る料理が大好きだってわかってるから、いつだってリーンは笑顔で作ってくれるんだ。

「リーン」

俺が近付くのだってリーンは分かっているだろうけど、俺が声をかけるまで振り向かず待っていてくれる。

そっと抱き寄せて、耳元に唇を寄せて囁くようにリーンの名を呼ぶ。

くすぐったいのか、少しだけ肩を微かに動かすが、俺の腕の中にいるリーンは逃げようがない。

元々逃がすつもりなんてないけれど。

「リーン。今日は、何?」

「手作りパンと野菜のスープ。後は軽く炒めたウィンナーや野菜とドレッシングにマヨネーズ。挟んで食べれるよ…って、くすぐったいよ」

俺が耳元から顔を離さないものだから、話す言葉は全て耳を擦るように感じるらしい。その反応が楽しくて、可愛くて好きなんだって言えばきつと、照れ隠しで無理やり離れるんだろうな。

だからそれは言わずに、曖昧に呟きながら両腕に力を込める。

「…作れないよ？」

「もう終わりだろ。後はスープをもう少し煮込むだけ。少し…こうさせといってくれ」

でないと思えだと思えそうだと、例えば、リーンの抵抗はなくなる。

リーンの性別がわかった後の俺たちの火花は半端なものじゃなかった。恩恵、加護、竜還り、先祖還りが入り乱れての争奪戦。ひょっとしてシイリノエイが破滅するんじゃないだろうかと思う程、自然が荒れた。

リーンが俺を選んでくれて、それはあっさりとなりを潜めたわけだけだ。

とは言っても油断なんかしないけどな。

アイツ等はまだ諦めてなんかない。

俺の腕の中からリーンを掻っ攫う気だ。きっと、生涯諦めないんだろうと思うが、俺も渡さない。

こんなに愛してるリーンを手放したら、俺が生きていけない。

「リーン。好きだ。大好きだ」

「オレも好きだよ」

少し照れたように呟くリーンに、俺はというと理性を総動員させて色々と耐える羽目になった。

これも全てリーンが可愛すぎるからだけど、流石に抱き上げた瞬間ものすごい抵抗がくるので、抱きしめるだけに留めておいた。

リーンは未だに、かなりの照れ屋だ。

auraもしもシリーズ？ 凜の性別がばれていたらの甘い感じのお話し・ヒース編。

相変わらず彼女は、勉強が好き。

手先が器用だから、物を作るのも好き。

つまり簡単に言ってしまうば、彼女が熱中すれば俺と触れ合う時間が減るって事。

陛下の私兵だから、騎士団や魔法師団に所属するよりも時間は自由だ。けれど不規則。いつ呼び出されるか分からない。

まあ、俺やフェルなんかは騎士団や魔法師団に顔を出すから、時間はほぼ決まってるけど。

帰ってきてリーンの手作りの夕食を食べて、それぞれの事に取り

掛かる。俺の仕事がある場合もあるし、彼女が勉強してたりする事もある。

そんな事をやっている、殆どリーンに触れずに過ごすなんて事も珍しくない。

触りたい。

抱きしめたい。

なのに、周りから押し付けられた書類はそれを許さない。

放り投げたいけど、放り投げればリーンは実家——何故かフェルの家——に帰るという誓約書にサインを書かされた。

俺をそんな目に遭わせた事を死ぬほど後悔させてやる。

まあ、それは置いといて。

普段だったら彼女の意志を尊重して、リーンの邪魔をするような真似はしないんだけど……今日は俺の我慢がききそうにない。

ソファアーに腰掛けながら、石に模様をいれているリーンの手から彫刻等を奪い取る。

「ヒース??」

珍しいとばかりな表情を浮かべられたけど、刃物は危ないからね。リーンが怪我をしたら後悔してもしきれない。

「リーン不足。俺に抱きしめられててよ」

「……つまり」

「つまり何もじっとしてて。ほら、寄りかかって」

何か言いたげのリーンの身体を優しく抱きしめ、俺はその肩に顔を埋める。

久しぶりに堪能出来るリーンの身体と匂い。
美味しそうだなあ、なんて思うけど。

「ヒース」

タイミングよくリーンが俺の名を呼ぶ。
そうだね。明日は早いんだっけ。

陛下の野郎…。

「じゃあ、一緒に眠ろうよ。」

何もしないから、俺の腕の中で眠ってよ」

「いつも眠ってないかな？」

「眠ってない。いつの間にかリーンは端に寄っちゃうしね」

「そうだっけ」

「そうだよ。だから、リーン不足で暴走しそうな俺を助けると思っ
て、俺にリーンを堪能させてよ」

「本当に暴走しそうだね。フェルが可哀想だから、今日はもう横に
なろっか」

「そうそう。フェルの為フェルの為。じゃ、眠ろうか」

そう言って、迷わずリーンを抱き上げる。勿論抵抗はあったけど、
口を塞ぐよって言ったら大人しくなった。
別に、騒いでも良かったんだけどね。

拍手《auraもしもシリーズ?》

auraもしもシリーズ? 凛の性別がばれていたらの甘い感じのお話し・テノ編。

※テノが純情?です。

本編の黒い?感じのテノのイメージが崩れる可能性があります。

これは地響きかそれとも自分の心臓の音か。

ドッドドッと地の底から迫り来るような音と共に、俺はというと朝食作りに勤しむ。これは、いつもリーン、さんが作ってくれるというか、譲ってくれないというか。

なので強制的に寝かしつけて、今日は俺が作っているんですけどねー。

しかし、未だに慣れないと、音をなるべく抑えながら料理を作りつつ、息を吐き出した。

緊張。

ものすごく緊張。

これぐらいなら、どこぞの国を滅ぼしてきてーって言われた方が楽と思える程、今すぐ神経が焼ききれるんじゃないかと思うほど熱が上昇する。

目の前の赤と青が煌く炎と今の自分の手の平どちらが熱いかな、なんて半ば本気で迷いながら、最後にトーストを焼き上げて本日の朝食の準備は終了。

そう、緊張はこれからクライマックス。

ベットに横になるリーン、さんを起こすという一番のメインイベントです。

それが至福であり、そして身体が強張る程の緊張の時間。

嬉しくて、嬉しすぎて起こる現象。

夢じゃないかと不安になって、思わず抱きしめれば返ってくるのはリーン、さんの笑顔。

それを通り越せば別の意味で緊張が高まるけど、何故かリーン、さんの態度は変わらない。

相変わらずの微笑み。

最近、それに甘さが加わったと思うのはきつと、気のせいじゃないはず。

けれどその甘さを堪能するには、自分の幸せ過ぎでの緊張を解かなきゃならないと思えば、無意識のうちに両手に力をこめていた。

「呼び捨て：呼び捨てで呼ぶっす」

そうすれば、リーン、さんも呼び捨てしてくれる。

テノ、と呼んでくれる。

そちらの方が親しげだと思うが、リーン、さんに呼ばれた事を想像した瞬間頬に朱色が走る。

このぐらいいで照れるなんてと思えば思う程、体内に熱が宿るのを止められない。

それなりの経験もあるはずなのに、それなりは所詮それなり。

本命と相対するのはまったく違うと、この時ばかりは心底実感するしかなかった。

「リーン、さん。りーん……さん。おはようすー」

ドクンドクンと心臓の音が地鳴りのように響く。

口から心臓が飛び出すんじゃないかと思える程、きつと傍から見ると挙動不審。

「おはよ、テノさん」

薄っすらと目を開けて、ふわん、と蕩けそうな笑みを浮かべるリーンさんを衝動的に抱きしめかけたけど、やっぱり心臓が煩すぎて抱きしめられそうにない。

「おはようっす。今日はトーストと目玉焼きとウィンナーっすよ」

きつと顔は真っ赤だったけど、リーンさんは俺の手をとって立ち上がった。勿論、笑みを浮かべたまま。

繋がれた手の温もりにまた照れながら、痛くない程度にリーン……さんの手を握り締めた。これぐらいは、いいっすよね。

今は、俺のリーン、さん……だし。

拍手幻月《バレンタインデー・ホワイトデー》（前書き）

拍手からの移動です。

拍手幻月《バレンタインデー・ホワイトデー》

《バレンタイン・デー》

「はい、バレンタインデーのチョココレート」

「バレンタイン？」

「そう。バレンタイン」

「だから何だ？」

「私のいた世界だとね、この日にお世話になった人にチョコをあげるのですよ。義理や本命や友チョコや色々？」

とりあえずゼノにはお世話になってるっばいから、一応チョコ」

「あまり感謝されてる気もしないけどな」

「そうそう。一カ月後にはホワイトデーって言ってね。バレンタインデーのお礼を上げる日なのね」

「押し売りか？」

「女の子の気持ちか押し売りがいい。なんて無粋な男の子。もてないぞー」

「アンタしか知らないだろう。こんな面妖な行事は」

「甘い！ チョコよりも甘い！」

「チョコもビターがあるだろ？」

「蕩けそうな程甘いわ！」

「人の話を聞け！」

「既に広め済みだから、ゼノは色々と思うよー」

「はぁ？」

「この世界に産まれて21年。私が何もなかったとでも？」

「胸を張って言う事か？」

「というわけで、お返しガンバ！ 男性は三倍返しっていうのが相場だからね！」

「ぼったくりか！？」

「女の子の気持ちだって」

「暴れていいか？」

「口座から引くけど、いい？」

「……………なんだ？ 俺が苛められる日なのか？ っと待て。アンタ

のその後ろにあるものは何だ??」

「友達から貰ったの。私もお返しが大変なんだけどね。気持ちだからやっぱり嬉しいよね」

「……あっちに置いてあるのが俺のだよな? 何で俺より多い!??」

「大丈夫大丈夫。もらえない男の子もいるから、ゼノは多いって」

「それはフォローか?」

「ううん。ただの事実」

《ホワイト・デー》

「バレンタインも大量だったけど、ホワイトデーも大量だね。お返しが」

「お前には負けるけどな」

「そう? 最終的にゼノと同じぐらいじゃない?」

「……俺宛のは、多少は廃棄があったからな」

「廃棄??? 何で???」

「色々だ（お前に近づくとか、呪いがかけられてたなんて言えるか）」

「まあ、理由があるとは思うんだけど」

「当たり前だ」

「ふうん。じゃ、私は配りに行ってくるね」

「待て。俺も行く。どうせ配り先は被ってるんだ。一緒に回っても同じだろ？」

「そう??　ゼノってよく人に呼び止められるでしょ。時間かかるんじゃない？」

「（お前関連でな）…大丈夫だ」

「あれ?　猩々緋の色がゼノを取り巻いて……」

「全開はしてない」

「そういう問題じゃないでしょ」

「ならお前も使って相殺しろ」

「だから根本的に違うよね。寧ろお返し配るのに、何でそんな物騒なモノを纏わなきゃ駄目なのか意味がわかりません!」

「意味がわからなくてもヤレ」

「嫌です」

「わかった」

「あれ？ あっさり」

「やらなくてもいいから、俺がこれを使う事を黙認しろ」

「…ゼノに戦闘態勢に入られてたら、先生が泣いちゃうよ？」

「泣かせとけ」

「ゼノって俺様だよね。何で？」

「目的があるからな」

「目的？」

「ああ（…蹴散らす役目がな）」

「穏便に済むの？」

「勿論（…近づかないから実力行使に出る必要は無いしな）」

「ふうん。胡散臭い」

「なら、お前が隣りを歩けばいいだけの話しだろ」

「そうなんだけどね。でも、学園で魔力を迸らせる護り人って初なんじゃない？」

「半壊させてもいいんだけどな」

「面倒からそれは勘弁して」

「面倒じゃなければいいのか？」

「駄目です。地球はそういうのには無縁だったんだから、そういう物騒な事言わないの。驚いちゃうでしょ」

「気が向いたらな」

「はいはい。じゃ、配りに行こっか」

「ああ（……いつ渡すか。すっかりタイミングを見誤ったな）」

《おまけ》

「どうしたの？」

「…一通り、礼は終わったな」

「一緒に回ったでしょ？」

「ああ」

「じゃ、帰ろー。お父さんが早く帰ってくるって言ってたし」

「あの舅め」

「何か言った??」

「いや、何一つ言ってない」

「ふうん。ゼノって相変わらず変なの」

「お前には負けるだろ」

「そう? 最近独り言多いゼノには負けるよ」

「……そんなに多いか?」

「うん」

「あー…」

「どうしたの?」

「俺からのお返しは、いらないのか?」

「ずっとそれ気にしたの?」

「……………」

「別にいいのに。ゼノからはいつもお世話になってるから、気にし

なくていいよ」

「少しは気にしろよ」

「そなの？」

「ああ」

「つまり？」

「俺からもあるって事だろ！」

「短気」

「照れてるだけだろうが！」

「自分で言っちゃうんだ」

「………」

「ありがとね」

「ああ」

「開けてもいい？」

「部屋で開けてくれ……」

拍手アルカナ《バレンタインデー》（前書き）

拍手からの移動です。

拍手アルカナ《バレンタインデー》

「はい、本日のメインイベントバレンタインデーのチョコです」

「なんだ？ その棒読み？ しかも…」

「はいはい。その辺りのコメントはいりません。とりあえず人数分は用意したけど、好みとかは一切配慮してないからね」

「俺へのはあるんだろ？」

「ありません。あるわけがないです」

「つれないなあ、なあ…風羽」

「うわ。お化け屋敷の方がマシな音が聞こえてきた！」

「相変わらず可愛げのねえ女」

「そんな彼女が好きなくせに」

「おい。テメエはまだ出てきてないだろ？」

「いやだなあ。悠祇君」

「テメエに名で呼ばれる筋合いはねえ」

「風羽ちゃん。チョコありがとね。異世界で寧ろ人じゃないからそういう習慣はないんだけど、やっぱもらえると嬉しいね」

「思いつきり義理なので、お気になさらずに」

「自分を包み隠さない風羽ちゃんに好感がもてるね」

「M属性の人は悠祇と遊んでいて下さい」

「つれないなあ」

「否定しろよ」

「風羽ちゃんにはいじめられてもいっかなって。勿論、いじめてあげ…」

「はいはいストップ！。カンちゃん。この歩く猥褻野郎二人、外に放り出してきて」

「俺を呼ばないで。困るから。寧ろ【正義】を呼べばいいじゃん」

「【正義】も煩いから嫌。夜更かしがどうか始まるし。悠祇と【正義】の二人は無理無理」

「ちょっと待て。あいつ等と俺を一緒くたにするんじゃないよ」

「猥褻野郎が何を言う。歩く公害誑し人間が」

「風羽が望むなら、俺の全ては…」

「きゃー。変態が出たー」

「変態だとッ!?!」

「そうそう。悠祇が平然とセクハラかますのよ」

「——といえども、容赦はしないッ!?!」

「軽々と風羽に触るんじゃないっ!! 風羽に触っていいのは俺だけだ!?!」

「風羽をそんな目で見る事は許さん!?!」

「チョコ、置いとくから勝手にわけてね」

「あれ? 風羽ちゃん帰っちゃうの? これ放置して?」

「当たり前でしょ。面倒だし。じゃ、またね」

拍手私が魔王になったワケ《私が魔王になったアト》

※本編の印象を著しく壊す可能性のある小話です。

シリアスな雰囲気台無しのハッピーエンドVerのその後です。

元勇者⇒熱烈LOVE⇒元精霊注意報発令。

精霊王の住居、というレベルではなく神殿を見た時も思っていたが、王を頂く者の住居は無駄に大きい。

寝室と執務室はわかる。だがプライベートルームが10や20もあってどうしろというんだ？

そして浴槽が二桁もいらないだろう。

客室があるというのならわかるが、客室は魔王の住居のスペースとは中庭を挟んだ場所にある建物だ。魔王のものよりはこじんまりとしているが、それでも大きい。話を聞けば、どうやら利用するのは年に一回だとか。

今までの魔王は人間であった頃の反動か、抵抗をやめた瞬間からひたすらに贅を限りを尽くす傾向にあったらしい。それを思えば胸の奥がシクシクと痛まないでもないが、今は私が魔王になってしまった。

つまり、歴代の魔王と違い、私はONOFFのスイッチはないのだ。

常に私という人格が魔王をやるのだから、今までのような強弱のある生活ではないと側近らしい魔に言えば、戸惑ったような視線と言葉が返ってくる。

どうやら、今までの魔王は常に自分の意見のみで動いていたらしい。

善が悪に染まった反動というのは凄まじいな。

「私は人の浅知恵が作り出した魔王ではない。

意見を言え。会話をしろ。お前たちの世界だろう」

まったく、どうしてこんな事になったのか。

元々目覚める気などまったくなかったというのに…。

忌々しげに舌打ちをすれば、私の耳に届くのは昔と変わらない穏やかな――いや、変わったか。

勇者も、元がついた瞬間に何かを開き直ったのか、私が知っている頃とは違う表情を浮かべるようになった。

感情が豊かになったといえそうだが、それとは少し違うような気がしないでもないが、何が？と問われるといまいちわからない。

「エディ。エディの真っ直ぐさは好ましいけど、話すなら俺たちを通せばいいよ？俺たちは元魔王と同じサイクルに取り入れられた元勇者一行だったからね。

彼らの戸惑いの理由を、俺たちなら解る、と思うよ？」

「…ああ」

何故、勇者の言葉に私は首を傾げたくなるのだろうか。

精霊族の中でも珍しい武を私が司っていたからなのか。感情の波には慣れていないのが今となっては仇になっている気がしないでも

ないが…。

戸惑う私に、勇者は距離を一步、また一步と縮めてくる。

私の背後は無駄に縦長い玉座だ。

その後は贅の限りを尽くしたような華美な壁。

つまり逃げ道はないのだが、勇者が近づく度に私は一步後ろに下がる。

「あれ？ エディ…：どうして逃げるの？」

エディの顔をすごく近くで見せてよ」

「すごくを強調するな。そして態々見る必要などない」

「何で？ エディなら、いつだってどこだって見たいよ？」

その綺麗な漆黒の髪に口付けて。華奢な肩を包み込むように…」

段々とエスカレートしてくる勇者の言葉に、私は耳を塞ぎたくなる。

何だ？

一体何なんだ？？

コイツは私に何を言っているんだ？？？

「アーク。エディが怖がってるよー。駄目でしょお？」

その時颯爽と現れた僧侶が、救いの女神に見えた。

彼女も黒く長い髪を一つに縛り、華やかな髪飾りでとめている。

桃色の花を模った髪飾りだ。前の水色の髪でも似合うと思うが、今の黒い髪でもよく似合っていると思う。が、何故か笑顔が怖い。

人間はこんなに怖い生き物だったのか。

知恵だけがまわる忌々しい生物じゃなかったのか。

私は魔王になってから、人間の怖さを学んだような気がする。

純粹な力技だけならば、人間になど決して負けはしないのだけど。

「あはは。未知の感情だからね。怖いんだよ。知れば怖くない。ね

え……エディ？」

ぞつくううう。

背筋を走り抜けた意味不明な感覚に、私は迷わず白旗をあげた。そうだ。勇者は元だ。元勇者だ。

元勇者であって元人間だ。

つまり、現人間に白旗をあげたわけじゃない。

仮に、ここで利点をあげるというならば…。

元精霊族である私の方が、言葉を使わない魔法の発動に慣れている、という事だろうか。

勇者たちが気が付く時間も与えず、私は白旗をあげた瞬間に撤退の為の陣を発動させる。

向かう先は、最近いいなと思った景色の良い高台だ。

そこで身体を動かすのは気持ちがいいんだ。

「「あ…」」

勇者と僧侶の声が聞こえたような気がするが、そんなものは知った事ではない。

私はこれからお気に入りの場所でするんだと、既に意識をそちらに向けていたのだからな。

拍手よくあるかもしれない異世界召喚《五年前の会話一場面》

「クレナイっ。何処だクレナイーッッ！！！」

「あー。うるせえ声が」

「うるさいとは何事だッッ！！」

「その声が既にうるせえっての」

「こっちに来い！！ 剣をあわせるぞ！！！！」

「人の話を聞けっっーの」

「今日こそは勝っ！！ そしてお前に土下座させてやる！！！！」

「いつの間にそんな話になったんだよ」

「お前のその澄ました顔を泥まみれにさせてやる！！！！」

「っっーか、俺ん所そんなに嫌いかな？ 泥まみれって…お前に何かやった覚えってないんだけど」

「ああ、嫌いだな！！ お前の存在そのものが気に入くわん！！！！」

「じゃあ、ほっとけよ。面倒だし」

「だがしかし、貴様は父上の客人……！ 礼儀というものを叩き込んでやる……！」

「……面倒っつーかうぜえっつーか。俺に教える前にお前はどんなだって話しになるんだけどな」

「刃を前にぶつぶつとそれでも男かつ！ かかってこないならこちらから行くぞっ……！」

「（というか、男じゃないし）……ホント面倒なヤツだな——つと。問答無用か」

「刃を合わせろッッ……！」

「断る。っつーか、ホントマジで面倒だわ。後三日四日で帰る人間なんだから、ほっとけよ（……というか本当に毎日毎日無礼とか気に食わんとか嫌いだとか土下座しろとか、それっしか言う事はないのかしかも初っ端からだしっ……！）」

「土下座しろ……っつ……！」

「……アホか。守護の盾。守りの光。戒めの鎖——面倒だな。とりあえずシーアの全てを絡めて束縛しろ」

「——ッッ……!?」

「さあって……飯食って、王さんの所で事情話してテメエの面は見ないようにするから安心しとけ」

「——ッッッ!!!!」

「じゃーな。(ホント、なんで初対面からこれなんだったんだろうなあ。まあ、いつか)」

拍手幻視の森《思いの他》

「ふむ」

「どうした？」

「これ見てー」

「…？ 随分と控えめな数字が並んでるな」

「そっちな。じゃなくて、これが三票も入ってるんだよ？ 驚かない？？」

「そうか？」

「アルってば淡白ー」

「……」

「地味な女の子はある意味予想通りだったんだけど、auraの方が票が入るかなって思ってたから吃驚したんだよ」

「そうか??」

「だってさー。この小説って逆ハーを謳ってる割に、逆ハーっぽくないし三人の王たちとは何か不仲だし変態が出るし甘くないし。あれ？ キーワード大丈夫??」

「俺は随分と甘くなった」

「自分で言うか？」

「ルヴァが空気になった」

「柱の影に居るから大丈夫。っていうか、ルヴァって呼ぶようになったんだ」

「うつったんだろ？」

「そう？」

「拍手だからいいだろう」

「最終的に短編集に載るけど？」

「細かいな」

「アルに言われたくないよねえ」

「そうか？」

「うん」

「ふむ」

「……何？ 何処からともなく嫌な予感がするんだけど何でだろうなあ」

「キーワードに偽りあり、と思うならここで甘くしてみるか？」

「は？」

「大丈夫だ。俺は霸王だが、それ以前にただの一眞族だ。眞王は十分敬愛の対象に入る」

「初耳なんですけど？」

「拍手限定だろ？」

「今の所？」

「ああ」

「というか、敬愛は甘くならないでしょ」

「いや。十分愛情は感じている」

「は…くしゅ限定とかいうノリ？」

「そう見えるか？」

「えーと…最近、アルが過保護と化してきたかなあ、とは思うよ」

「独占欲も芽生えだしたから大丈夫だ」

「何が大丈夫なのかな？？」

「色々だ」

「うわ。不安な一言」

「眞王」

「だから琉依架っていう名前がある…って…」

「琉依架」

「きゃー。耳元で囁くなくすぐりたい!!」

「ふっ…色気が乏しいな」

「乏しくていいのよごめんなさい!! その手を離せ馬鹿野郎!!」
「」

「細いな」

「太りにくい体質だからねじゃなくてさっ」

「面白いな」

「きゃー。アルが壊れたー」

「眞王様。相変わらずお美しいです」

「って、何でウツトリしてるのか意味がわかりませんっ!」

拍手地味な女の子《リョウとりーくと俺》

好物のひまわりの種を頬張るりーくん。

ももごと口いっぱい頬張りながら、小さくてつぶらな瞳をクリンクリンとさせて俺を見上げる。

まさしく至福の一時。

手の平に乗せて、俺の手から種を貰う。

食べ終わったら俺の手から腕、肩へと登り、暫くの間ウロウロと動きながらベストポジションを探す。運動兼休憩場所探しというやつだ。

「りーくん。いい場所は見つかりそうか？」

そう聞けば、俺をジッと見つめながらなあに？とばかりにちよこんと首を傾げる。

「……………」

その動作が可愛くて、毎回毎回聞いてしまう。

そして、こういう時に後から人差し指でお尻の辺りを軽くつつくと、びくり、と身体を震わせながら恐る恐ると俺の方を見上げ、何やるの？？とばかりに注意を促すような視線を向けてくるのもまた

可愛い。

懲りずにやり過ぎると、もう知らんとばかりにソッポを向かれ、部屋に帰られるので引き際は肝心だ。

けれど大好物のひまわりの種を見せると、不機嫌ながらも種を貰いにきて、怒ってるんだからね！と言わんばかりに少し乱暴に俺の手から種を奪い取る。

でも、いつもとは違う奪い取り方と距離の取り方に段々とりーくんの方が根負けし、少しずつそっぽを向きながらも距離を詰め、最終的に俺の背後に回り身体を密着させて眠りに入る。

引き際も肝心だが、そんなりーくんを見るのも楽しみでつい度を越えて構ってしまう。

りーくんの為の小屋に運動器具。

身体に害のないものを選んで天然素材で装飾しながら、俺は今度は何がいいかな、なんてカタログとインターネットを見ながら考える。

りーくんが俺に身体を密着させて寝ている時は、考えが纏まりやすい。

こんなのがいいか。

あんなのがいいか。

ひまわりの花の形を取った装飾をみながら、夏場はこれで小屋を飾るか悩みながら、ふと別の所に目を奪われる。

インターネットを見ると、度々他の食品に目を奪われる、という事が増えた。今回つい見てしまったのはベルギー産のチョコレート。

インターネット限定という言葉が踊り、在庫1という数字も目に入る。これなら別にいつでも入手出来るが、つい購入ボタンを押しながら手続きを済ませてしまった。

衝動買いというヤツだ。

ああ。しかしな。チョコだけだと物足りないか。

恐らく高級、と言われるチョコなだけに、個数は少ない。あの頬張り方を見れば、これだと最初の休憩で終わりそうだ。

俺はページを移動させ、いつもの場所で何点か品物をカゴへと入れた。ブルーベリーやイチゴやパイナップルをチョコで包み込んだもの。

他にはクッキーとチョコを組み合わせたもの。つついチョコが多くなるが、個別包装で簡単に食べれるものというところ、こういったものしか思いつかない。

ついでに虫歯対策のキシリトール配合のガムも購入しつつ、俺はページを元に戻そうとした所で、りーくんが身動きした事に気付いた。

思いの他長い間見ていたらしい。

りーくんがもそもそと身体を動かしながら、小屋へと戻っていく様を見ながら、俺は固まった身体を解す。

こうなると、りーくんは三時間は小屋に入りっぱなしだ。プライベートの時間も大切にするりーくんは、ある程度俺にくつつくと、こうして自室へと戻っていく。

「ふ。本当に、リョウはりーくに似てる」

けれど最近、リョウがりーくに似てるのか。りーくんがリョウに似てるのか。

それとも個々で可愛いんじゃないかと思いつく自分もいるのだが…。

いまいち、チョコを口いっぱい頬張るリョウはりーくと被ってしまうのもまた事実。

だが、すぐさま、まあ…いいか。と思いつく。

まだ二年ある。

それで答えが出ないようなら、大学まで連れて行けばいい。

リヨウはいらないと言いそうだが、この大学を出れば就職先は思いのままだ。誰かの秘書にでもなって、真綿で包み込むように皆で保護すればいい。

リヨウに負の感情なんて似合わない。

今のまま変わらずにいけばいい。

とはいっても、俺たちが初めて内にいれた、俺たち以外の人間だ。

俺が手放しても、俺以外がそう簡単に手放すとも思えないがな。

拍手地味な女の子《はるちゃんと俺》

はるちゃんとの出会いは、理事長に連れられて歩いてるはるちゃんを見た時かなー。妙にちっちゃいのが付いて回ってるなー、っていうのが感想。

ああ。出会って言うっても一方通行だけだねー。

で、同じクラスでって当たり前だけどね。一クラスしかないし。理事長が初めて認めた異物に、俺は正直興味津々だったんだけど、いまいちきっかけが見つからなくてね。

なんていうか。不思議になるぐらい何も出来ない子だったよねー。でもめげないっていうか、俺たちは皆が出来るのが当たり前だったから、ちよっとっていうかかなり新鮮だったかな。ああ。あれがよく聞く一般人ってヤツなのかって。

というか、皆が人目を惹く存在らしいけど、俺たちにとっちゃ当たり前だし。

寧ろこの学校以外のヤツを見たって、顔なんて印象薄すぎて覚える気なんてないし。

アイツ等と話して遊ぶほうが面白いしさ。

今度は何処の会社を立て直そっかー、なんて軽く話して遊んでた。

ソレが当たり前だった俺の日常に入り込んだ非日常。

観察は続けていたけど、ある日副委員長が動いたのが見事なきっかけだったのかな。

副委員長も観察を続けて、偶々持っていた個別包装のお菓子を隣を通ったついでにあげた。別にただ単にこれでどんな反応を返すんだらうなってその程度。

でも、はるちゃんは頬張りながら美味しーと、同じ年には見えない満面の笑みを浮かべ、副委員長の手ずからでチョコを頬張った。

……あんな裏表なんて存在しない笑顔初めて見た。

結構吃驚？

一般人ってのは声をかけてくるから知ってたんだけど、あんな一般人がいるのかって衝撃だったね。

しかも観察を続けてたら、見事に裏表はないし人を妬む事もしないし、どんどんと突っ込んでいくし。

危なっかしい…。

カツアゲをしている不良に、天誅ーっ。なんて叫びながら頭突きを食らわしている所を見た時なんて、流石の俺も倒れるかと思っただよ。

あの何処が平凡なんだか。

乾いた笑いが出たけど、そんな笑いも初体験。

その時思った事も始めてで、俺たちかというと顔を見合わせて、この街の不良駆除に入ったね。

俺たちが見ていない所でこんな事があつたらたまったもんじゃないし。

心臓に悪い、っていう言葉の意味もわかったし。

なんていうか。

はるちゃんは俺の人生にとってはスパイスみたいなもので、何も出来ないのに目が離せないっていうか、離すのが勿体無いていう

か。

目を離れた隙を見計らうように、溝にはまっていた時は衝撃だったよ。

この高さで頭出ないんだー。

そういやはるちゃんってホント小さいよねー。

それにさ、はるちゃんだけが自宅通学なんだよね。

俺たちは別邸を建ててもらってそこを寮にして、皆で自由に暮らしちゃってるけど、はるちゃんだけが自宅から通ってる。

なんだろうな。

それってかなり心配？

溝にはまっちゃうような子が、一年間普通に通えただけでも奇跡なんじゃない？

「ねーねー。はるちゃんをさー。女子寮に住ませられないかなー？」

そんな提案をしてみたけど、副委員長からは笑われた。

既に提案済みの断られ済みだったさ。

お菓子では簡単につれるのに、何でか他の利ってのってこないんだよねー。

なんでだろ。

観察し甲斐があるけどねえ…でもさあ。

「はーるちゃん。いつその事、一緒に暮らしちゃおっかー？」

そうすれば24時間余す事無く観察できるし。

危ない目にも遭わせない。

良い考えじゃないかなーって思うんだけど、何でかはるちゃんは

脱兎の如く逃げ出した。

あれ？

こんな時は速いんだー。

へえ、はじめて見た。

「…委員長。あまりリヨウをからかうな。免疫がなさそうだ」

「あははー。違うよ。適当に遊ぶ相手じゃなくて、骨の髄まで観察したいんだって」

「りーくんのお嫁さんをお前にやるわけないだろ」

「あははははー。それ、最近中身が伴ってないよねー」

「……お前もな」

「面白いよねー。何も出来ない子なのに、はるちゃんがいるだけで俺たちの会話も変わっちゃう。ホント面白いよ」

「……………」

無言の圧力をかけられたけど、軽く流しながら俺ははるちゃん用のお菓子を持って、はるちゃんを探すために教室を出る。

これを持っておかないと捕まらないんだよね。

最近のはるちゃんって俺に免疫が出来たのかどうなのか、俺が探しても見つからなくなってきたっていうか。見つけても逃げるっていうか。あの小さい身体を利用して隙間に入り込んで通り抜けて行くんだよね。

だからこれ。

お菓子をちらつかせれば、勿体無いしね！なんて言いながら食べに来る。

「はーるちゃん。一緒におやつ食べよー」

中庭で声をかけてみればゴソゴソと音がする。

やっぱ中庭だったか。

今日は中庭になって感じがしたんだよねー。

「毎回おやつにつられると思ったら大間違いだからね！！」

ビシッと指を突きつけるんだけど、説得力の欠片もないよねー。
だって視線は袋に注がれてるし。

でも、ま……これで近付いてきてくれるなら安いもんだけどねー。
追いかけてこも楽しいけど、やっぱ近くで観察してたいしね。

拍手地味な女の子《お祭り部員と地味な女の子》

ぽてぽてと道を歩いていたら、聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

ん？

んん？？

この血肉が踊るというか滾るというか、ねじり鉢巻と撥を持つてこーい！！と叫びたくなる日本人の心を擦る音楽はまさしく、最近馴染みになったチートの一人だろう。

というか何故ここにいる？

どうしてこんな縁も所縁もないような場所に出没した？

目立つでしょ。

本当に心底場違いな程目立ちすぎるよねー。

例えばテーマソングをその身にまもっていても。

ハッピを改造したような派手な服を着ていたとしても。

ねじり鉢巻がプリントされたバンダナを額につけていたとしても。

その整った顔立ちは全てを覆い隠すというか、気にならなくなるらしい。

美形は得だねー。というレベルの範疇内なのかどうなのか。既に美形だからと言っても許される範囲は超えているだろうと思うんだけど、どうやら世間一般的な女の子たちは気にならないらしく、彼が外を歩けば牽制し合いながら群がる女の子たちに遭えたりする。

会う。逢う。じゃなくて、遭遇の遭うね。

こういう時は空気に溶け込む悲しい特技を活かし、さあ、通り過ぎるがいいわ！と壁に背をつけたたりしているんだけど、何でか今日は珍しく彼が一人で歩いてた。

ありや珍しい。

彼——つまりお祭り部員の事なんだけど、お祭り部員一人だと如何せんこの特技は通用しないのだ。

通用しないという事は…。

「よお、はむちゃん！」

見事に見つかるといふ事で。

「やあ、お祭り部員こんにちはー。そしてさよならー！」

脱兎の如く逃げ出そうとしたんだけど、その時視界の隅に写った輝かしいばかりに存在を主張するふんわかさん！

「食べる？」

お祭り部員に聞かれて。

「食べるー！ー！！！」

迷わずに答えていましたとも。

あれ？

そういえばまたもやはむちゃんと呼ばれたような。

いいんだけどね。いーんだけどね。今更だし。今更だけど、一応遼って名前があったりなんかするんだけど、人の事言えないからいつかー。

そういえばお祭り部員の名前ってなんだっけかなあ。

「政^{マサツグ}継だよ？ はーむちゃん」

っってお決まりのサトリだよねー。

「へー。まさつぐ君」

すぐ忘れそうだなあ、なんて思ってたら、いつのまにかお祭り部員のテーマソングが鳴り止んでた。

「君？」

「君がどしたの??」

「いや…」

「んあ??」

「いやいや、どーぞ。食べるんだよな？」

「食べる食べる」

ふんわかさんは、何処に入ってたか分からないけどふわふわを維持しているシフォンケーキ！

これは紅茶風味だね。いいねいいね。こういうシンプルなものも大好き！

「つと、その前にはむちゃん手え出して」

何処から取り出したのか、お祭り部員の手にはウェットティッシュ。それで手を拭き拭きとされて、はいどうぞとシフォンケーキの入った袋を手渡される。

つまりは解禁という事だよね。

食べていいって事だよね。

いただきますっ。

はぐはぐと少し大きめのシフォンケーキを頬張りながら、何でか隅っこで蹲るお祭り部員を不思議そうに眺めてみたんだけど……まあ、いっか。

放置して遠慮なくシフォンケーキを食べよっと。

こっちはバナナ。これはチョコ。おー、イチゴもある。

「全部食べていいー？」

「これもどぞ」

聞いたら増えたから、はぐはぐとそれらも口の中へと放り込んでいく。むう、何か喉が渴いたかも。

「はむちゃん」

「んー」

紅茶をもらったから、コクコクと喉をならしながらそれを一気に飲み干す。ちよつと足りないかも。シフォンケーキって結構水分持ってかれるよね。

そう思ってたら、お祭り部員がまたペットボトルの紅茶とお茶をくれた。遠慮なくいただきつつ、抹茶あずきのシフォンケーキを頬張ってみる。うん、美味しい。

学校だと小さなものが多いから、こういうケーキ類っていうのはあんまり貰わないんだよね。副委員長が週に一回ぐらいデコレーションされたケーキを持ってきてくれるけど。

しかし、豪勢な食事なのになんで皆太らないのかなー。

チートは体型維持も可能なのか。
すごいよねー。

「はむちゃんも人の事は言えないんじゃない?」

「ん? 何か言った??」

「んん。何もっていうか、名前」

「んー。お祭り部員でいいんじゃない?」

「俺もはむちゃんって呼ぶから問題ないんだけどなんか問題ある
っていうか気になるっていうか君付けがツボに入ってたっていうか」

「いっぺんに言われるとよく分からないよ。早口だし」

「……じゃ、俺も時々名前呼ぶから、はむちゃんも時々呼ぼう
か?」

「別に呼ばなくても…」

「呼ぶから、時々、呼び合おうな!」

「おおう?」

気合の入ったお祭り部員の勢いに押されて、つい頷いちゃった
りしたけど…まあ、いつか。チートといえども同級生。名前で呼ん
だ所で何かがあるわけじゃないし。

「はるちゃん」

「リヨウ」

「ん？」

これから楽しい楽しいお弁当タイムなのになんだろね。
って思ったら、妙に真面目な委員長と緑化委員。

「「マサを名前で呼んだってホント（本当か）？」」

あー。先日近所での一件ね。

「何でかわかんないけどそうだったー。あ、副委員長ー。ご飯食
べよーー」

今日は副委員長とデザートの日。

時間を無駄にするわけにはいかないのだ！

じゃーねー、なんて二人に手を振って、待っててくれる副委
員長に向かってダッシュ。

むー。この匂いは何かなー。

「なあ…ヒコ」

「何だ？」

「はるちゃん、俺たちの名前を覚えてると思う？…？」

「…覚えてないんじゃないか？」

「だよー…」

「…」

拍手地味な女の子《委員長の溜息》

基本的に、はるちゃんは何でも食べる。

好き嫌いが無い、わけじゃないのに、食べれないものが存在しないっていうぐらい食べまくる。

嫌いっていうのは大げさかもしれない。

ランクをつけていって、下位になればなっただけ食べる回数が減るだけで、食べれないわけではないのだ。

そして、次から次へとはるちゃんの胃袋の中に大量の食料が消えていく。

はるちゃんは、お菓子だけを大量に食べるわけじゃない。

何処かの大食い真っ青な程の食事もちゃんとする。普通サイズでも足りる事は可能らしいけど、その分反動がくるらしい。常日頃その反動は起こさせずに、安い材料を買い求め、自分で足りない分は作ったりもするらしく、はるちゃんは常にお弁当だ。

手作りらしく、大量に食べれるのが良いらしいんだけどね。

相変わらずその量があの小さい身体の何処に消えていくんだろうと、学校ではちょっとした七不思議になっている事をはるちゃんだけが知らない。

聞いた所で、「胃袋の中」と、当たり前のように答えるんだろうけど。

胃袋だろうけど。

胃袋以外に消えたら逆に怖いけど。

俺たちの疑問がはるちゃんに届く事はない。

そんなはるちゃんの、最近の行動範囲は専ら料理部に集中してたりする。マナとの昼食だけは欠かさないものの、放課後は調理部で材料を持ち込んだり貰ったりしながら料理に勤しみ、それを家での夕食にしたりとある意味大忙しなはるちゃん。

つまり、マナですら時間は削られているけど。

昼食と一緒に食べない俺やヒコは、尚更はるちゃんとの時間が減ってる。

休憩時間は？と聞かれそうだけど。

休み時間は、献立作りに勤しむはるちゃんの邪魔は出来ず。

寧ろ邪魔したら噛み付かれそうだけどね。

そんなわけで、椅子に腰掛けながら今日も献立を考えるはるちゃんをぼけっとしながら視界に収めてた。

食べ物には反応するんだけど、条件反射の域にまで達してるだけだし。

俺が話し掛けても生返事だし。

……暇。

本当に暇。

なんだろう。

はるちゃん、こっちに来ないかな。

席はこんなに近いのに、何でかすごく遠く感じるはるちゃんとの距離。

はあ、と溜息をついてみても、はるちゃんはまったく気が付かない。

というか、料理部の部長は三年か。

マナとは違った感じの華やかな女性だ。気の強そうな印象を受けるけど、それに反して料理好きの子供好き。

150cmのはるちゃんは、175cmの彼女にとっては子供と同じらしい。しかも、頬張って食べる姿がツボみたいだ。

そういえば、マナもはるちゃんの食べる姿がツボに入ってたって言ってたよね。

俺も嫌いじゃないけど。というか、食べる姿を見てるとほんわかと胸が温かくなってくるんだけど。

けど、今のはるちゃんはノートと睨めっこ中。

一生懸命シャーペンを握り締めて書いてる姿は可愛いんだけど、やっぱり何か物足りなくて、俺の口からは無意識に溜息が漏れてた。これで何度目の溜息だろう。

そんな事を考えてたら、ヒコが俺の頭を小突いていった。

そんなに憂鬱そうにしてたかな。

否定は出来ないんだけどさ。

実際、構って欲しくて仕方ないし。

拍手地味な女の子《他校生なチート》

いつものように学校を出て、ぽてぽてと歩いていたら。

「ほえ？」

道端に、いかにも、とばかりに置かれたお皿とお菓子の山。

「こんないかにもって罠に引かかるわけないのにねー」

ぽりぽり。

ぽりぽり。

シャクシャク。

ハグハグ。

ごっくん。

「あ……美味し」

学校でチート集団に貰うような高級な味がするなあ。個別包装なのも気が利いてるし。こんな道端にそのまんま置かれてたら蟻が得するよねー。

折角だからもう一個。

そんな感じで手を伸ばした瞬間、何でか網の中に居たりとかねっ。

「あれ??」

アスファルトが遠いよねー。

何でだろ?

でも上見るのは怖いなあ。なんて思いながらちら見して、はあ、と溜息が漏れた。こんな事をやるのはうちのチート集団で見慣れるけど、多分うちの学校のチートじゃないんだろうなあ。

「まあ、いっか。お菓子食べよっと」

副委員長から貰ったお菓子も鞆の中に入ってるんだよね！
それも食べながらのんびり見学でもしようかな。

と、お空の空中散歩を楽しもうとしてたら、くるんぐると網が引き上げられて、ヘリの中へと移動させられた。

ここからでも景色は見えるけど、さっきよりも眺めが悪いんだよね。

まったく。

眺めが悪くなった分を補うようにして、前に座るのは明らかに他校生の多分チート。この雰囲気は間違いないと思うけど。

……最近、チートに縁があるよね。

やっぱあの学校かなあ。

平々凡々に生きててチートに縁なんてないはずなのに。
そんな事を考えてたら、目の前のチートが口を開いた。

「あいつ等が可愛がってるっていうからどんなのかと思ったら……これか」

いかにも残念です、と言わんばかりの口調。

「……………」

うん。お菓子食べよ。

無視して食べたしたら、目の前の他校生チートが邪魔しようとしたから、反射的にかぱーんと噛み付いてみた。

うーん。マズイ。

まったく。折角お菓子を食べてたのに邪魔しないでほしいよね
！。

「お、お、お前！ 今噛み付いただろ！？」

「……………」

もぐもぐ。

はぐはぐ。

「…………邪魔すると噛むのか？」

「……………」

しゃくしゃく。

ごっくん。

食べてる時には喋らないよー。けど、目の前のチートは何か私からの返事を待ってるみたいだからね。もぐもぐとしながら一回だけ首を縦に振ってみた。

「…俺を見てもなんとも思わないのか？ 俺より食い物か？」

「……………」

何か目の前でチートが何か言ってるけど…。

もぐもぐ。

そんな当たり前の事を今更。

むぐむぐ。

「……食い物なのか。アイツの言った通りか。慣れてるのか。しかし動じなさ過ぎじゃないか。そんなに美味しいのか？」

お菓子が減りそうな不穏な言葉を聞いた気がするけど。仕方ない。美味しいものは皆で食べなきゃね。

副委員長から貰ったチョコレートの包みを解くと、それを目の前のチートの口の中へと放り込んだ。

抵抗しようとしたから、口を押さえつけてみた。

うん。じたばたしてるねー。

あ、ぎぶあつぷ。

程よく口の中で溶けたみたいだから手を離してみたら、他校生は私の所をジトツとした目で見てきた。

どうやら、口を押さえつけるのは駄目だったらしい。

「…おまつ、お前な！　女が口を押さえつけるか！？　窒息したらどうしてくれるっ」

「大丈夫大丈夫ー夫。チートだし、鼻は押さえつけてないし」

「そういう問題じゃないだろ」

「そなの？」

「……………」

♪~~~~♪~~~~。

「地獄の番犬が吠えるような音が聞こえてきた」

変わった着信音だね。

「……………あいつか。どうしてわかったんだ。早いだろ。早すぎるだろ」

ぶつぶつと言いながら電話に出る他校生。

《まさてーるくーーん。なあにをやっちゃってるのかなー》

聞こえてくるのはお祭り部員の音楽。

「あー。従兄弟か。顔がそっくりだもんねー」

《はるちゃん。もう大丈夫だからねー》

「おー。委員長の声」

《怖かったでしょ？》

「お菓子美味しかったよー」

《……》

《リョウ。目を閉じろ》

「あれ…？ 緑化委員のこ…」

声。とは言えなかった。引っ張られる感覚。あー、魔法だ。

お菓子は美味しかったんだけどねー。

引っ張られる感覚がなくなってから目を開けて見たら、目の前にはあの他校生じゃなくて副委員長の顔。

「ふふ。遼さんが楽しそうで良かった」

「空の散歩も出来たしねー。あの他校生は?？」

「直雅さんと彦実さんと政継さんがお話をしておりますわ」

副委員長の視線を追って見ると、揺れてるへりが……。

まあ、いつか。

拍手地味な女の子《政輝とはるちゃん》

あの空中散歩から何日か経ったとある日。

傍から見ると輝かしいばかりのオーラを放つ人物が壁に背をもたれ掛けさせて、何かを待っているように見えた。

あの三人と話し合いをしてからまだあんまり経ってないのに、すごい根性だなあ。さすがお祭り部員の従兄弟。

きっとチート力だけなら委員長や緑化委員を凌駕しつつ、お祭り部員と張るのかもしれない。なんたって従兄弟だから。

とりあえず横を通り過ぎる時、お菓子をもらったお礼を言わなければと一応足を止めて見る。

「他校生のチート君こんにちわー」

「政輝だ」

「うんうん。会長さんねー」

「……本当に名前は呼ばないんだな」

何処か呆れたような表情で言われたんだけどね。

「こっちの方が覚えやすいし」

「そっちの会長はなんて呼んでるんだよ?」

「こっちの会長さん？ 輝いてる人だよ？？」

「……………」

「前は演劇部長って呼んでたんだけどねー。三年になって部長は辞めちゃったから、呼べなくなっちゃったんだよね」

「名前で呼べばいいだろ」

「何で？」

「何で…って…え？ 俺がおかしいのか？？ 名前で呼んだ方が楽だろって思うのは俺だけか？？」

「へえー」

「…ものすごく関心のなさそうな相槌だな——…あ、こんな所にパウンドケーキが」

「ありがとう！！」

「やるとは言って…いや、なんでもない。色々あるけど…ああ。全部なのか」

はむはむはむ。

「食べてる間は大人しいんだな」

はむはむはむはむ。

「食べてる間は口を開かないんだったな」

こく。はむはむはむはむはむ。ごっくん。

「…ほら、飲み物」

「ありがとー。所でさ、前はなんでこっちに来たの??」

「唐突だな」

「委員長たちに聞いても教えてくれないから気になった?」

「疑問系かよ…いや、答えるよ。答えるからこれも食ってろ」

こっくん。

はむはむはむ。

「……政継が最近この話しをするようになったから気になったんだ」

「前からしてないの?」

「ちようど食べ終わったのか。さすが飲み物は偉大だな……じゃなくて、前とは話の種類が違いだしたというか」

「へえー。変わらないんだけどねー」

「……無自覚か」

「あ、これも美味しー」

「…………美味しくないモノがあるのか？」

「あるんじゃない？」

「……色々つつこみたいけど何でそんなに食べれるんだ？」

「食べれるから」

「なんだろうな。この、会話が成り立つようになりたってないような感覚は…」

「初めの頃言われてたかも。今は言われなくなったけど」

「へえ…」

♪♪♪。

「あ、今度は私だ。誰だろう」

「……………」

「まだ近くにいるよー。え？ んー……むうー。なら行くー。ちよっと待っててね！」

「あー…用事は終わったし、俺の事は気にしないでいいぞ」

「そう？ お菓子ありがとー。美味しかった！ じゃーねー」

待っててねー。

私のチョコレートケーキっつー!!

遠くで聞こえる叫び声。

「……楽しいのか？」

「まあ…飽きないよな」

「そうか？」

「あれ、序の口だから」

「？」

「はむちゃんの食欲、あれ、片鱗すら見せてないから」

「は？」

「俺たちも吃驚だけどな」

「結構食べてたぞ??？」

「それでもさ。まあ、美味しそうに食べるのが可愛いんだけどさ」

「…女の趣味変わったか？」

「はむちゃんはそういうんじゃないよ。見てて楽しいし。ころころと動くのがいいじゃん」

「……………」

お前が、そうやって執着を見せるのが珍しいっていうか初めてだよな？

とは口には出さないでおく。

「（つつーか、まあ、あんな裏表ない表情はじめて見たけどな。俺の顔にも無反応だし）」

とりあえず、見に来た甲斐はあったかもな。と、思わなくもない。

思わなくも無い、が。

「でさー。政輝君」

「ん？」

「はむちゃんにお菓子をあげるなら、この会に参加しような？」

「は？」

「被りすぎたらはるちゃんが飽きるだろ」

「……」

「皆で持ってくお菓子を事前に報告し合ってるんだよ。サイトはこいな」

「なんだそのある意味過保護というか無駄な会は」

「やってみるとかなり楽しいよ」

「ある意味ライバルだと思ってる従兄弟が馬鹿になったと嘆くベ
きかふぬけたと怒るべきかどっちだ？」

「ははは。じゃ、入会手続きしておくからな」

「じゃないだろっ!!」

「ナオ？ 入会者一人追加ー。ああ、この間の俺の従兄弟」

「だからっっ」

「ほれ、これパスワード。じゃーな！」

「なんだこの既視感っ。会話をしてるはずなのにこの成り立って
ない感じはさっきのあれと同じか？ 皆同じになるのか??」

政つ……って本当に俺を置いていくなよなっ!!!!」

よくあるかもしれない異世界召喚（前書き）

主人公はコスプレイヤー。月一回はイベント参加。
名前は特になし。

微妙に中途半端に終わってる感じが^^;

よくあるかもしれない異世界召喚

「また…か」

そう、また。

これで何度目の呼び出しだろうか。

一回目こそ驚いたものの、既に両手では足りない程呼び出されればいい加減慣れるというもの。

しかも、異世界トリップのお約束。

選ばれた勇者よこんにちは。

そんなノリで、当たり前のように備わっている人外魔境の力。

寧ろこれの方が魔王降臨じゃない？何ていう今更な突っ込みは、言わぬが吉。

一回目はよくあるパターンの魔王討伐。

些細な行き違いからゲームにあるようなパターンになり、勇者召喚の儀式に及んだらしい。

その辺りは仕方ないと思うよ。魔王と喧嘩した王様って数十年前に故の人だし。

そんなわけで、一人乗り込んだ私と魔王の話し合い。

魔王領で散歩していた弱小モンスターを、人が魔物討伐とか言っちゃってぶっ倒しまくって、魔界側の人間嫌いも悪化したとか。それを聞いて、何ていうか…。

喧嘩の内容も、後世に残せないショボイものだったしね。そりゃ、魔王と喧嘩した王様も口を噤むよねー。

そしたらその王様が死んだ後には血で血を洗うような争いに発展

しそうな勢いで、戦争が始まったとか。

わぁ、この展開ついてけないわー。

そう思うのはきっと、私だけじゃないはずだ。

勿論、人間側の話しも聞いてたし。裏側も調べましたけどね。だからその口に出来ないようなショボイ理由も知ってるわけですよ。魔王は生きてたから、暗躍して調べる必要は無かったけど。

で、その一回目が今から数百年前？

次に呼ばれたのはそれから50年後。

そのときは100年後。

80年後。

私にして見たら、たかが半年あまりの間に、向こうでは数百年という月日が流れちゃってるのも吃驚だし、そんなに勇者召喚するって安易な考えもね。微妙って言うか。

まあ、それはいいよ。

血なまぐさい事はやった事ないから。

小旅行感覚で済むしチートだし。

魔王だってデコピン一発でKOだし。

人類最強っていうか、適う者無し敵は無し。憧れのゲームの世界を堪能できるし、気分転換になるって開き直ったからもういいんだけどさ。

でも、さ。

何で。

本当に何でさ。

こっちの世界に呼び出される時は毎回コスプレ中なの!?

今回のコスプレは、最近人気のゲームキャラ。

女にしてはちょっと高めの身長を生かして、大体が男キャラだけだ。今回も定番通り男キャラ。

このゲームのW主人公の片割れ。

着崩した着流しに、所狭しと巻かれた包帯。首筋と指先。顔以外の素肌は一切見せない謎の多い主人公。着流しの下は黒のパンツとハイネックにブーツ。だから包帯を見せる部分はそれ程多くは無いんだけど、顔半分を隠しているのが怪しさ爆発っていう感じ。

太目のバンダナと、そこから垂れ下がる黒い布。頭をぐるりと半周分垂れ下がってる黒い布は、何故か風が吹いても捲れないという高性能。

ちなみに着物の色は淡い藤色と白色のグラデーションっぽい。

始めに女の子主人公の3パターンのEDを見なければ、この男主人公は登場しないというちょっとウンザリする感じだけど、レベルが引き継げるからまだ我慢出来る。2回目以降は第二章からのスタートで済むから、その辺りも助かったかな。

元々、こっちの主人公目的で買ったし。

で、やってみたら即嵌ってコスプレ衣装を日々作成。髪はくせっ毛。これは自前に対応。後頭部辺りで無造作に縛って、下へと垂らす。

髪の色は白だから、スプレーでちゃちゃっと対応してね。

微妙な胸はいつものようにサラシを巻いてみた。この方が何とな

く気分が乗るっていうか、男装してます！という感じが結構好き。

この世界に來ると、何故かコスプレだったはずの姿が自然なものとして定着する。本当は同一人物なのに、勇者が違う存在だと思われているのはそれが大きいんだろなあ、なんて暢気に構えながらとりあえず辺りを見回した。

いつもだったら人に囲まれた城か、神殿に召喚されるのに、何故か今回は誰もいない野原に召喚。うん。おかしいよねー。

召喚主もいないなんて、何か事故があったとしか思えない。

しょうがないと、私はこの世界で馴染みになった魔力を高め始めた。異世界を渡る代償なのか保障なのか、私に対してはデフォルメがチートだ。

右を向いても左を向いても死角無し。まごうことなきチート。どうせなら地球でこの能力をくれて思うけど、この世界限定らしい。そしてもう一つは、コスプレしたキャラの能力の引継ぎ。レプリカだった武器はこの世界に來ると同時に本物に変わっている。

今回の武器は二刀流。デザインは刀。神剣と魔剣の二振りを自由自在に扱う、闇と光の属性を持つ男主人公——ジアン・グレイ。

レイヤーの血が騒ぐのか、それともこの格好で私という存在を表に出すのは恥ずかしいというか、違和感があり過ぎるというか。

コスプレによって作ったキャラじゃなく、この世界だとジアンがジアンとして生きているから、あえて私は奥へと引っ込み、コスプレキャラになりきる。

「俺の声に応えろ」

声も、私の声じゃない低めのもの。

ゲームのジアンの声はもっと低いけど、それは仕方ない。あくま

でベースは女の私だし。

集めた魔力で契約している精霊に語りかけた。

人はこの見た目に騙されるけど、精霊は幾ら姿が変わっても私だという事を見抜く。

その都度契約をやり直す事にならなくて良かったけどね。

前回の装いから一転、シンプルな色合いの私の周りを精霊が漂い、興味深げに眺めてくる。

《今回の装いも美しいな》

まず始めに、火の精霊が声をかけてくる。

「ありがとう。で、久しぶりで悪いが、状況を教えてくれないか？」

首都からはかなり離れてる。

そして足を一步前へと踏み出せば、足の裏に固い感触と魔力が伝わってくる。この魔力の波動は召喚石。本来なら魔法陣の要部分に置かれているはずのものがこうして碎けていれば、導き出される結論はたった一つ。

術の暴発。

制御しきれなかったか、それともイレギュラーが発生したのか。

《そのお答えは私が》

私の質問に答えてくれようとした火の精霊を押しつけ、ふわり、と風に長い髪を靡かせて風の乙女が登場。

この二精霊は、私が単身で魔王領に飛び込む前に契約した、初っ

端の頃からの付き合いのある精霊だ。

火の精霊が、エンラ。風の乙女がフウカ。

……そのまんまと言わないように。

《首都で主様を召喚。しかし、敵国のスパイがいたらしく、態と召喚を失敗させたようですわ》

「…態と、か。今回、俺が呼ばれた理由はなんだ？」

《今回の召喚理由は、隣国との会議に共に出てほしい、と》

私を呼び出す魔法に対して、二精霊は敏感にそれを察知する。だからこうして、すぐに駆けつけてくれるんだけどね。

しかし隣国か、と私は考えるように視線を下へと下げる。

「最後に、俺が呼ばれてからどのぐらい経った？」

《《5年です》》

これには、エンラとフウカが同時に答えてくれた。

五年か。

五年前の知識、と言っても、私にとってみたら一ヶ月前。記憶が霞む程の時間は経ってない。

確か、ちよつと隣国との間がきな臭くなりだした頃…か。

しかし、魔王との和解から始まって、召喚勇者が便利屋になってきたなあ、この国って。私と繋がりが出来てるからか、この国の王族が召喚を試みると失敗しないのも大きいんだと思うけど。

「跳ぶ——か。エンラ、フウカ。付いてきてくれるか？」

私が聞けば、エンラとフウカは勿論、とばかりに頷いてくれた。

召喚主に聞いて解決しないと帰れないから、とりあえず王様から話を聞かなきゃね。

そんなわけでも何も、瞬間移動であつという間に玉座にたどり着いたりとか。

既に首都は勿論、王の間とかは部分指定で記憶させてるから、瞬間移動で行けちゃうんだよね。当然魔法とか転移を阻む結界は張られてるんだけど、私の魔力の方が上回っているから障害にならないし。

この国にはない衣装で王の間に登場した私に向かって、周りの騎士たちは一斉に剣を抜いたけど、その中でも王様だけが冷静だった。あ…この顔知ってる。

五年前は殿下だったんだけど、ここに座ってるって事は陛下になったって事だよな。

っていうと、隣国との悪化はコイツが原因だな。間違いない。五年前に見た時よりも精悍な顔つきになっている男を見ながら、私は分かりやすく溜息をついてみせた。その途端、ピクリ、と動く眉。

不機嫌さを隠しもせず、慇懃無礼という言葉が相応しい程ふてぶてしく玉座に背を持たれかからせると。

「此度の勇者は、随分と雰囲気が変わるんだな」

「……比べられても困るがな」

前は……護り人っていうコスプレをやってたんだよね。その時は鮮やかな紅の衣装だったからなあ、そりゃ比べられても困るって。

「まあ……いい。明日、隣国との会談がある。それに参加しろ」

「……」

相変わらず態度がデカイな。

かなりカチンときた私は、何も答えずにそのまま身を翻した。

「——ッ！ 何処に行く気だ！？」

俺の願いを叶えなければ帰れないだろう！なんて後ろの方で叫ぶ男に、私は口を噤んだままドンドンと距離を取っていく。

正規ルートで帰れないだけで、実は帰れる裏ルートも存在してたりするんだよね。ちょっと面倒だけど。でも、この世界での知り合いたちに協力してもらえば、出来ない事はないし、それに……。

「アンタが俺を帰さなければ、この国では二度と召喚儀式が出来なくなるな。それを承知の上での脅しか？」

一応というか、余裕の笑みを口元に貼り付ける。けれど男の方は見ない。

「勇者を召喚出来る、という事に胡坐をかくだけの国ならば、二度と呼び出されたくは無いし、俺はその繋がりを遠慮なく切らせてもらうがな」

くるり、と向きを変えて、真正面から男を射抜くような視線を走らせる。君のお父さんは結構面白くて好きだったんだけど、息子の

君は好きじゃないのよ。

それに、便利屋扱いでコスプレの度に呼び出されたら嫌だし。

私の言葉に、男の肩が分かりやすく揺れてくれた。勇者が同一人物だと分らないこの国の人たちは、勇者は召喚された時に記憶の引継ぎがあるものと、ありがちな勘違いをしてくれてる。

そりゃ、同一人物だから前の召喚の時を知ってて当たり前なんだけどね。

意見を変えそうに無い私に、男——シアーっていう名前なんだけどね——は悔しそうに唇をかみ締め、握りこぶしを玉座へと叩き付けた。

短気は王様になっても変わらないらしい。直情とは遠いような眼鏡キャラなのに、短気だし思慮深くないし。この辺りは私の主観が混じるからかもしれないけどね。

「くそッ——明日、護衛さえしてくればそのまま帰す。勇者の力が必要なんだ」

語尾は消え去りそうな程小さいものだったけど、シアーにしてみたら随分と頑張った方かな。

「わかった」

あっさりと頷いた私に、シアーは不思議そうな眼差しを向けてくるんだけど、五年前のシアーを知っていると、やっぱり大人になったんだなあ、と感慨深いものがあるんだよ。

「記憶の継承。アンタにしてみたら、その言葉は相当だろ？」

「——ッ」

瞬間湯沸し機のように、瞬時に顔を真っ赤にするシアアにつっこむわけじゃなく、私は王の間から瞬間移動で立ち去る。一応最後に言葉は残しておいたよ。

明日、合流するってさ。

本当ならここに残って色々と話したりした方がいいのかもしれないけど、五年っていう短い歳月はちょっと不安になる。それに、シアアとは仲が良いとはいえなかったから、やっぱり苦手意識が勝っているか。

ジアンに成りきるつもりだけど、正体がばれないとは言い切れない。五年前の続きをやろう！と言われても困るしね。

実際は一日しかないから、魔界とか精霊界の知り合いに会いに行こうっていうのが大きいんだけどね！

そんなわけで、慣れ親しんだ異世界の空を飛んだまま、私は明日にはイベント会場に帰れるつもりでいた。

まさか、それから暫くの間地球に帰れないとは思わずに。

せめてもの救いといえば、異世界にいる間は地球の時間はまったく進んでいないって事かな？

もし進んでたら、脅しじゃなくて遠慮なく繋がりをぶった切ったけどね。

箱庭の中の異世界（前書き）

主人公。二十代の社会人。キャラクター・Celestite。（セレストァイト。通称セラ）。オンラインゲームの異世界迷い込み（作ったキャラクターが画面上で）。のプログレ的なお話し。

箱庭の中の異世界

最近ハマっているもの。

オンライン・ゲーム。

【箱庭の住人】というよくあるオンラインゲームだけど、キャラクターのビジュアルとか自由度の高さとかで、相当やりこんでると思う。

マウスは面倒という理由だけで購入を決めたコントローラー。マウスは使わずに、会話はショートカットか手打ち。

まあ、カード交換をしてる人たちはそれに慣れてるから困らないんだけどね。

お仕事終了後は速攻で家に帰ってご飯を食べて、お風呂に入って肌のケアをやりながら、明日の準備までしっかりと整えてからパソコンの前に腰を下ろす。とりあえず、少し潜って仮眠をとって、午前二時ぐらいから六時ぐらいまで潜るのがいつもの日課。

大体二時ぐらいに潜れば親しくなった人たちはいるし。

新規カードはもういらないし。

しかし、最近仕事かパソコンの前に座ってるかしかないんじゃないかなあ、という生活態度。ご飯はちゃんと食べてるし仕事に支障はないから問題ないんだけど。

いつものように寝るだけの状態にしてパソコンを起動させる。

たちあがったら慣れた動作で【箱庭の住人】の画面を開きつつログイン。

ギルドカードを確認したら、やっぱり何人かは潜ってるかな。どうしようかなあ。メールを書こうか固定チャットでメッセージを送ろうか。

それとも今日は一人で洞窟をクリアしながら仮眠を取ろうかな。迷ってたら、ピコ、と音が鳴ると同時に、画面の右上にメールのマークが浮かび上がる。このメールマークの色も、ギルドカードを交換しただけだとただの白色。カードを交換しただけだと、ただの顔見知り。その次は知り合い。友人。親友。無二の友というように一緒に行動した回数によってランクが上がっていく。

今回のマークの色は金色。

これはギルドカードからのメールじゃなくて、運営側からの特殊クエストへのお誘いだという事を示している。

運営からの特殊クエストへのお誘いメールは、【箱庭の住人】をやりこむ要素の一つだったりもする。

全員が参加できるクエストや期間限定クエストなんかも結構多いんだけど、この金色メールの特殊クエストはちょっと違う。一人だったり、まったく知らない誰かとペア、もしくはパーティを組んだりして取り組む。

クリアした暁には、限定アイテムを入手出来たりとか結構美味しかったりするのだ。それは難易度にもよるけど、通常や期間限定とはまた違ったクエストというのは受けるだけで楽しい。

内心のウキウキを隠しもせずにニンマリと笑い、メールを開いた。

招待状。

Celestite. 様

アカツキノヒホウへ招待いたします。

クエストを受けますか？

yes or no・・・。

勿論yesを選ぶ。

すると、画面の中の私の分身とも言えるCelestiteの周りに、転移の陣が浮かび上がった。どうやら今回のクエストは特殊フィールドに連れて行かれるらしい。

となると、結構アイテムなんかは期待できるかもしれないなあ。ギュッとコントローラーを握り締めながら。次の動作に入れるような心構えだけはしておく。

今回の装備はそれなり。レアな装備品は少し。死んでもペナルティ無しで生き返れる甦りの腕輪と、死ぬ前に安全区域に転移出来る危険領域脱出指輪。なんだろう。特殊クエストで入手出来るレアなアイテムがこれ系っていうのは自分的には微妙だけど、死んでペナルティを受けるよりはマシかなあ、と思わなくも無い。

私の分身ともいえるCelestite。――通称セラは、前線で戦えるキャラではなく、完全な後方支援型。

回復系キャラの神官をメイン職業にして、副業で精霊師を選んでる。この辺りはやりこんだ甲斐があってレベルアップしてるから、戦闘では重宝されたりもするけど、やっぱり単独行動は向かなかったりする。

とりあえず直ぐに戦闘に入れるように、防御だけはしっかりと固めておく。普段の場合は転移中は行動不可だけど、特殊クエストへの招待については行動可能になる。理由としては単純で、転移が済んだ瞬間何百体というモンスターに囲まれたりする事があるからだ。コントローラーの他にキーボードも使いながら、ショートカット登録されている魔法を発動させていく。

【防御——風】

【防御——炎】

【自動回復——大地の恵み】

【自動回復——癒しの水】

【自動攻撃——追撃の龍】

【障壁——魔法防壁】

「これぐらいかな」

攻撃が追撃の龍というのが極悪というか、これしかないのかというか。

でも、これのおかげで非前衛のセラがなんとか一人で洞窟、森、神殿はクリア出来るようになったと思えば、多少極悪でも文句は言えないだろう。

とはいっても、貰い物だけど。

一ヶ月程回復パシリをやった報酬として、レア召喚アイテム【追撃の龍——ピアスタイプ——】をもらえたのは妥当なのかどうか。そのおかげで、あの変わり者と無二の親友になってしまったが仕方ない。

ちなみに、その三つ以外には天空城、地下遺跡、魔王城、最果ての大地というマップがある。流石にそれらは無理だけど、追撃の

龍にそこまで求めるのは酷というものだ。

もう少しセラのレベルが上がれば、天空城辺りはいけそうな気もする。が、何故か変わり者の無二の親友がそれ以上は付き添うという事を宣言している為、チャレンジは難しそうというのが今の現状だったりもする。

そんな事を考えていたら、セラを取り巻いていた転送陣が段々と薄くなり、最終的に空気に溶けるように消えていく。

一瞬画面が白くなるが、それはいつもの事。次の瞬間には画面には見慣れた景色が映っていた。

どうやらスタートは森フィールドらしい。

そしてNPCの姿が一切ない。人探しから始まるクエストも珍しくはなく、セラの防御をもう少し固めてから森を歩き出した。

ここがよく知っている森ならこんなに防御を固める必要は無いけど、如何せん今回は特殊クエストだ。初期モンスターがのんびり歩いているとも思えない。

「さて…と。人はどこかなあ」

人を見つけて話しかけて、クエスト内容を確認してクリア。一度でもログアウトしてしまえばこの特殊クエストは破棄扱いになる。つまり、睡眠時間を確保しながらクリアする必要があるのだ。

「早く見つけないとねー…」

セラを右へ左へと動かしながら、画面の中にあるはずの目印を探す。

「何処かなあ」

しかし、独り言が増えるなあ。

って、独り言が多いから絶対マイクは使わないんだけどね。音声
が相手に聞こえるわけじゃなくて文字に変換されるだけなんだけど、
この独り言が全て文字になるかと思うと恐ろしい。

『こっちだ』

その時、パソコンから音が響いた。

「ん？」

思わず首を傾げながらパソコンを凝視してしまう。パソコンの音
は消してるわけじゃないけど、【箱庭の住人】で音を発するキャラ
はいなかったはず。

「こっち？」

空耳かな。

なんて思った私の耳に、他の音も聞こえてきた。

『こっちだよ。神官様』

『こんなぼけつとしたヤツで大丈夫なのかよ』

『失礼だよ。それに、この辺りの診療士と一緒にしちゃ駄目だよ』

『診療士と何処が違う？』

『何処って…診療士から診療師。更に修練を積んで治療、医療、治療、神療、そして最上位の神官という地位を得られるんだよ』

『細かいな』

『君が勉強不足なだけだよ』

というか……。

音とかそういうレベルじゃなくて、声が響いてるような気がする。

『何か言ったらどうだ？』

呆然と画面を見つめる私に向かって。正確にはセラに向かってだけど、赤髪の失礼な方が睨みつけながら言ってくる。

藍髪の人は物腰は柔らかかそうなんだけど、赤髪の人に対しての対応を見てるとものすっごくいい性格をしているような気がしないでもない。

っていうか、何か言ったらどうだも何も、何を言ったらいいんだろう。

特殊クエストはいつも変わってるけど、今回のクエストはそこでも相当なのかなあ。

「状況がつかめないから放置したいんだけどなあ」

と、NPCに真面目に答えたら、赤髪の人はその表情を露骨に変えた。

『お前…いい性格してるな』

「ただ状況がつかめないから、放置したいって言っただけなんだけど？」

『コイツが神官様、と呼んだら？　なら、お前に用事だってわかるだろ』

「今回のクエストの内容を知らなくて。状況を説明してくれるなら嬉しいけど？」

動作キ―で腕を組ませ、困ったようにセラの首を傾げさせる。
サラリ、と水色の髪が一房流れ、セラの頬を撫でていく。
うん。流石私好みのキャラクター。悩む姿も様になるね。

『チツ…キイス。説明をしろ』

『相変わらず君は態度が大きいよねえ。いいんだけど。じゃ、神官様。説明させてもらってもいい？』

「拒否権はなさそうに見えるんだけど」

『勿論。神官様には、アカツキノヒホウを僕たちと一緒に探してもらうから』

キイスと呼ばれた藍髪の男の人が、人好きのするようになつこりとした笑みを浮かべつつ、さも当然とばかりにそんな事を言うてる。

……突込み所は沢山あるんだけど、何処からつつこんでいいのやら。

というか、どうして会話が成立するんだろう。

音声変換はしてないんだけど。

『早くしろ、こっちだ』

すると、赤髪の男が痺れをきらしたように、セラの手首を掴んで引っ張っていく。

っていうかさ、人の可愛いセラの腕を掴むな！

「短気」

不機嫌さを隠しもせずには咥けば、赤髪はセラを一瞥した後に視線を逸らした。どうやら自覚はあるらしい。

そしてキイス。君は絶対腹黒キャラだろう。

どんなクエストかまったく想像がつかないまま、セラは引っ張られつつ結界の効いた小屋まで連れて来られた。

んー。セラにはもっと綺麗な建物が似合うんだけど。

そんな事を思いながら、いつでもボタンを押せるように準備しておく。襲われたら自動で追撃の龍は発動されるけど、このボタンを押せば戦闘に入らなくて追撃の龍を呼び出す事が出来る。

人相手なら十分威圧を与える事が出来る追撃の龍——変わり者トッブプレイヤーがレベル上げ済み特殊スキル身につけさせ済み——だ。

「さて…と。どんな内容なのかな」

口から漏れた小さな独り言だったけど、やっぱり画面の二人は反応しながら椅子に腰掛けた。

まあ：なんていうかさ。

本当につつこみ所満載の特殊クエストなんだけどね。

猫又と王子様（前書き）

猫又（転生）と王子様の出会い編です。本当に出会いだけなので、ものすごく短いです。

猫又と王子様

生まれ変わったら猫又でした。

いやホント猫又だったんだって。

艶やかな黒の毛並み。

知的な金色の瞳。

生まれながらに二つに分かれた尻尾。

元々、由緒正しき猫又の家系に生まれたらしいから、一年後ぐらいには尻尾が分かれたらしいんだけどね。

まあ、兎に角そんな猫一家に生まれてから早二ヶ月。

何故か私は生涯のパートナーになるであろう男性と向かい合っていた。ちなみに、色っぽい意味合いはまったくくない。

私が向かい合っている人物は人間。この国の第三王子様という立場。お母さんに聞いた話だと、この国の王族はペット、というには御幣があるけど、とりあえず飼うらしい。ソレは獣だったり鳥だったり、爬虫類だったりと割と何でもあり。

けれど一つだけ重要な事がある。

必ず、魔力を有した存在じゃなければならぬという事。

後は相性。これはまあ、死ぬまで一緒に居るって事で必須じゃないけど重要だよなって所かな。

互いを認め合い、パートナーとして契約を結ぶ。何が出来るかはそれぞれ違うけど、契約を結びたがる王族としては、実のところ何でもいいのかもしれない。

王族は魔力のある動物をパートナーとしている。

これが、昔からの取り決めらしいから。

そこまで考えて、私は顔だけは整っている王子様を高い場所から見下ろす。

生後二ヶ月という子猫の私が、何故親元から引き離されて王子様なんていう人種と対面しているか。

本来なら有り得ない。

一歳の誕生日を迎えて初めて親から離れる。それまでは魔力が安定しないとか。私の場合は既に尻尾が分かれちゃったりしているから、他の猫又と一緒にしちゃ駄目なのかもしれないけどね。

けれど今頃。王子様なんぞと向かい合っていなければお母さんや兄弟たちとぬくぬくしていられたのに、どうして私がこんな目にとばかりに右手を振り上げて座っている箆笥へと叩き付けた。

「……」

次の瞬間、重なったのものは沈黙。

それだけで苛々が収まるはずもなく、私は口をギュッと噤んだまま猫パンチを繰り出し続ける。

「不満そうだな」

「……」

箆笥へと肉球を叩きつけて、猫パンチを繰り出している場所なんて見れば今更だと思うんだけどね。

そうは思ったけど、口は開かない。

どうして私がこんなに怒っているか。

それは、目の前の——絵本から飛び出たような美形の王子様が、

強制的に私をパートナーにしたから。

私が普通の猫又だったら、こんなに腹をたてなかったのかもしれない。しかし、私は生前の記憶がしっかりとある。しかも人間のものだ。

本来ならばお互いが話し合って結ぶ契約を、火事場泥棒のように勝手に結ばれた。それに腹をたてるのは当然だろうと思う。

だから私は口を開かない。

契約を結んだ相手なら、人化しなくても言葉が通じるらしいけど、そんな特典を使う気分にはなれない程、私は機嫌が悪かった。

とはいっても、所詮見た目は可愛い子猫。

目の前の王子様は堪えた様子などまったく無く、目の奥に冷静な光を宿しながら私を観察している。

この淡々とした表情は、王子様の銀色の髪と良く似合う。

瞳の色も碧色。

ホント、眺めるだけなら申し分の無い八頭身。

中身はか弱い子猫を無理やり親から引き離すような鬼畜だけど。

「何か変な事を考えていないか？」

……どうやら感は良いらしい。

しかし、声もいいな。この王子様は。

「…ふう。いい加減機嫌をなおさないか？」

けれど王子様は、私が何に対して怒っているかなんてまったく考えもしてないのか、さも当然とばかりに言い出す。

「……」

「これから長い付き合いになるのに、初日からこれだと先が思いや

られる」

先が思い遣られるのはこっちの台詞だ！

怒鳴り散らしたくなったが、相手を喜ばせるだけのようないきがして、私は辛うじて理性を総動員させて踏みとどまった。

ひょっとしたら、ほんの少し声は漏れていたかもしれない。

ニヤリ、と口の端を上げて笑みを浮かべるといふ、爽やかとは程遠い笑みを浮かべる王子様が私の目に映ったからだ。

折角なら爽やかに笑えばいいのに。目の前の王子様だと知的にかな。間違ってもこんな悪人面で笑ってほしいなんて思わない。

「そういう声、か。知ってはいたが、目の前で聞くといいな。もっと声を出さないか？」

「……………」

悪人面から一転。今度は流し目をし出した王子様を目の前に、私はとある事を悟る。

うん。

変態だ。もしくは猫好きさん。

対人間ならば色っぽい流し目だけど、それを見せた相手が生後二ヶ月な子猫だと、ただの危ない人にしか見えない。

ジリジリと距離を詰める王子様と、退路を見つけるべく視線をさ迷わせながら後ろへと下がる私。

「早く成人すればいい。お前も、他の猫又と同じなのか？」

「……………」

口を開けばなんか残念な事しか言わない王子様を横目に、私は勢いをつけて箆笥から箆笥へと飛び移る。ここが閉めっきりの部屋じゃなくて良かった。

お母さん。お父さん。兄弟たちよ。

今帰るから待っててね。

そして匿ってくれると嬉しいよ！

猫又と王子様・2（前書き）

主人公と兄。

猫又と王子様・2

脱出に成功した私は、お母さんと腕の中で兄弟たちとぬくぬくと寝入ってた。ある意味現実逃避だって分かってるよ。

なんたって、私の腕には契約の証が浮かび上がってるから。

あの顔だけはいいい王子様の腕にも同じ模様が浮かび上がってるだろうけど。

『……』

テンションが下がった。

本当に心底下がりまくりですよ。

おそろい。

ペア。

仲良し。

らぶらぶ。

二人の約束の印。

ざっとこれだけの言葉が脳裏を過ぎるけど、全てに却下を下しながら私は兄の腹を枕にしながら天井を仰ぐ。

このぷにぷにがいい感じ。

『どうしたの？』

『うゝなあゝ』

兄の言葉に中途半端な猫っぽい言葉を吐き出しながら、私はころりと体の向きを変える。目に入るのは天井じゃなくて肉球。

つまり私の手。

小さな子猫の手なんだけど、爪は出さない状態で兄の尻尾にちょっかいを掛け出す。

『ティは甘えん坊だね』

そんな事を言いつつ、私が遊びやすいように尻尾をパタン、パタンと動かしてくれる兄——ユウの尻尾に両手でじゃれ付きながら、私は重たい口を開いた。

話してスッキリしたい。

そしてあの無駄に顔だけはいいと思うけど、性格が受け付けない王子様には会いたくない。

『あのね…』

嫌そうに口を開きだす私に、ユウは優しい眼差しを向けながら話を聞く体勢をとる。この場合、尻尾が動くのはただの癖だろう。いつも尻尾で遊ばせてもらってるから、私が近くにいると遊びやすいように動かしてくれる。しかし、猫の尻尾にじゃれつく中身二十：才。

考えるのは止めておこう。

『……それは大変だったね。話し合いは無しだったんだ』

『何も無いよー』

私の話を聞き終えた後、ユウは困ったように金色の瞳をギュツと閉じる。人間の姿だったら眉間に皺が寄ってるのかもしれない。生後二ヶ月の子猫だけど、精神的には十代後半ぐらいなのかもしれない。ユウ限定だけど。他の兄弟はもっと幼いから。

『お母さんに相談してみようか。僕たちじゃまだ何も出来ないけど、お母さんだったら手段がありそうだし』

『そうだねー』

私たちにとっては優しいお母さん。

今回はただの顔合わせだって言ってたから、あの顔だけは良い王子様の不意打ちという可能性は高いね。

ユウのお腹の感触とか尻尾への誘惑とかは色々あるけど、それらを全て我慢して立ち上がる。ここにいる限り人間は手出し出来ない

けど、外に行ったら絶対連れて行かれそうな気がするし。

……外には出たいしね。人化して街で買物だってしたいから、結局あの王子様を何とかするしかないんだよね……。気が重い。

重いけど。

勝手に結ばれた契約だけど。

私が死ぬまでアレがぱーとなー……。

『僕も一緒に行くから、ティもおいで』

『うんー。ありがとー』

私の色々な葛藤に気付いたのかどうなのか、私よりも大きなユウが私を背に乗せて歩き出してくれる。

ちなみに、ユウの方が私の倍近くの大きさがある。ユウだけじゃなくて、私が小さすぎるんだけど。

あー。ひょっとしたら小さくて過保護に甘やかされて育ってるから、尚更嫌なのかもしれない。人間らしい生活よりも二ヶ月で猫ライフにも慣れきったし。

『ティ。大丈夫だよ。契約は契約としても、一緒にいるって強制は無いからね。主従でいえばこっちが主だよ』

『そうかもしれないんだけど……』

あの王子様はそういうんじゃないで、何ていうか変態っぽいのが悪寒ものっていうか。子猫に色っぽい流し目で近付いてくるっていうのが本当に嫌っていうかね。

『いざという時は一年我慢してて。僕が成人したら……ね』

『ユウと一緒に安心だもんね』

それまで猫ライフ甘えっ子を堪能するのもいいかもね。自宅は人化対応の部屋もあるし、本さえあれば引きこもりでもいけそうだし。とりあえずお母さん次第だけど。

お母さん。

黒の毛並みに金色の瞳。

これは皆同じ。兄弟も私も全員がその色彩。けれどお母さんの場合は、黒というよりも漆黒。毛並みから漂う雰囲気からして違うんだよね。

『お母さん、ちょっといいかな?』

ユウの背中にしがみ付きながらウトウトと惰眠を貪ろうとする私を気遣いながら、ユウが事情を説明してくれる。

こうやってみると、ユウが一番お母さん似かもしれない。

まだ成人してないからただの黒と金だけど、成人して正式な猫又になったら溢れんばかりの魔力を有する猫又になるんだろうって思う。

私がいなかったら、兄弟の中で一番の強者だったんだろうなあ。今回は規格外の生まれながらの猫又の私がいるから、ユウの魔力も外部からは注目されていない。

逆に、私という存在がユウにとって隠れ蓑になってるのかな。黒の猫又族の間でも、生まれながらに尻尾が分かれてた私の方が注目されてたし。

しかし眠いなあ。

ユウの毛並みがふわふわで気持ちよくて、ついうとうとと…。

『ふむ…困ったものだねえ。あの王子様は』

『お母さんは知ってるんだ。王子様の事』

『知ってなければ娘には会わせないんだけどねえ。生まれたお前たちを見せた時にティを気に入ったのは知ってたけど、まさか強制契約をする程とは思わなかったよ。』

ちよつと早いが、ティには魔力の使い方を教えた方が…』

『あれ。寝ちゃったね』

『無邪気な寝顔をしちゃってまあ』

金色の瞳を細め、ユウの背中で眠りこけている私の頭をお母さん

が優しく撫でてくれる。
うーん。気持ちいいなあ。

『僕がティの近くにいるよ。お母さんがつけてくれた守りの石もあるから余程の事がない限り大丈夫だとは思うしね』

『あの王子様ならティには危害を加えないだろうけどねえ』

『…そう？ ティの話しからすると、執着心は凄そうだよ？』

『だからだよ。あれは大切なものは大事にするタイプさね。結局、ティが逃げれば追いかけられないだろうしねえ。今の所は』

『…お母さん。最後の言葉は余計だよ』

『ティが成人したら追いかけてさうだけど、今はまだ子供だから大丈夫』

『後10ヶ月。僕も早めに訓練を始めようかな』

『……アンタも大概シスコンというやつだねえ』

『それはティが可愛いからだよ。小さいし守らないとね』

猫又と王子様・3（前書き）

第三王子と第四王子の出会い編。

猫又と王子様・3

王族は、魔力のある人間以外のモノと契約を結ぶ。それは昔からの取り決めで、破られた事はないしこれからも破る事は有り得ない。というよりも、あつてはいけない事。

この国を守護する姿無き守護者との取り決め。

20歳という年齢までに、パートナーを決めて契約を結ぶ。姿無き守護者が、初代国王のパートナーであった存在であった為と言われていたが、真偽の程は定かではない。

だからこそ、幼い頃からそういった存在たちと触れ合う機会は多かった。両親からは、この相手とならと思う存在がいたのならば逃がさず交渉しろと言われ、二人居る兄たちもその言葉通りこれだと思えた存在たちと契約を結んだ。

長兄は鳥の形をした存在。大きさは肩に乗るぐらいのもの。

次兄は蛇。両腕を伸ばした程の大きさのもの。一瞬蛇かと皆で頬を引き攣らせたが、色が白。目が翡翠色という配色が思いの他綺麗だったからなのか、家族たちからは特に問題なく受け入れられた。

そして俺。18歳という年に達してもパートナーを選べていない俺は、父親からプレッシャーを受けるように人外の誕生の場合へと送られる。今生きている存在たちが気に入らないのなら、これから生まれてくる子たちで選べという事らしい。

そんな無茶な。

成人の儀までは一年程。つまりギリギリだろうと思うが、俺が選べていないのだから仕方ない。

今日は、王国の隣の森に居を構える猫又族の出産があるらしく、

父が許可を取り俺がそれを見に行く事となった。

猫又族は、黒の毛並みと金の眼、そして二股の尻尾を持つ猫だ。成人の儀を迎えると、黒だった毛並みは漆黒へと変わる。とはいっても、人間が見れるのは漆黒の毛並みになった猫又だけ。

一歳未満の猫又たちは一族の保護の下、立ち入り許可となっていない森で過ごしているからだ。

だからこそ、今回の出産への立会いは例外中の例外。それも、母親が猫又族と契約を結んでいたからだろう。出なければ、出産に立ち会えるはずがない。

いつもだったら出産後、安定してからそつと様子を伺う程度なのだが、許可を取ってくれたのなら見ておこう。

でなければ、母親もパートナーの猫又も……。

「兄上」

その時、俺の思考を遮るように弟の声が響く。

俺よりも一つ下の弟であるエイラ。俺が言うのもなんだが、柔らかな金の髪と碧色の瞳を持ち、穏やかな笑みの下では相当な黒さを隠し持っている兄弟たちの中では色彩だけではなく中身も一番母親に似ている存在だ。

長兄から俺までは父親似。

「俺も行けて、母様から言われちゃった」

にこり、と太陽の日差しが似合う満面の笑みで言われるが、俺はへえ、と素っ気無く言葉を返すだけに留めておく。

太陽の王子と月の王子。エイラと俺はよくこう称されるらしいが、柔らかな笑みを持つエイラと違い、俺の目つきが悪いからかと問いつめたくなかった事がなかったわけじゃない。まあ、俺の髪が銀色だからだろうが。

「リーエル兄上でも、俺でも、どっちでもいいから猫又族と契約を結んで欲しいって母様は考えているみたいだね」

「そうみたいだな」

母上の肩の上で黒い猫が寛いでいるのを見て育ったが、あれは色々な意味で力が抜ける。女性はいいが、男が肩に猫を乗せている光景というのは威厳からは程遠いのだと思う。

「……」

「何？」

俺は隣を歩いているエイラをジッと見つめた。

勿論、エイラからは首を傾げられたがそれでも見続けた。

この弟なら、猫又でいいかもしれないな。

違和感なんて何もない。それ所か、色々と騙せていいんじゃないだろうか。

「ふふ。兄上って結構考えてる事が表に出るよね。皆出ないっていうけど、俺より遥かに素直だと思うよ」

「：お前と一緒にするな」

「わかってるよ」

にっこりと、輝かんばかりの笑みを浮かべながら素直に頷くエイラ。表面上だけで受け取るなら邪気のない笑みにしか見えないんだがな。

それが逆に怖いと俺は溜息を口の中で零すと、猫又族の森の中へと足を踏み入れた。

その時、淡い光を放つ母から受け取った小さな宝石。

猫又族から借りた許可証。一回だけしか使えないらしく、その光は段々と輝きを失っている。

「この光が消えるまでに森を出ろって事だね」

「ああ。早く行くぞ」

出産前に消えるとは思わないが、それでも急ぐに越した事はない。

そこで、俺は運命の出会いを果たす。

白い光に包まれ、生まれてきた小さな黒い塊。

生まれた直後なのに、二股に分かれた尻尾を動かしながら、四本の足でしっかりと立ち上がる。が、身体が斜めになり倒れそうになるが、その猫又よりも一回りも大きな猫又に助けられ、何とか立っている。

小さな小さな身体。

だが、その身体から立ち上る魔力は純粹な透明。魔力が揺らぐ時、陽炎のように空気が揺れ辺りの視界がぼやける。

相当の魔力の使い手。

周りで見守っていた猫又たちも騒然としている所を見ると、俺たちはかなり貴重な赤子の誕生に立ち会えたのだろう。

「…リーエル兄上」

「……」

「俺の見間違いかな？」

「……いや」

貴重な純魔力の使い手の誕生。

なんて事は霞む程、俺が驚いた光景が目の前に広がった。たった一瞬。子猫を包んでいた白い光が人の形に見えた。

黒い髪と眼を持つ、人間の女に。

通った鼻筋。薄い唇。そして、印象的な黒い瞳は状況を把握しようとしつかりと辺りを見回し、俺と一瞬だが眼が合ったような気がした。

長い長い睫毛。その睫毛すら黒という、高貴な色に包まれた人間。

「綺麗だ…」

エイラが、俺の隣で声を漏らした。

感嘆の、歓喜の混ざったような声音を…。

女の姿は消えていたが、一回り程小さい猫又の子猫は金色の眼を開き、辺りを見回している。

成人の儀を迎えていない子猫のはずなのに、既に他を圧倒する空気を平然と纏いながら、自身の身体を支えてくれた猫又に頬を寄せた。

『なあ…』

甘えるような声で鳴きながら、母猫を見つめコテッと音をたてながら寝転ぶ。

「あの猫又は長兄だね。あの子がいなかったら、多分猫又を代表するような魔力の持ち主だね」

「ああ」

透明ではないが、純粋な黒の魔力を放つ子猫。
尻尾は一つ。

「睨まれた気がするな」

「睨まれたね。兄弟想いの長兄、だね」

だけど、エイラの眼差しは一番小さな猫に注がれたまま。

「俺は末っ子だから、甘えるだけ、だけどね」

俺の視線の先に気づいているのか、エイラが微笑みながら言い切る。きつと、考えている事は同じだろう。エイラも俺も、生まれながらに二股の尻尾を持つ猫を狙っている。契約を結ぶ相手として。けれど、俺はわかってる。

一年とはいえ俺の方が時間がない。俺とエイラが言えば、俺が優先される事を俺は知ってる。だから、俺はエイラ笑みを返しておいた。

譲る気はまったくくないという意味をしっかりと込めて。

猫又と王子様・4（前書き）

第四王子と猫又兄の腹黒会話。

猫又と王子様・4

俺の名前はエイラ。

三ヶ月程前に一目惚れをして、その相手との契約を一つ上の兄に持たされた、結構可哀想な末っ子だったりする。

リーエル兄上も一目惚れだったけどね。知ってたけど、問答無用で成人前の子猫と強制契約を結ぶなんて思わないじゃない？

流石の俺もそこまで理不尽な行動はしないよ。嫌われそうだし。けど、兄上は俺の気持ちを知っちゃって、焦っちゃって墓穴を掘ってたっていうかね。リーエル兄上らしいよ。その辺りはさ。

強制契約から一ヶ月。

ティと名付けられた子猫と兄上は会えていない。

ん？

どうして俺が知ってるかって？

ふふ。

協力者は何処にでもいるんだよ。

どこにでも、ね。

「調子はどう？」

壁に背をつけ、俺はすぐ近くにいてであろう協力者に声をかける。俺も気配には敏いけど、彼に種族には遠く及ばない。

リーエル兄上が逃げられるのは、この辺りも関係しているんだろうと思う。

『調子はどうって……ティが外に出たがらないよ。どうしてくれるんだい?』

少し機嫌の悪そうな声。

それも当たり前か。兄上が結んだ契約は相当彼女の機嫌を損ねたみたいだし。彼女——ティちゃんの兄であるユウが怒らないわけがない。

彼は明らかに兄馬鹿だろうし。

『君に言っても仕方ないだろうけどね。わかってるけど、それでも言いたくなるんだよ』

「わかってるよ。成人の儀前の子猫と強制契約するのは犯罪だよ。

身内に犯罪者? 変態? 悲しいよね」

『君が弟なら、兄が焦るのもわからなくもないけど』

眼を細めながらジト目で俺を見ってくるユウに、俺は肩を竦めておく。ここでリーエル兄上の肩を持たれるわけにはいかないじゃない。そんな俺の思考なんてわかりきっているのか、ユウは猫の姿でわかりやすく溜息をついてみせる。器用だね。流石猫又。

「そうそう。この間の話し……考えてくれた?」

溜息をつきまくっているユウに、俺は早々と本題に入る。

『……ティを狙ってる変態っていうのが気になる』

「ふふ。既に成人前の子猫状態なのに手を出されちゃってるじゃない。成人しちゃえば俺も動くけど、それでもリーエル兄上の牽制にはなるよ?」

『……』

俺の言葉に、ユウは無言で項垂れた。

ユウのその心境もわからなくはないよ。リーエル兄上はユウにと

って見たらただの変態だけど、ティちゃんを狙ってるっていう点では俺も油断出来ない相手だろうし。

しょうがないじゃない。

一目惚れだったんだよ。

そんなわけで、リーエル兄上は考え付かない視点でのアプローチ。またの名をただの賄賂をユウに託してみる。

とりあえず今回は子猫ようのおもちゃ。魔力を注げば勝手に動くっていう猫にとっては垂涎のおもしろい。ちなみに、動かない時でも遊べるように、噛み心地のよい素材。

後は干した魚。ティちゃんだけじゃなく、兄弟全員分とお母さんの分まで用意した。

お母さんの分はお酒。

猫又は普通の猫じゃないから、食べ物の制限はない。

だから酒でも問題なし。

奮発したから気に入ってもらえるんじゃないかな。

『ティの好きなものがよくわかるね。それほど情報は与えてないはずだけど?』

けれど、ユウの眼は細く、探るようにこちらを見てくる。ちょっと警戒されちゃったかな。ここで種明かしをするのは勿体無いし。

とはいってもユウの機嫌を損ねるのは得策じゃないな。

にこり、と笑みを濃くし、俺は改めてユウを真正面から見つめる。ここからはちよつと真面目な話しをしておこう。

「女性に人気のあるものをお店で聞いたんだよ。それと…さ。ユウにお願いがあるんだけど」

俺の空気の違いを感じ取ったのか、ユウも背筋をピンと伸ばす。印象的な金色の眼がこちらをジィツと見つめてくる。

彼女と同じなのに、違う雰囲気を持つユウの金色の眼。

『お願い？　話してみてよ。内容によっては聞き入れるから』

穏やかなユウとは思えない挑発するような口調。

けど、ユウはこんなものだと思う。ユウが穏やかだとしたら、家族限定。家族以外は全て仮面だと思うね。

「聞き入れてもらえるとと思うけどね……じゃあ本題で。俺とさ、契約結ばない？」

今でも協力者。

ユウと俺の関係は変わらない。

『……今も協力関係だけだね。それだと足りない、って思うのはお互い様……か』

考えるような素振りを見せるユウだけど、きつと俺と同じ考え。その証拠に、ユウは何処か諦めたような。それでいて楽しげな表情を浮かべる。

生後二ヶ月の子猫が浮かべるような表情じゃないけどね。

『いいよ。契約を結ぼうか。可愛いとか愛くるしいとかで有名な猫又と兄弟揃って契約するなんて、実は可愛いもの好きって噂が立ちそうだけど煽ろうか？』

「俺も人の事言えないけど。ユウもいい性格してるよね」

『お互い様。ティの嫌がる事をしたあの王子様はブラックリスト所か抹殺リスト入りだよ？　殺されないだけ感謝しておいてよ』

「……うん。ユウがダーク。頼もしいけど」

成人の儀を終えたらソレは洒落にならないんだけどね。
リーエル兄上の事は殺す程嫌いじゃないけど…。

「これからよろしくね」

とりあえず成人の儀まではまだ余裕があるし。

それまでには何とかなりそうだから、まあ、いつか。

がちりと堅くユウと握手しながらそんな事を考えてた俺に、ユウが猫らしく鳴き、そして笑った。

あー…ばれてるっぽいけど、今はそれでいいって所、かな。

頼もしいけど、やっぱりユウが油断出来ない所はこの辺りもだよ
ね。

猫又と王子様・5（前書き）

ティとエイラの会話。
短いです。

猫又と王子様・5

「俺はエイラって言うんだ。よろしくね」

人好きのするような笑みを浮かべ、私に手を差し出してくれるのは第四王子様。あの変態王子の弟に位置するらしい。

『……』

警戒を強めたまま下から鋭い眼差しを向けていると、エイラと名乗った少年が苦笑いを浮かべる。少年っていう年齢でもないだろうけど。

「警戒されちゃってるよね。ごめんね。変態兄上があんな暴挙に出るとは思わなかったんだよね…」

『……』

そりゃ、生後二ヶ月の子猫に手を出すなんて思わないよね。まったくもって思わないよね。生後二ヶ月なんていったら子供もいい所でしょ。

あ、思い出したら寒気が。

ぞわりと毛を逆立てた私に、エイラが眉間に皺を寄せて何かよく分からないけど辛そうな表情を浮かべる。

やっぱり、身内に変態がいると辛いんだね。身内に変態は居なかったからわからないけど、きっと後ろ指を差されるようなものなん

だろうと思う。

少し沸いた同情心にどうしようかなと悩むんだけど、ユウがここに連れて来た時点で多少は安心していいのかもしれない。だってユウは、私にとってはお母さんの次に安心出来る存在だもの。

頼れるお兄ちゃんは、妹の不利になるような事は絶対にしない。それをわかっているから、私は少し肩の力を抜いてみた。

『変態は今更です。契約は取り消せません。でも、一緒にいる必要はないと思ってますよ』

せめてもの妥協案、かな。

契約を結んでも、人前に姿を現したくない獣は多々いるし。迷わずに言い切れば、エイラはやっぱ苦笑を浮かべてた。

兄弟という立場だと、やっぱり私とは見方が違うらしい。

「そうだね。繋がっているから、一緒に居る必要はないね。それは……」

『…ティです。知ってると思いますが』

私の方を見て言いよんだエイラ。名前を呼んでいいのか悩んでいそうだったから、とりあえず名乗ってみる。しかし、さっきから言葉が硬いね。

エイラの所為じゃないから、こんな感じの悪い態度は止めなきゃって思うんだけど。

「うん。ありがとう。それは、ティちゃんの思う通りでいいと思うよ。あくまで、獣たちが結んでくれてるんだもの」

迷わず言い切るエイラ。

：でも、ちゃん、か。生後三ヶ月だもんね。仕方ないよね。中身が
ん十年経ってる人なんて言えるわけがないし。

出そうになる溜息をグツと堪えて、私はエイラを見上げた。

『とりあえず、成人の儀を迎えるまで、私がエイラのお兄さんと会
う事はないよ』

少しでも試してみた。

そして何故成人の儀までって？

身を守る術を身につけるまで会うのが怖いからですよ。

別に生前もていたわけではないけど、あの第三王子の目はホン
トに怪しかったの。何ていうか付けねらう変態チックっていうか。
思い出すと震えがくるけど。

ブルリ、と思い出しただけで震えた私に、ユウが頭をすり寄せる。
それに応えながら、私は横目でエイラの反応を伺ってみる。

うん。至って普通。

「そうだね。俺もその方がいいと思うよ」

しかもあっさりと同意した。迷った素振りなんて見せずに頷き、
にこやかに笑いながら人差し指を一本だけ立ててみせる。

「成人の儀の後、ユウと契約を結ばせてもらうんだ。その時、家族
立会いの下で会ってみる？」

『……』

ユウも契約するんだ。

そんな疑問を込めてジッと見てみたら、苦笑しながら頷いたのが
わかった。うーん。甘やかされてる気がするのは何でだろう。

別に魔力を持った獣は沢山いるんだから、猫又から二匹も出す必要はないんだよね。しかも見た目はラブリーな黒猫。肩に乗つくと王族の威厳は急降下。寧ろ愛らしく親しみが湧いてくるという猫又族効果。

エイラは兎も角、あの第三王子は似合わないと思う…。
心底合わないと思う。

兄弟だから色彩もパーツも同じ様な感じだとは思っただけどね。
でも、やっぱり見た目って大事なんだなあ…。

アオノセイイキ・0（前書き）

突然書きなくなったテンプレ神様転生話し小ネタです。

主人公は相変わらず男前な千真 侑李。20歳。神様のミスで死んで、ゲームの世界へ転生。恋愛ゲームが嫌いなのに、リサーチ不足の神様の所為で恋愛ゲームの主人公になる破目に。

そんな主人公のプロログ（転生に至ったワケ）です。

転生前のプロログ話しの為0をつけました。

※逆ハー要素有り話しになると思います。

アオノセイイキ・0

【アオノセイイキ】という恋愛シュミレーションゲームがある。
クリスマスプレゼント交換で当たったが為に、やる破目に陥った
逆ハーゲームだ。

内容はありがちなもの。

分厚い眼鏡をかけた主人公。身長は159cm。体重は45kg。
色素の薄い瞳がコンプレックスで人見知り。けれど眼鏡をはずせば
美少女設定。なのに眼鏡の所為で気付かれない。

オドオドというかビクビクとしている為、一歩間違うといじめら
れキャラ。

デフォルト名が浅海^{アサミ} 香奈^{カナ}。

そんな主人公が、学園のイケメンと呼ばれる人種に熱烈片思いを
される所か、学園外のイケメンからも狙われる逆ハー好きには堪ら
ないゲーム。らしい。

なのに、何故か途中からファンタジー要素が混ざってくる。

おい。どっちだ？ これは恋愛か？ 戦いか？ チートか？ 神
子か？ 何か一本に絞れと何度画面に叫んだ事か。

この辺りはタイトルが関係して尚且つ、全てのEDをクリアする
と主人公のチートっぷりやらファンタジーな設定やらも堪能出来る
らしいけど、これを用意したであろう人の一押しキャラを調べてク
リアーするので精一杯だったよ。

はっきり言おう。

私もゲームはする。

する。が、恋愛に手をつけた事はない。せいぜいRPGをやって

たら主人公とヒロインがくつついたなあ、という程度の恋愛だ。

育成系も好きだが、恋愛物はない。

アクションもしたりするけど、性格上逆ハーとかなんとかっていう恋愛をやる気は起こらんっつーか……。あー。まだ、逆はするか。逆ハーじゃなくて、ハーレム。

友人から、お前は女失格だ！何て言われた事もあるが、私の性格上それも仕方ないだろう。

女の子を愛するのは好きだ。勿論目の保養で。

その気はまったくくない。寧ろそんな感情を向けられたら引く。マジで引く。

そんな私の容姿は、アオノセイイキの主人公浅海とは間逆なもの。身長は170cm程。逆ハーじゃなくてよくハーレムを作っていると男からは言われる男前キャラ……。らしい。

目立つのが好きなわけじゃない。が、女系家族の末っ子で男みたいな役割を押し付けられて育った所為か、そんな感じに育っただけ。自分の性格が後押しをしたんだと言われたら、否定出来る事は何一つないけど。

けど、一つだけ浅海に似てるとしたら色素の薄い瞳だろう。

浅海は金茶。私は水色。おばあちゃんの血筋で、隔世遺伝で私に出たらしい。だけど私の場合は、からかってくる野郎たちを片っ端からのしてたら、いつの間にか言ってくる奴は居なくなっただけかな。

何故二ヶ月も前にクリアーしたアオノセイイキというゲームについて真剣に考えているか。

その理由は至って簡単。

ある意味これも小説の世界じゃ定番なネタを目の前に、握り拳を作っているからさ。思わずふふふ、なんて乾いた笑いが口から飛び出しちゃうね。

ちなみに、目の前にいる子供は金髪。碧眼。背中には白い羽という一見コスプレ中に見える子供が宙に浮いている。

「ごめんなさい！ 僕の手違いで千真カズマ 侑李ユウリさんが予定よりも60年も早く死んでしまいました」

……60年って……今20歳だから、本当なら80まで生きれたはずなのか。

「本当なら孫やひ孫に囲まれて、家の布団の上で穏やかに亡くなるはずだったんですけどね。それなのに人を庇ってトラックに轢かれるなんて穏やかとは程遠い死に方なんですよね」

………すっごい引かかる言い方をする天使だな。

「そんな千真さんには神様特典で、ある世界に記憶を持った状態で転生してもらいます。勿論チート能力もつきますよ。そういうの皆さん好きですもんね！」

………神様なんだ。天使かと思ったっていやいや重要なのはそこじゃない。記憶なしでいいよ。色々面倒じゃん。

「大丈夫です。千真さんの好きなジャンルはリサーチ済みですよ」

………好きなジャンルって言うとRPG？ RPGって結構大変だよ。そんなジャンルに転生させる気かこの神は。

「涙有り冒険あり魔法有り。戦いもあったりなかったりするあのゲームですよ！」

……………すっげー嫌な予感がする。

「勿論主人公ですよ！」

「ちょっと待…」

「アオノセイイキの世界へ行ってらっしゃーい！ 今度は寿命を全うして下さいねー！！」

誰の所為だこの野郎ツツ！！！！

目の前に居たらぶん殴ってただけど、神の言葉が終わると同時に視界は暗転。

くっそ。今度会ったら必ずぶん殴る。絶対ぶん殴る。簀巻きにして海に沈めてやるぜこの野郎。

言葉遣いが荒いのは仕方ない。なんたって腹立ってるからこれぐらいは勘弁してくれ。

アオノセイイキ・1 (前書き)

義弟登場。

攻略対象 (二週目以降) の一人です。

アオノセイイキ・1

カーテンの合間から差し込む光に目を細めながら、私は右手で顔を隠しながら面倒そうに起き上がる。この身体は低血圧なのか、寝起きは脳が揺れるような感覚がして面倒だ。

自分の身体ならこんな事なんてないのに、というのは言葉にはせず、胸の奥で留めておく。言っても、誰にも理解されないからね。

私がこの身体に生れ落ちた、というより憑依したという感覚に近いけど、千真侑李が死んでからは二年程経った。

今の私は千真ではなく浅海という某ゲームの主人公の立場。

何とかフラグを回避しようと、ゲームの主人公の行動は全部避けた。元々性格がまったく違う。私が私のままでいけば、フラグは全てヘシ折れる。

逆ハー設定を活かせるような性格はしていないしね。

それでも、一応用心して聖和学園への受験は全力で避けようとした。チート能力を使わなくとも、私は大学生だ。高校を受験するのにチート能力なんていらないし、色々受験し放題高校は選べ放題だ。なのに、心配した過保護な両親からは聖和を進められた。

何だこれは。ルート補正か？

いつその事ワザと落ちてやろうと思ったけど、それは出来なかった。私を尊敬して慕ってくれている弟が、「一緒の学校に行こうな！」と爽やかに言ってくれちゃったからだ。一回目では単にサポート役だったが、実はこの弟主人公と血は繋がっていない。

再婚相手の連れ子だ。

多分……攻略相手。というか、とあるEDを見れば攻略できるらしい。

弟が攻略相手とか嫌過ぎる。

「よしっ。目が覚めた」

チリリ……と目覚ましが鳴るタイミングを見計らったかのように手を伸ばし、丸いポッチを人差し指で押す。目覚ましをオフにするまで何度でも鳴る目覚ましではなく、一回押せば明日まで鳴らないという目覚ましを選んだ甲斐があって面倒じゃなくて良い。

態々オフにするのが面倒で、目覚ましを買う時はこのタイプを選ぶんだけだね。そういえば買ったときは弟——つまり瞬夜に驚かれたっけ。

それまでは瞬夜に起こしてもらってたとか。ゲームをやってたという場面もあったけどね。軽く流してたよ。

そんなわけで、気は重いけど。寧ろ重過ぎるけど制服を手に取り替えてだす。聖和学園のいい所をあげるなら、制服の自由度が高いという事。

攻略キャラの服装に彩をつけたかったからなのか。私服を着てもいいし制服もある。色々なバリエーションがあったり私服との組み合わせも可能。割合制服を着る子が多いけどね。そんなわけで、迷わずダークグレーのズボンに手を伸ばす。

聖和の制服はブレザーだったりする。女の子は標準は色鮮やかなアクアラインのチェック柄のスカートとネイビーのブレザー。蝶型のスクールリボンも売っているが、好みでスカートも選べる。色も自由。ブラウスの指定も特になし。

どれだけ自由な学校なんだ。

対して男の標準はダークブルーの上下。チェック柄のズボンも選べるけど、私は迷わず無地のブルーではなくグレーを選んだ。別に

チェック柄はいらん。シャツもノーマル。ネクタイはエンジのストライプ。その前にお前は女だろうってつつこみがあるとは思うけど。別に女が男の制服を着てはいけないとい決め事はない。席は男女混合名前順らしいし。特に問題もないだろう。

「侑李っ」

丁度着替え終わったからいいものの、ノックもなしに勢いよく瞬夜が飛び込んできた。

ここでお気づきだろう。

何故、侑李と呼ばれているか？

それは簡単。視界が暗闇に包まれた直後、意地と根性と気合で名前の変更を要求したからだ。

せめて名前の改変を求むッッ、ってね。

アンタの手違いで60年も早く死んだんなら、それぐらいは優遇しろと叫んだよ。

仕方ないですね。

なんて声が聞こえて、起きたら私は浅海香奈じゃなく、浅海侑李になっていた。

助かったとはあんまり思わないけどね。

この世界に落ちるぐらいなら、RPGで良かったと思っちゃったしね。

「侑李侑李ユーリ！」

「何？」

「似合うな！ 俺も似合うか？」

「似合う似合う」

私とまったく同じ制服を着た瞬夜。年は同じ。何故か誕生日も同じという奇跡から、説明が面倒なので双子という設定で通しているけど、それに拍車をかけるような態度を瞬夜はとっているように思える。

ゲームだと朝起こすぐらいしか登場しなかったけど、こうやって懐いてくれるとやっぱ可愛い。

「じゃ、顔洗って飯食って行こうな！ 同じクラスだといいよな」

そりゃ無理でしょう。

家族で同じクラスってないね。

ゲームでも瞬夜は違うクラスって言う以前に、違う学校だったっけか。あ。この時点で結構フラグ潰してるかな。

潰すも何も、発生するフラグさえない方が安心して生活出来るんだけど。

さらりと私の手をとって階段を下りていく瞬夜。

……。

私はあの可愛い？という主人公じゃないんだけど。それなのに、瞬夜のこのワンコのような懐きっぷり。二週目からはこうだったのか。ルートに入ればこうなったのか。

いま少しだけ後悔してる事と言えば…。

こんな事態に陥るなら、蕁麻疹が出そうだけど我慢して全ルート

をクリアーしとけば良かった。

「楽しみだよなー」

「そうだね」

「侑李は俺が守るから安心しろよ！」

うーん。高校生にもなって姉にベツタリつてのもな。
可愛い彼女を連れてきてくれた方が嬉しいのに。

「特に危険もないと思うよ」

このままだとフラグが立つとも思えないし。

「それより、折角高校生になったんだし。瞬夜も彼女を作りなね」

弟の彼女も楽しみだね。

「あー……結構言われるんだけど、別にいいよ。恋は落ちるもんだ
って言うだろ。落ちるのを待つ間は侑李を守ってやるよ」

「はいはい。落ちたら教えてね」

そして可愛い彼女を紹介してくれ。
って…その前に。

「ネクタイが曲がってる。これも慣れないとな」

腕を伸ばし、手早く瞬夜のネクタイを直す。よし。真っ直ぐになった。ついでによれていたシャツの襟を指先で軽く直す。最後に、手間賃とばかりに人差し指瞬夜の柔らかい頬を突く。相変わらずいい感触。

「く……子供扱いして」

「子供だよ。ネクタイも上手く結べないし。さて、それよりも下に行こうよ。お腹すいた」

軽くお腹をさすりながら、瞬夜を置いて階段を先に下りていく。やっぱ初日は時間に余裕を持ちたいし。

それにお母さんが料理上手でね。ご飯食べるのが楽しみなんだよね。

「……侑李だって…子供だろ。俺より細いじゃん。何処も…かしこも…」

残された瞬夜が小さく、音になるかならないかのギリギリの声で呟く。が、勿論先に下に下りていった私に聞こえるはずもない。

アオノセイイキ・瞬夜視点・あの時きつと落ちたんだ（前書き）

瞬夜視点。

天使（神）がある意味怖いです。

主人公に惚れたわけです。

そしてある意味ネタバレ……。主人公が知る事のない裏側です。

アオノセイイキ・瞬夜視点・あの時きつと落ちたんだ

俺には姉が一人居る。

同じ日に生まれ、同じ年の姉が一人。

これだけ聞けば、大体の人間は双子だって勝手に解釈してくれる。でもその実態はただの義理の姉。

小さい頃に親が再婚。

お互い連れ子で、同じ年だから姉弟みたいに過ごしてね。母親がそう言うから、俺は姉に話しかけた。

何ていうか第一印象は冴えない子供。

話を聞いているのか聞いていないのか。

オドオドとして人見知りが激しくて。

子供心に、母親に笑って欲しいって思って「お姉ちゃん」、なんて言って世話を焼いてた。

同じ年のはずなのに。

いつも何処かぼんやりとしてた。

同じ年なのに。

俺にも遠慮してた。母さんにも。

十年経っても、俺たちと姉の距離は縮まらない。

苦手なのばれてるか。

そういうのは敏そう。

ああ、でも。

そろそろ問題ないか。

後二年も経てば高校生。顔だけは可愛い姉だから、きっと彼氏ぐらいは出来るだろう。そうすれば性格だって今より外交的になるかもしれない。

俺も姉が嫌いっていうより、言いたい事があっても言わない。俺が何かやるのを待ってる。そんな受身な所が苦手なんだよな。性格上仕方ないんだろうけど。

彼氏が出来て外交的になれば、この関係も少しは緩和するかもしれない。それに期待しよう。父さんは娘に彼氏は早いって言ってるけど、俺としては早く作って欲しいね。

「おかえり、瞬夜」

「……は？」

「どうかした？」

「どうかしたって…」

部活が長引いて、帰るのが少し遅くなった日。満面の笑みで姉：だよな。が、出迎えてくれた。顔を覆い隠すんじゃないかと思っていた前髪はぼつさりと切られ、目元に触れるかどうかの長さ。

眼鏡はレンズが薄くなったのか、瞳の色がしっかりと確認出来る。体型を覆い隠すようなぼさとした服装もスッキリとしてて、最近のものに変わってる。いや、持ってた服は最近のなんだけど、着こなしがイマイチだったんだよな。

「まるで別人：」

にしか見えない姉——侑李が、俺の目の前に立っていた。

「あはは。ここ一ヶ月、学校に行く以外じゃ部屋に閉じこもってたでしょ？ その間ずっと考えてたんだ。このままでいいのかなー、とか。何ていうか色々？」

「…引き籠もりだったよな」

「そうそう引き籠もり脱出でちよつとサッパリしようと思ってね。とりあえず第一歩で見た目を変えてみたよ」

「……」

見た目だけじゃないだろ変わったの。

今朝の姉と、今の姉が別人だって言われた方が納得がいく変化。ここまで人間って変われるのかっていう疑問はあるけど、この一ヶ月姉と喋ってない俺に明確は違いはわからない。

それ以前に、この十年間そんなに会話らしい会話はしなかったし。姉の個性はビクビクしてる。ぐらいにしか思ってたなかった。

「そうそう。今日の夕食はお手伝いをしてみたんだよ。瞬夜も荷物置いてリビングにおいで」

にこり、と笑ってリビングに戻る姉。

だからそれからして何ていうか違和感しかないっつーか。

首を傾げながら荷物を置いてリビングにいけば、久しぶりの娘とのコミュニケーションを喜ぶ父と、初めての触れ合いを喜ぶ母が居たりして。

「（…違和感ないのか？ 俺だけか？？）」

当たり前のように姉を受け入れている両親に、何故か背筋が寒くなった。

何だろう。

どうしてだろう。

学校でも違和感なく受け入れられる姉を見て、何故か俺の中の疑問だけが高まる。

別に姉が好きなのでもなかった。

それ所か、今の姉の方が好感が持てる。

性格だって好きだ。一緒に居て楽しいし、コロコロと変わる表情だって可愛いと思う。

それなのに、何故かその疑問が消えることはなかった。

「困りますね。記憶の処理に従ってもらわないと」

「――ッ!？」

部屋で姉の事を考えていた俺の前に現れた子供が、困ったように
呟く。金髪の、背中に羽の生えた子供。

「記憶の処理って……姉は……姉……香奈は何処に行ったんだよ！
？」

そうだ。俺の姉の名前は香奈だ。侑李じゃない。

「香奈さんは本来の世界に帰ってもらいましたよ。ここは侑李さん
を迎える為の世界だったはずなのに、いつの間にか香奈さんが迷い
込んで14年もここで暮らしちゃったんですよねー。」

だから侑李さんが赤ん坊からこの世界に降りれなくなっちゃった
んですよ？ 生まれ変わる事を約束したのに」

「…何言ってるんだよ？」

目の前の子供の言ってる事が理解できなくて、俺は震える声で言

葉を吐き出す。

「何って……そういう君は心当たりがあるんじゃないですか？　だって、香奈さんの事嫌いだったでしょ？　本来君は、香奈さんがすっごく好きだったはずなんですけどね。世界の違う香奈さんが来ちゃったから、歯車が狂っちゃったんですよ」

「……」

「香奈さんは本来の時空に戻りました。あの香奈さんにとって本当の瞬夜君と仲良くやってますよ？　香奈さんが迷子になっていた所為で、本来居る筈の香奈さんの肉体が虚ろの状態で過ごしてましたからね。魂も無事戻って大団円なんですよ」

「意味わかんねえ」

「侑李さんが死んだら、また別の世界に案内しなきゃいけないんですよね。中途半端に生を受けちゃいましたから。ま、今それは関係ないですね」

「アンタ怖いよ……俺に何が言いたいのかまったくわかんねえ」

「記憶の処置に大人しく従って下さい。ただそれだけですよ？」

白い羽が空気を巻き起こし、突然頭痛に襲われた俺はその場に倒れこんだ。

痛い。

何だこれ。

頭が、割れるように痛いッ。

誰か。

誰か助けてッッ。

縫う様な思いで、俺は手を伸ばした。痛くて痛くてどうしていいか解からない。

「瞬夜っ」

どうしようもなくもがく俺の名を呼ぶ声が聞こえて、視界が一気に開ける。伸ばしていた腕は両手で包まれ、心配そうに俺を覗き込む姉——侑李の姿があった。

「……ゆーり…」

「大丈夫だから。落ち着いて」

「……俺、夢見てた」

「そっか」

「怖い天使の出てくる夢…」

「そっか……それは、最悪な夢だね」

侑李が、泣きたい様な表情をしたのが、わかった。きっと本人は表情に出さなかったつもりだろうけど、わかってしまった。

「手を繋いでるから、安心して眠りな。眠って全部忘れちゃいな」

優しく、ゆっくりと頭を撫でられた。それと同時に突然襲ってきた睡魔。きっと、あの天使と会ったのが身体に負担を強いたんだ。それが分かっているのに俺は睡魔を抑えることが出来ず、安心を求めるように侑李の身体を引き寄せて眠りに落ちていった。

この時見た夢で、姉の香奈が俺と一緒に居て笑ってた。多分、現実。本来の場所に戻った姉は漸く安らげたらしく、俺たちに見せた事のない表情を沢山浮かべてた。

俺は好きにはなれなかったけど、良かったとは思うよ。

「…大団円……か」

天使の言葉を信じるわけじゃないけど。
香奈にとっては大団円なんだろうな。

目を覚ますと、腕の中には侑李がいた。俺が眠る直前に引き寄せ

た細い身体。侑李は俺の背に腕を回して、抱きしめられているのにも関わらず、怯えた俺を抱きしめるようにして眠ったらしい。

「侑李…」

俺の腕の中で穏やかに眠っている侑李。さっきみたいに辛そうな表情じゃない。良かったと思いつつも、俺は侑李の温もりを堪能するように腕に力を込めてみる。

どうしようもなかった時。

俺を呼んでくれて、引っ張り上げてくれた。

苦しい時に助けてくれた刷り込み？

分からない。

分からないけど、きっと俺は侑李を手放せない。

落ちた、といえば俺はこの時、侑李に落ちたんだと思う。

侑李はきっと気付かないだろうけど…。

伝説という名を背負い投げする魔・女・0（前書き）

相変わらずな男前な女性が主人公。今回はファンタジー＋恋愛な小ネタ。

年齢はお互い数千歳とかそういうレベル。

外見年齢はルックは20才。白髪銀眼。

アーテルは20代後半。黒髪金眼。

外見、色等の描写は無し。

魔女ルックスルーナエ。

魔王アーテル。

そんな二人の旅模様の序章。

多分、魔王は魔女が大好き。寧ろ愛してる？

伝説という名を背負い投げする魔・女・0

今から遠くない過去に、最強の名を頂く魔女が在った。
形無き魔力は無尽蔵。
尽きる事のない魔力を代償に、様々なものを生み出す。

2000年程蘇った魔王も呆気ないほど。寧ろ可哀想になるぐらいにあっさりと瞬殺され昇天した。今では魔女の下僕に下ったという話したが、真相は定かではない。

だが、それ以降魔族が人界で悪事を働く事は激減したし、魔王は復活していないのだろうという話で落ち着いた。

そしてその伝説の魔女の生死も……。

不明。

伝説の魔女に関する事も今ではあやふやな情報しかなく、その存在が実在したのかどうかすら、今となっては口伝で語り継がれる程度のものである。

ただ、一目その姿を視界に収めたものは魔女の虜になってしまう。という別の意味でも伝説と名高い美女だという噂——である。

「くしゅ」

競り上がってきたものが口から音として飛び出した後、突然襲ってきた悪寒に首を傾げた。今日の陽気はそれ程寒いというものではない。

風邪をひくような鍛え方もしていないし、それ以前に薄着とは程遠いような格好だ。

被ってはいないものの、フード付きの外套の生地は特殊仕様。温暖寒冷関係無しに常温を保つという優れもの。

「風邪か？ 貴様がひくはずないか」

「少しは心配しなよ。まあ、アンタに心配されたら悪化するけど」

「貴様を心配する程俺は落ちぶれてない」

頭一つ分程違う男たちが睨み合うが、すぐさまその視線は逸らされ、二人同じにとてつもない寒気が襲ってきたとばかりに自身の身体を擦りだす。

「真似しないでよ」

「それはこちらの台詞だ」

今度は睨み合う事なく、背の低い方の男がもう一人の男に背を向け、さっさと歩き出した。これ以上は一緒に居たくないとはかりに。「待て。俺も貴様などと共に在りたくはないが、なければいけない理由があるだろう」

「知らないよ。俺には関係ないし」

「元を質せば貴様の落ち度だ」

「殺されなかっただけありがたいと思え。も・と・ま・お・う・さま」

「ハッ。今も魔王だ。そこまで耄碌したのか。伝説と名高い美女という噂が蔓延っている男女が」
オトコオンナ

「……」

足を止め、後を振り向くと魔王——と呼んだ男を睨み付けた。その眼差しは強烈で、それだけで心臓の弱い者は死んでしまいうような程強いもの。

「……止めた。アンタを殺せば俺の力が失われる。作り出すのに千年程かかるのは流石にメンド」

「相変わらず化け物か……限りなく本音だが冗談だ。俺でも千年じや作りだせん」

肩を竦める魔王から面倒そうに視線を外すと、見渡す限り緑一杯の視界にうんざりとしたように目を細めた。

緑は嫌いじゃないが、こういう生活を5年程続ければ見飽きてし

まう。そろそろ街の明かりが恋しいと口に出してみれば、魔王から額を小突かれそうになった。

ちなみに、軽くではない。

大岩を粉碎出来るようなデコピンを紙一重で避けると、それに合わせて右拳を交差させるように繰り出す。が、魔王の障壁によってあっさりと阻まれた。

「チッ。障壁か」

「舌打ちをするな。一応女だろう男女」

「頭の悪い元魔王だな」

「貴様にだけは言われたくない」

「……ハア。何度目の会話だろうな。まあいいや。俺の名は……ルックっていう立派なものがあるんだけどな。何時になったら覚えてくれるのかな元魔王様」

「随分と省略されてるがな。そして現魔王だ」

「はいはい」

魔王の言葉にルックは肩を竦めた後。

「分かってるよ。アーテル様？」

「……」

ルックの言葉に、魔王――アーテルは闇色の瞳に物騒な輝きを宿しながら、ルックを見下ろした。

「貴様は本当に殺したくなる性格をしているな」

「殺せないくせに」

フフ、と笑いを漏らすルック目掛けて、アーテルの魔力が襲い掛かるが寸前で止まる。それを分かっていたかのように避けようとしないうルックに、アーテルの機嫌は尚更降下するが、そんなものは知った事じゃないとばかりにルックはアーテルを置いて歩き出す。

今度は歩みを止める事無く、その距離は段々と離れていく。遠ざかるルックの後姿を視界に収めながら、アーテルは息を吐く。

「ああ。殺せないさ。俺に……殺せるわけが無い」

体中の空気を入れ替えるように吐き出した息とともに、何とも言い難い感情を秘めた音も吐き出した。

その間もルックの背は離れ、今となってはその姿を捉える事さえ難しい。が、二人は離れられない。

ルックとアーテルの間に生まれた、呪いに等しい絆によって……離れる事は出来ない。

迷いの森の住人と（前書き）

魔力を持った少女？と騎士の話し。
騎士要素はまったくないただの出会い話しです。

迷いの森の住人と

迷いの森。

本来ならば立ち入り禁止区域になってもおかしくはない、一度足を踏み入れたら恐ろしい結末が待っていると言われる魔の森。

だが、この迷いの森は立ち入り禁止区域ではないし、森の住人に認められればここにしか生えないという貴重な薬草を持って帰れたりもする。

あくまでも認められれば、の話しだが。

立ち入り許可を国に申請する必要はないし、管理者扱いされている学園に提出する必要もない。

ある意味無法地帯。

縁がなければ一生足を踏み入れたくは無い場所なのだが、黒銀の甲冑に身を包んだ騎士が森の前に立ち、深々と溜息を吐き出した。

ここは国に認められた騎士ですら尻込みしてしまう、禍々しい力を放つ魔の森。

「……行く、しかないのか。ないんだろうな。寧ろ行け。迷わずに足を踏み入れろ」

自分自身に言い聞かせるように、騎士は何度も何度も同じ言葉を繰り返す。同僚の騎士ににこやかに、迷わず逝ってきていいよ。と語尾を弾ませ見送られた事を思い出すと気が滅入るが、それは帰ってからぶん殴ればいいだろう。

「弱気は禁物。俺には、目的がある。だから行くしかないんだ」

森の住人の気さえ向けば、本人が死んでも薬草だけは届けてくれたりもする。魔の森と名高い迷いの森なのに、人を癒す薬草の効能はこの森の物が一番高い。

例え医者から見離された者であろうとも、ここの薬草のおかげで九死に一生を得た者は少なからず存在している。

「よしっ、行くぞッッ」

気合は十分。

その勢いのままに右足を持ち上げ、境界線を一気に突き抜ける。

森と、外の境界線。

別に線が引かれているわけじゃない。それなのに、空気がまったく違うのだ。生えている植物もまったく違うものだが、入り口に生えている植物は外の物と違いは無い。

身体全部を森の中に入れ、辺りを見回しながらゴクリ、と喉を鳴らす。魔物退治なんて日常茶飯事な騎士なのに、ここにいるだけで何とも言い難い不安が押し寄せてくる。

それと同時に、自分が死ぬイメージだけがリアルに感じられるのだ。

「……くそ。これも迷いの森の警告か」

ドクンドクンと心臓が嫌な音をたてる。

額から溢れ出す汗は止まる事無く、重力に従い下へと落ちていく。

ポタン。

ポタン、と汗の流れる音と自身の呼吸の音だけが響く。

鳥の鳴き声さえしない。

こんなに、木々が生い茂っているというのに。

「……………帰ったら、アイツをぶん殴る。絶対にぶん殴る。逝ってこないなんて爽やかに言いやがったあの野郎を絶対にぶん殴る」

そうだ。その為にも帰らなければ。

目的がすり替わったような気もするが、これも生きて帰る為の気合だと思えば間違いでもないだろう。

「アイツって誰ですかねえ？」

「アイツって言えばアイツだよ。爽やかに人に仕事を押し付けるデイーガロウに決まってるだろ」

「へえ。デイーガロウさんという人をねえ。どんな人なんです？」

「どんな人って……有能は有能なんだけどな。サドっつーか人の嫌がる事が好きっつーか笑顔で傷口に塩とカラシを練りこむっつーかなあ」

「それは凄いですねえ」

「ああ。あん時は阿鼻叫喚っていうかっておい……お前誰だ!？」

ある意味騎士失格の失態なのだが、そんな事さえ全て吹っ飛んでしまう。当たり前のように会話に参加していた、小柄な少年に見えるような少女。

街中で会えば警戒なんてしようのない一般市民。

だが、会った場所が悪かった。

魔の森と名高い迷いの森。街中を歩くような軽装で騎士の隣を歩く少女が、まともなわけがない。騎士は大きく後ろに下がり距離をあけると、腰に差してある剣の柄に手を掛ける。抜くのに瞬き程の時間もない。

左手首のブレスレットを、右手首のブレスレットに擦り合わせるように触れる。詠唱を必要とせず、防御を発動出来る護符。高位の魔の物の一撃でも耐えられる代物。

「嫌だなあ。善良な一般市民ですよー」

「…魔の森を歩く善良な一般市民がいるかつ」

「ここに居ますって。散歩コースなんですよねえ。ここ」

「……………は？」

思わず間の抜けた声をあげてしまうが、それも仕方ないだろう。一度足を踏み入れたら無事に抜け出せるか分からない魔の森を、まさか散歩コースと言い切る人間が存在しているとは思わなかった。

「やはり魔の物…」

「じゃないですよー。騎士様は薬草探しですか？」

「……」

「もしよければ案内しますよ。大体把握してるんで」

「……嘘だろ」

誰もが把握出来ない迷いの森。

自分は夢を見ているのか。それとも魔の物に化かされているのか。ここまで知能があるなら魔の者になるのだが、騎士は言われた内容をつっぱねる事が出来ずにその場で動きを止めた。

化かされているのか。

惑わされているのか。

それでも…。

「不死の病と言われる硬化病に効く薬草だ……あるか？」

「おんや。やけにあっさりと開き直りましたねえ？」

くす、と少女が笑い声を漏らした。まるで観察されているような居心地の悪さに身を振りたいくなるが、それ以上に逸らしてはいけないという生死の境を幾度となく越えてきた騎士としての感がそれを阻む。

「当たり前だ。俺は覚悟をしてここに入った。目の前に手がかりがあるなら掴むだけだッ」

騎士の手は、既に剣の柄から離れたただ握り締められているだけだった。それを確認しながら、少女はコクリ、と首を縦に振る。

「そういう潔さは好感が持てますよねえ。じゃ、足元の白い花の薬草を摘んで帰りましょうかー」

「……は？」

騎士の足元にこれでもかというぐらい生えている白い花。どちらかというところ踏み潰されているかもしれない。

「…初めから生えてたか？」

騎士を囲むように生えている白い花。

まるで、たった今生えたかのように騎士を包み込む。

「生えてましたよー。見えてなかったんですねー」

「……」

「騎士様騎士様」

「…なんだ？」

「早く摘まないと、見えなくなっちゃいますよー」

「ッ!？」

少女が嘘を言っているようには思えず、かといって乱暴に抜く事は躊躇われ、一つずつ丁寧に抜いて麻の袋へと入れていく。

抜いた本数が十に達しようとした時、あれだけ咲き誇っていた白い花が視界から消えていく。

「…化かされているみたいだ」

「そういう森ですよねえ。じゃ、帰りましょうか騎士様」

「……」

少女に手を引かれ、拒む事も出来ずにそのまま連れて行かれる。
少女に会うまでも相当歩いたのだが、何故か手を繋がれて引っ張られて歩いていたら、あっさりと出口の光が見えてきた。

「お前に化かされているんじゃないか？」

「嫌だなぁ。森の特性ですよー」

「お前は何者だ…？」

繋がれた手は暖かくて、魔の物とも魔の者とも思えない。

「さぁ、出口ですよ騎士様」

言葉と同時に開かれた視界。

暖かな陽の光。

締め付けてくるような恐怖から開放され、漸く呼吸が出来たような気がした。が、太陽の光を感じた瞬間に離れた温もり。

「それは綺麗な水で煎じて下さいねえ。でないと効能は半減しちゃいますから」

淡々と、さも当然のように薬草についての注意の言葉を口にする少女に、先ほど流されたばかりの質問をもう一度するのか。
それを迷っていると、少女が笑った。

「騎士様は素直ですねえ。それ、大事にした方がいいですよー。ではでは、私は授業が始まってしまいますので」

「……は？」

「それでは騎士様さようなら。欲張って、森に入っちゃ駄目ですからねー」

「授業って…」

ここには、魔の森の管理者とされている学園がある。

魔の森と呼ばれる迷いの森の隣りに塀に囲まれた広大な土地があり、魔力を持った者だけが通う事が出来る特殊な学園。

「魔力持ちかっ!？」

魔力持ちは、希少だ。

魔具でそれなりに使えるが、自身の魔力で魔道を発動させらえる者はこの世界では極端に少ない。

「そうとも言いますよねえ。そうそう騎士様。それ、早く大量の綺麗な水に浸けないと効能が落ちちゃいますよ?」

「……おい。お前ワザとじゃ…いや、大量の水っていうのはどれぐらいだ?」

「ふふ。それだと50リットルぐらい、ですかねえ。浴槽に澄んだ水を張れば大丈夫ですよ。浸けた水は小瓶にでも入れて騎士団にで

も差し入れれば喜ばれるかもしれませんね」

「わかった。礼は改めて。世話になったな」

真っ直ぐに勢いよく頭を下げた後、騎士が腰帯に付いている宝石と左手首のブレスレットを擦り合わせた。

バチリ、と青い光が舞ったかと思うと、足元に現れた転送陣によって騎士の姿が段々と消えていく。

騎士を見送り、少女は困ったように表情を微かに歪める。

「礼なんて要らないんですけどねえ。なんたって…」

対応を失敗すれば死んでましたしねえ。

単に、騎士が対応を間違えなかったただけの話し。

「さあて、と。退屈な退屈な授業に行きましょうか」

ちよつとした暇つぶしにはなったかなと、その程度の事。少女はそれを最後に、騎士の事を思い出す事はなかった。

騎士が再び、礼を言い少女を訪ねるまでの間——…だったが。

実際我が身に降りかかる定番のネタは憎たらしい（前書き）

イケメンハーレム体質の幼馴染をもつ地味な女の子の召喚巻き込まれ時の回想。

女の子が語ってるだけです。

実際我が身に降りかかる定番のネタは憎たらしい

今から五年前の私は、花も恥らうようなセーラー服が似合う女の子だった。

そこ。誇大表現だと言わない！

気分的にはまだまだまだ、十分すぎる程初々しくジューシーな果実だったんだから。何か表現がおかしいって？

おかしくなーいよー。だって今だってセーラー服似合うものー。なんたって、日本人は童顔だからね。五年前は十代前半の私でも、五年経てば十代後半。もうじき二十だよ。お酒も飲めちゃう年だよ。ここだと、12歳の時から飲めるらしいけどやっぱり、私にとつての成人は20歳だね。何たって日本人ですから。

身長が155cmしかない所為で、未だに成人前に勘違いされたりもするけど断言しよう。この連中が高すぎるだけだと。

さっきから表現がおかしいって？

12歳からお酒が飲めるなんて聞いた事が無い？ 外国にでも行ったの？ って？？

.....。

ある意味外国だよねー。

性質悪いけど。

そうそう。

よく小説ネタになってる異世界トリップって知ってる？

そりゃ知ってるってそうだね。文字読む人間なら大体は知って

るよね。定番中の定番だよね。

じゃ、幼馴染がイケメンでモテモテで自然ハーレム作っちゃうっていうのは？

ああ定番だねって。私もそう思うよ。

それじゃーイケメとは対照的に、幼馴染は冴えない男、もしくは女っていうのは？

やはり定番ですか。

まあ、近所なんて偶々帰りが一緒になっちゃって、イケメンハーレムが勇者召喚の儀式か何かで呼び出されちゃって。

おまけとばかりに召喚に巻き込まれた幼馴染はお払い箱。門前払っていうか、ポイ捨て？

なんだこの汚いのは！って怒られてね。

え？ 何？？ 地球に帰してくださいよ。っていう当たり前の言

葉は右から左へと軽く流される。

脳みそに皺がないんですかー？

その頭は飾りですかー？

必死の叫びも虚しく城門の外へと捨てられて。その間、勇者として召喚された幼馴染はもてはやされ、こっちの事は眼中外。

元々眼中にも入ってなかったみたいだけど。

せめて少しは視界に入れろよ。と文句を言ってみた所で、召喚先の姫様から強烈アプローチを受けているイケメンハーレム体質な幼馴染は気付かない。

ゴージャスなお姫様も、地味な幼馴染が素敵な勇者様にくつつくのが気に入らなくて、態と幼馴染を別室に連れちゃっていたりね。もう少し恥じらい持とうよ。姫様っていう人種に夢を見させてよ。見させてくれないけど。

そんなわけで、城門の外へと放り出された通行人Aの役割さえ与えられなかった地味な幼馴染。

ん？ もう一つの定番？？

実は、そのイケメンハーレム体質の幼馴染が、地味な幼馴染激ラブ？

……色々と夢見すぎだと思うよー。

清楚で可憐な正統派美女もハーレムの一人になっちゃうような、イケメンでハーレム体質な幼馴染だよ？

それが、十把一絡げな幼馴染に恋をすることも？？

ちなみに、地味な幼馴染代表としては…。

何？ 代表にいつなったと？

自分の中じゃ自分が代表ですよ。口に出さないけど。

そして同じ年の幼馴染がその地味な子一人っただけで、近所にはお綺麗なAランクやSランクのお姉様方や、将来有望な光源氏計画を持ち出されそうな可愛らしい美少女なんかがいるわけですよ。

分類的に、それも幼馴染だね。同じ年じゃないっただけで。

その後小説なんかだと、親切な人に助けられて言葉も教えてもらって魔法も教えてもらって、ある意味チート生活突入ってな展開になったりもするわけですが…。

そんな上手い話があるわけない。

城で誰一人として見向きされなかった地味な子が、城の外に出たからって人目を惹くわけがない。

やけに怒りが籠ってる？？

ふふふふふふ…。

五年前の実話ですよ。じ・つ・わ。

定番なイケメンハーレム体質の幼馴染の召喚に巻き込まれ、ポイ捨てされた地味な女の子通行人Aにすらなれなかった人間は私ですよ。

あの時……腹がたって腹がたって腹がたち過ぎて。

魔族に喧嘩を売らなかつたら死んでたね。

ん？

普通は死ぬって？

魔族なんてファンタジー定番な種に喧嘩を売ったら??

お前もチート仕様だろうって…。

いやいや。地球仕込の空手程度じゃ、この世界じゃ瞬殺ですよ。

いつか幼馴染の頭をかち割ってや……なんでもないですよー。そんな物騒な事考えてないですよー、というわけで、せめて腕っ節だけでも強くなろうと無駄な努力をした空手だけど、ここだと魔族の吐息にすら劣る威力だったわけだね。

まあ…魔族に突っかかる人間なんていなかったから逆に珍しかったらしく。

そりゃあんなに強いって分かってたら、私だって喧嘩なんて売りません。あれは無知だったから出来ちゃった怖い出来事ですよ。

魔族に拾われて。

死んだ魔族から取り出した魔力の坩堝に放り込まれ。

五年前に人間やめさせられちゃった。

という悪運の強さで何とか命だけは助かった、元人間なわけですよ。

ふう。

この五年間は色々あったなあ。

「ん？ 何ですか？ 今回想に忙しいんですけどー。は？ 勇者Cが来たって？？ 知らないよそんな事。勝手に遊んどけばいいんじゃないですかー」

というか、これで三人目の勇者だよね。

あの城も何人召喚してるのか。

至って普通の勇者だったけど。

あ、そうそう。

五年前は幼馴染だったイケメンハーレム体質の勇者だけだね。

何か王様になるらしいよ。

勇者活動はどうしたってつつこみたいけど、どうせ危険な事はやらせたがらなかったんでしょ。周りが。

既に後宮があつて、美女や美少女が数百人いるとか。
誇大表現か事実か。

もしホントだったら図鑑でも作ったら売れますかねー。

人間の通貨欲しいんだよね。

ちよつと考えてみようかな。

魔界の二柱（前書き）

地球↓魔界（女王）への転生。

基本気苦労。魔王の浪費癖に頭を悩ませている元赤字工場の事務員。

魔界の二柱

感情のまま、先ほど渡されたばかりの書類を床へと叩き付けた。

「今度こそ簀巻きにしてやる…」

ああ。今度こそ。今度こそは有限実行だとも。

ギリギリと奥歯をこれでもかと噛み締めていたら、側近の魔族が私から距離をおく。

……その気持ち、わからなくもない。

今の私は魔界の女王という称号を得ている、元日本人。所謂転生者という存在だ。それ故に魔族の常識なんていうものには未だに疎いけど、女王と王が怖いのは知っている。

なんたって、私が暴れば王しか対処が出来ない。神界から神王や神女王を引っ張ってくるわけにもいかないだろうし。

対の存在だから力も拮抗しているが、魔界と神界の境界線は許可無く踏み越えていいものじゃない。無秩序に見えて魔界にも秩序と
いうものが存在しているのだ。

それを、率先して破るのが魔王だとしても、ね。

「女王様。落ち着かれた方がいいのでは？ 折角の綺麗なお姿が残念な事になってしまいますよ？」

「残念なのはアンタの台詞だ」

「おやおや」

私の言葉に、側近であるアスターニエは肩を竦めてみせる。

客観的に見れば、アスターニエはかなりの美形だ。美形や美人が珍しくない魔族の中においても、上位クラスの美形さんだ。

ダークブラウンの髪は割合短く切られているが、左耳の上の辺りの一房だけ伸ばし、下へと垂らしている。白色の紐で巻いているから広がったりせずに、ストーン、と下に垂れているんだけど、黒い寶石が一定間隔で紐についていてね。アスターニエが動くたびにキラリと煌いて何の効果だと常々つつこみたくなる。

つつこみたくはなるが、外面だけは文句なしの美形だ、と思う。が、口を開けばこれ。

諷められているのかからかわれているのかよく分からない。

外見年齢は25歳ほどの500歳だ。けど、魔族は外見年齢で判断すればいいらしい。ちなみに、私の外見年齢は20歳程。

中身は恐らく50歳近く。記憶があるから精神年齢だけならアスターニエより上のはずんだけど、最近では私も外見に引っ張られているかもしれないと思い始めてる。

「何をお考えですか？」

遠巻きに見ていたはずなのに、私が魔力を放出する気がないと判断したんだろうアスターニエは、私の顎を人差し指でクイツと上に上げる。

「……それはいい」

残念ながら、美形だとは思うがアスターニエの外見にきゃーと叫ぶような性格をしていない私は、キスをするような体勢を取られただけで鳥肌がたつ。

おやおや、と再び肩を竦めるけど、それはこちらの台詞だと声を

大にして叫びたい。アンタの距離感がイマイチ掴めない。

「で、本題はいいんですか？」

「……アンタが言うな」

なんだこの超絶マイペース魔族は。

が、折角戻った本題から離れるのも勿体無い。私は叩き付けた書類を拾い上げると、添削するかのように文字の上から赤いペンで書き始める。

こんな事に予算が取れるか。

アンタの私物を売って購入しろ。

魔王への、返事である。

魔界の二柱の片割れの魔王は、はっきり言って金遣いが荒い。事務仕事をやっていた——赤字工場——私としては、許せない程の道楽振りなのである。

資源を生み出す事の出来ない魔王なのに、こんなものいらないだろう的なただ目に付いたから買っちゃいました的な品々。片っ端から売って売って売りまくって、赤字財政の足しにしましたとも。

魔王の性質の悪い所は、資金が尽きると人界に攻め入る所だと思う。この世界に女王として転生した後になんかそれを知った私は、とりあえず魔王を殴る事が最初の仕事だったね。未だに殴り合いの喧嘩するけど。

「そんな事を書いてしまっても大丈夫ですか？」

アスターニエが内容を確認しつつ、私に向かって心配そうに眉を

吊り下げて聞いてくるけど、単に面倒なだけだろう。

私と魔王が喧嘩を始めると、側近たちの仕事が増える。

元々魔王の側近は魔王に変わって仕事をしていたらしいけど、こちら側は私が真面目に仕事をしているから、今更女王の仕事を押し付けられるのは嫌らしい。

私に慣れないほうがいいんじゃないかと助言したいけど、どうやら私の方が長く生きるみたいだから現在の側近たちに態々言う必要はないね。

人差し指で手紙を弾きながら、私はアスターニエを瞳に映した。パツと見は心配そうな表情なんだけど、面白そうに肩が揺れている時点で色々と台無しだ。アンタは本当に心底外面を台無しにする内面だな。

「大丈夫に決まってる。文句を言ってきたらいつものように殴り合
い上等だよ」

はつきりきっぱりと言い切れば、それが嫌なんですけどね。なんてこれ見よがしに肩を竦めるアスターニエ。

仕事が増えるじゃないですか。

という本音をだだ漏れさせつつ、私が書いた文字に視線を落とし
た。

「相変わらず、魔力は綺麗ですよね。女王様は。あ、見た目も美
しいですよ。がさつですけど」

「……一回滝に打たれてくるか？」

「ご冗談を」

語尾を弾ませるな語尾を。

ウインクのおまけ付きなんて嬉しくもないから。

「はぁ…」

アスターニエと話すといつもこう。

何かがつくりと疲れるといとか、ダメージが残るといとか。

「溜息をつくと幸せが逃げてしまいますよ？」

「……………」

言葉を返そうとして、思い留まる。ここで何かを言えばまた疲れる会話の連鎖に突入するのは目に見えすぎている。

冷静になれ。落ち着け自分。

「とりあえず、これ魔王にね。逃げ足の速い子を選んでよ」

「勿論です」

あれ？ 言い返さないんですか？？とばかりのアスターニエの表情は無視して、手紙をその手に押し付けた。

さてと。これから書類整理だ。まったく…。未だに書類整理が終わらないなんて、歴代の女王や魔王たちがどれだけ杜撰だったのかがよく分かるね。

魔族特有のものかとおもいきや、部下は割合マトモだから魔族だからという言い訳は通用しないんだろうと思う。

「女王様。魔王様からの追加のお手紙が届きましたよ」

「……」

またか？

今度はなんだと封を開けてみれば……。

「——だっからっつ。ええい罅が明かない！！ 私劍を持ってるッッ！！！」

だからね。

無駄遣いは私財でやれっつ。

魔界の財政を使うなっつ。

「ではお供いたしますね。ここ最近運動不足だったんですよ」

「……」

一瞬、アスターニエを連れて行くのをやめようかとも思ったよ。
思っただけだね。

「置いていったら、ここで運動しますよ？」

「……わかってるよっつ！！！」

ここまで財政破綻してたまるか。

つまり、アスターニエを連れて行く選択しかないんだけど、言いように使われているような気がするのは何でだろう。

「…はあ……」

ホント、女王って碌な仕事じゃないよね。

「だから幸せが逃げてしまいますよ？」

「それはもういい。黙っというて疲れるから」

よし。魔王にやつあたりしよう。

魔王なら大丈夫。

魔王ならいける。

機嫌の良さそうなアスターニエを横目で確認しつつ、私は気付かれないように溜息を落とした。

魔王には悪いけど、渡りに船。

ここはきつちり力ずくな交渉をやらせてもらおう。二通目は、それも覚悟の上だろうしね。

魔界の二柱―魔王サイド（前書き）

魔王サイドの話。

女王はやっぱり苦勞人。

魔界の二柱―魔王サイド

独りだった。

孤独だった。

並ぶべきものは存在せず。

誰も彼もが畏怖の眼差しを向ける。

産まれながらの王。

魔王。

それが、俺を表す言葉。

退屈を紛らわすものなら何でも手に入れた。けれど孤独が埋まる事はなく、一通り手に入れた後は戦いを仕掛けた。魔王である俺と対等に渡り合えるのは、神界にいる神王か神女王ぐらいだろう。

魔界の女王は未だに誕生していない。他の連中が言うには、俺と対になる女王は俺の力が強すぎて中々誕生しないのだろう。　　と言っていたがな。

道理で、本来ならば対であるはずの神王だけでは俺を止められないわけだ。

魔界の女王が生まれなければ、そのまま拮抗が保たれるとか言っ

ていた、が……。

「アンタは馬鹿者かーっっっ！！！」

興味の惹かれるものがなくなり、いつものように神界に攻め入ろうとしたら、突然何かで頭を叩かれた。今までに感じた事のない衝撃だ。

「…なんだそれは？」

見た事もない魔族の、綺麗な女だ。怒りの為眉は吊りあがっているが、その表情さえも見惚れる程美しい。

「これは由緒正しきつつこみ道具のハリセンというもの……じゃなくて、アンタの道楽の為に一々戦争吹っかけるのはどういう見？さ、座って説明をしてちょうだい」

「……………」

魔界の王であるこの俺に説明を、しろ、と？

啞然と見ていたが、側近たちが女を排除しない事に違和感を覚える。魔王に対しての不敬罪なのだが、側近たちは膝を付くばかり。

「……ああ。産まれたのか」

魔王の側近だが、女王の下でもある。単に生まれた領土によって王、女王の側近という単純な括りだからな。女王ならば、魔族たちは何も言えないだろう。

「生まれたはいから。とりあえず先日購入したこれの用途から説明してもらいましょ。ああその前に名前は？ 私はアリアーフィナール・レイメアル・セレンティアラール・カナーリディアード・ランドディアレとかっていう舌噛みそうな長ったらしい名前らしいんだけど、面倒だからアリアかフィナでいーわ」

「…魔王、と呼ばないのか？」

「魔王は役職でしょ。魔王がいいの？」

「……いや。俺も舌の噛みそうな長ったらしい名前なんでな。キイラでいい」

「ふうん。キイラね。覚えた覚えた。じゃ、始めよっか」

そう言って、不敵に笑うアリアの手の下には書類の束。俺が適当に買った物品情報が載ったもの。

全部説明するのか…？

特に理由は無いんだが。それを言ったら、怒られた。

生まれて初めて怒られた。

魔王の俺も怒られるのか。最終的には魔力放出の戦闘になったが、引き分けだった。

そうか。

女王は俺の対だったな。

そうか…。

引き分けになるのか。

「……魔王様。女王様に怒られますよ？」

側近であるキアースに呆れた眼差しを向けられるが、俺は手紙を書く手を止めようとはしなかった。

あれから、アリアとの取り決めで欲しいものがあつたら手紙を書く。という事を約束させられた。別に特に理由も無く、目についたものを片っ端から書いていく。すると、アリアからの返事は至ってシンプルなものだった。

アンタの資財で購入しろ。

却下。

魔界を財政破綻に陥らせる気か。

大体、この三つが定番の言葉だ。時々、公園——というものをアリア発案で作った——に置けるような遊具を書いたりもするのだが、その時は“許可”とやはりシンプルな返事が返ってくる。

多分、これは却下。

人間たちの間で流行っている健康器具というものを適当に書き出し、足の速いものに任せるようにと言葉を付け加えて手紙を押し付ける。

「ふふん。これはただの却下だ」

続けてもう一通手紙を書く。

これも人間たちの間で流行っているものだが、個人用のプールが欲しい、と。キアースがそれを見つめていたが、溜息をついたのが分かった。流石俺の側近。俺が何をやりたいかわかったらしい。

「女王様も気の毒に…」

魔族とは思えない真面目な方なのに、と、ワザとらしくハンカチを目元にあてているキアースを横目に、少し間を置いてから届くように調節しろと言いながら、それを使い魔に押し付けた。一通目は、腹をたてながらも却下だけだろう。

だが、続けざまにきた二通目の手紙には、アリアの事だからきくと動く。

「俺の剣を出しておけ」

「……壊さないで下さいよ。女王様は考えてくれるでしょうが、魔王様が気を使わなければ結局城が壊れてしまいます」

「わかってる。今度城を破壊すれば、俺は簀巻きという刑に処せられるらしいぞ」

「……魔王様が簀巻き……」

キアースが、呻いた。心底疲れるとばかりに。

神界に攻め入るとは別の理由で、最近側近たちが疲れているような気もするが、俺はまったく気にならない。

「楽しいだろう。アリアは、俺にそんな口を聞けるんだ」

「女王様ですからね。俺は結界を強化してきますので、魔王様は外

のテラスで待機していて下さい。結界強化を無効にされてしまいますからね」

慣れた動作で指示を出しながら、細めた目で俺を見ってくるキアース。お前も、最近俺への扱いが雑になってきたな。アリアの影響だろうが。

「まあ、いい。アリアの好きなものを用意しておけよ」

運動の後の食事は、また楽しいだろう。

俺の言葉に、キアースは膝を付いて頭を下げた。

「御意」

その言葉を残し、出て行く。

「さて、いつ頃付くかな。もうそろそろ、か」

剣を腰に差し、俺は一瞬でテラスに移動して空を見上げた。
いい天気だ。

これなら、運動をするに申し分ない。

きっと、アリアも気に入るだろう。

箱庭の住人 a r c o i r i s (前書き)

V R M M O R P G からの転生もののプロローグ。

案の定主人公は最強キャラ+かっこいい女性。

短編の箱庭の中の異世界の設定を少し使いつつですが、まったく違う話です。

箱庭の住人 arco iris

VRMMORPG。

最近ではやっていない人の方が珍しいオンラインゲーム。
そんな数多の中の一つ。

【アルコ・イリス】。

コンセプトは仲間達と旅に出よう、の一言に尽きる。ギルドカードを交換し、一緒に冒険に行くと友好ポイントが溜まっていく。

顔見知り。知り合い。友達。親友。無二の友の五段階。無二の友にまで行くには、どれだけ冒険に出かければいいのか。攻略した人の情報によれば、クエストクリア回数が1000回とか。ただ回数が決まっている割に、落とし穴もある。初めは初期クエストで上っていく友好ポイントだけど、段々と初期クエストじゃ上らなくなってくるのだ。

つまり、無二の友を得たプレイヤーは上位プレイヤーという事になる。そしてその無二の友システムだけど、これになる利点は自分がイン出来ない間も一緒に冒険に連れて行って貰えるという事だろうか。

自分がインしてクリアする程ではないにしろ、経験値、金貨、アイテムを貰えるのだ。運がよければレアアイテムを入手出来たりもする。まあ、これは幸運値が最高値じゃないと無理だという話だけど。

そういう理由から、アルコ・イリスではカードの交換の頻度も高い。
高い、が、中にはやっぱり変り種もいたりする。

つまりは上位ソロプレイヤー。

アルコ・イリスは複数を想定しているクエストを多数用意しているゲームなだけに、単独行動は相当キツイものがある。なのに、それを持ち越えて上位に食い込むプレイヤーの根性は斜め上に突き抜けているのかもしれない。

周りからは疑問しかあがっていなかったソロプレイヤーだが、発売から3年。運営側が密かに上位の変り種ソロプレイヤーに向けて発信された事がある。

ソロでなくとも上位プレイヤーには色々な特典があるのだが、ソロプレイヤーだけが得られる種族や称号やスキルが存在するという事。

その情報は瞬く間にプレイヤーの間を駆け巡ったが、今更ソロに鞍替えしてまでその種族を得たいかと言われると難しい所だろう。

幾度と無く繰り返されたアップデート。

それによって上位プレイヤーのレベルは3000。最高レベルに達したソロプレイヤーだけが得られる特典。

だが、今更それを目指そうとするプレイヤーの数は限りなく0に近い。

ギルドカードを確認しながら、変り種と称される私はにんまりと笑ってしまう。

カード交換をしたプレイヤーとの冒険回数は0回。ただの顔見知り。ロビーで幾ら情報交換をしようとも、冒険に出なければ友好ポイントは貯まらない。

最高レベルの特典の居城の椅子に深々と腰掛けながら、私は運営から届いたメールを読み返す。これから特典種族を決めようと思うが、勿論無差別に変えられるわけじゃないのだ。自分が選んだ種族

のみ。

亜人が突然精霊になったりする方が驚きだから、それは別に構わないけれど、幾つかあるから少し迷うんだよねあ、頼杖をつきながら息を吐き出す。

私の今の種族は竜族。

ソロじゃない最高レベルの竜族だと、竜王（火・炎・水・土・風等が付く）だけだったんだけど、ソロの場合は古代竜王や光や闇の竜王になれるらしい。他には神竜王や魔竜王。

ソロプレイヤーの竜族は10人程。その中で最高レベルに達しているのは私を入れて二人。残りの八人はそろそろソロ脱出をすると言っていたから、私ともう一人だけの唯一の種族になることは確定。

「よし。メール書こ」

どうせなら被りたくないし。

そう思っていたら、相手から先にメールが届いた。考える事は同じ、か。居城なのを良い事に、画面を前面に出してじっくりとメールを読み進める。共有スペースでこんな事をすれば、変な人かもしれない。プレイヤーキラーに背後からやられかねない。

「……魔竜か。うん。そのまんま」

魔属性を極めてたから、ある意味予想通りと言うべきか。

そうなると神竜か光か闇か古代か。

魔竜の対のような神竜は却下。光や闇の属性よりも、オールマイティっぽい古代竜王かな。私自身何かに特化しているわけではないし。

ささっと返事を書いて、私は運営からのメールに視線を戻した。メールの最後には招待状がある。そこに触れ、私は特殊な空間へと降り立つ。

真っ白の空間に、金と銀で描かれた魔法陣。

【貴方は竜族ですね】

何処からともなく聞こえる声。

「はい」

それに迷わず答える。

【貴方は何、ですか？】

「古代竜王」

【かしこまりました】

瞬間、魔法陣から放たれた光が私を包み込む。

アバターが変化していくのも分かるけど、それ以上に数値が塗り替えられていくように変化していく事に驚く。

限界値とされていた1000。それをあっさりと陵駕していく様を見ながら、王は半端じゃないなあ、なんて他人事のように呟いた。この分でいくと、最高レベルのプレイヤーたちの数値も見てみたいと思うけど、きっと詳細は明かさないだろう。私も明かすつもりはないし。

中性的な容姿や色彩はそのまま。見た目で特に変わった所はない。

竜化すればその変化は恐らく分かりやすいんだろうけど、竜人のまま変化はしないでおく。やっぱり人の姿の方が動きやすい。

さて、と。

気分的には腕まくりをするつもりで気合を入れる。

これから、ギリギリだったクエストをクリアーしに行くのだ。レアをゲット出来るといいな、何て暢気に呟いた私の脳裏に、突然サイレンが響き渡った。

「――ッ!？」

まさか…。

噂には聞いた事があっても、まさか自分が体験するとは思わない緊急事態がある。ベットに横たわっている本体。つまり身体に異常があった場合に鳴り響くサイレン。

とりあえず落ち着かない気分にしかならないサイレンの原因を探ろうと、私はその場でログアウトを試みた。

居城の場合は何処でログアウトしても問題なし。次回も居城から始まるだけだし。

それだけの話、だったはずなんだけどね。

私の住んでいる場所は、20階建ての18階。

ログアウトした私が見たものは既に炎に包まれた自分の部屋だった。

どうやら、少しサイレンを感じるのが遅かったらしい。

「熱い」

本当に熱い。喉が焼け付くよう。

「……四面楚歌」

私はアルコ・イリスをパソコンに繋げ、キーボード操作に切り替える。まだネットが繋がっている事に驚きだけど、最期に目に映るものはこれでいいかな、程度の気持ちで私はただ一人の友人にアイテムを送った。

プレゼント。

魔竜王になった彼なら、きっと役にたててくれるだろう。

自分の最期がこれなんて。

上で見ている家族はどう思うだろう。

次があったら、もう少し対人関係のスキルをあげよう。
だから、今回はこれで勘弁してね。

そう思っていたら、友人からメールが届いた。

レアアイテムの贈り物。

「……ばっか。ただ受け取っておけば、良かったのに」

請求したわけじゃなかったのにね。
やっぱ、わからなかったか。

でもいいよ。

最期に、これをもらっていくから。

ぷすぷすと嫌な音をたてているパソコンの画面が、最後にキラリと光る。レアアイテム入手のエフェクト。

あー。派手だね。

初ゲットだからエフェクトも派手なんだっけ。

まあ、いいか。

またね。

ユラユラと、揺らめいた私の意識。

陽炎のように揺れているのは炎なのか、私の意識なのか。

それとも両方なのか。

ユラユラと揺らめく炎に包まれて。

ユラユラと揺らめく意識に身体を支配されて。

私の全てが落ちていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7379m/>

国見の短編集

2011年11月23日15時47分発行